56
224
事故本
欠ページ
P137～142
'95.7.12

始

1223-63

産婆開業術

久保紫浪著

産婆開業術

久保紫浪著

大正
14. 9. 4
内交

56-224

序

此書題して産婆開業術と言ふ。成程産婆が其業務を遂行すべく開業して依頼者の少なき爲め充分其人の技倆を揮ふ事の出來ないのも心外の至りであろう。多くの依頼者を得て其業務を行つて行くのは愉快な事に相違ない。茲に於てかその技術以外に、産家産人の心理をよく解剖し人情の機微に觸れたる開業術を行ふのも强ち咎むるとではない。著者は之點に關して靜に世の開業産婆のやり方を注意し、學ぶ可き點、注意すべき所、改良すべきケ條等を列擧して見た。之書を讀む産婆諸氏に幾分得る所があるであろうと信ずる。然し著者の此書を著した目的は尙他にもある。一般公衆殊に一家の主婦たる婦人方の衛生上の知識の低級な爲に、知らず

々々行はるゝ種々なる弊害ある迷信を產婆の力によつて打破指導せしめ樣と企てた事一つ。尙一つは學校もしくは養成所を卒業して開業して居る產婆が一度開業するや最早や產婆に關する敎科書參考書を閲し、その道を研究精進しやうとする人が極めて稀なるを見て此等の人の爲め產婆補習敎育の一端にもと種々なる實驗例失敗談を羅列し、研究の忽諸に附す可らざる事を知らしめ樣としたにある。幸に之書を讀む人著者の意のある所を諒し、之の企てを徒爾に終らしめざるを得ば著者の幸之に過ぐるものなし。敢て卷頭に自ら序す。

大正乙丑初夏

藤蔭書屋にて

著者識

產婆開業術

目次

一、產婆禮讃……一
二、產婆と年齡……六
三、產婆と容姿及服裝……三
四、產婆と体質及性質……一六
五、開業地の撰擇……一九
六、田舍式。都會式……二三
七、種々なる產婆の型……三〇
　一、豪い產婆
　二、氣輕な產婆

目次

三、生意氣產婆
四、下女代り產婆
八、舊弊家の妊婦分娩に就ての言草……四二
一、胎兒の位置に就て。一、逆兒を極端に恐れる。一、乳臺を吸ふて胎兒は生きて居る。一、生水と云ふ事。一、會陰裂傷の事。一、後產が辨ひ上る。一、產人は反つてはならぬ。一、吾作の妻はかくして死んだ。一、みつ藥と云ふ事。一、人工營養。一、腹帶の事。一、按腹の事。一、姙娠中の病氣は子の爲めだ。
九、巧みなる自家廣告……五八
一〇、御出入り者……六〇
一一、土地敎育——衛生講話……六二
一二、眞の流行の奧儀は技術の熟達……六五
一三、醫者の氣に入れ……七〇

一四、種々なる實驗例……七二
一、頭、兩手、胴の半迄娩出して後が金輪際生れて來ぬ
一、破水せぬ內に子宮が脫出しました
一、尿道膣瘻
一、小人島のお產
附り醫師の一言から起つた悲劇
一、骨盤骨腫
一、外陰部に脫出した胎兒の小腸
一五、產婆は同志相集りて坐談會を起せ……九一
一六、臍帶の處置……九三
一七、百日の說法屁一つ……九五
一八、產婆の使用する消毒藥及其他の藥品……九七

一九、麥角の濫用……九九
二〇、鹽釜の護符……一〇一
二一、ビッイトリンの偉效……一〇三
二二、產婆器械材料表……一〇五
二三、分娩具……一〇九
二四、恥かしい思ひをさせるな……一一一
二五、胃病に目鼻……一一三
二六、產婆を殺してやりたい……一二六
二七、分娩手帳……一三四
二八、姙娠月數の算定……一四六
二九、命名の宴……一四九
三〇、男女の鑑別……一五二

三一、排尿と排便……一五五
三二、努責と陣痛……一五七
三三、陣痛微弱……一六〇
三四、產婆助產料及往診料……一六二
三五、分娩直後の狀態に注意せよ……一六四
三六、墮胎の相談……一六七
三七、坐產と寢產……一七一
三八、吾作の家內は御近所の親切が殺したのだ……一七三
三九、恐ろしい出血と手當及其實例……一七九
一、前置胎盤と其實例
二、胎盤早期剝離
三、母さんを返せ

目次

四、流産
五、之はマラリアだろう
六、葡萄狀鬼胎の分娩
七、恐ろしやシンチチオーム
八、後産期の出血
四〇、初生兒暈硬症とメレナ……二〇四
四一、鷽口瘡と風眼……二〇七
四二、頭血腫と産瘤——腦ヘルニア……二〇八
四三、人氣取り。洗ひ物……二一一
四四、看板廣告……二一四
四五、産婆にピストル——富豪の我儘……二一七
四六、後家の流産——職務の秘密……二二二

四七、妊娠中の攝生法の申し渡し方……二二七
四八、乳揉み——人工營養法……二三〇
四九、乳母の撰擇……二三二
五〇、産婆と娩出術……二三四
五一、消毒の意味……二三七
五二、無痛安産法……二三九
五三、難産に際し患家に對する心持ち態度……二四一
五四、産婆に必要なる手技……二四三
1、灌腸法。2、導尿法。3、注射法。4、罨法。5、洗滌法。
五五、古血と云ふ事……二四八
附り血の道、血の狂ひ
五六、觀音樣の申し子……二五〇

目次

五七、狂のお産……二五六
五八、沐浴と迴診……二五八
五九、産後のもつれ——産褥……二六〇
六〇、胎盤の遲延と産褥熱……二六二
六一、産婆、看護婦、醫師、患者アラ探し……二六五
六二、産婆になるにはどうすればよいか（産婆志望者の手引）……二七六
六三、死産証書及死胎檢案書の書き方……二七九
六四、産婆規則……二八五
六五、産婆名簿登錄規則……二九一
六六、産婆試驗規則……二九二
六七、産婆受驗人心得……二九四
六八、産婆試驗願書書式……二九六

六九、産婆が是非心得置く可き刑法の二三……二九九
1、秘密を犯す罪
2、過失傷害の罪
3、墮胎の罪
七〇、警察犯處罰令摘要……三〇三
1、廣告に關するもの
2、人心惑亂に關するもの
3、胎兒標本貯藏に關するもの
4、妊娠の招きに應せぬもの

産婆開業術

久保紫浪著

一、産婆禮讃

昔の婦人は只育兒家政と云ふ事のみを專念に行つて行けばよかつたのである。夫は外に出て職業を營み、女は内に居つて子女を養育し、家事万端を遺漏なく、とり行つて行くと云ふ事のみに滿足して居つた。近來とても無論女の本分として子女を教養し、家政を治めて行くと云ふ事は等閑にしてはならぬ事ではあるが、尚一層進んで女子も家政以外に自己に一定の職業をもつて、夫の病氣失職、その他不時の災難に備へ、家族をして常に安神して生活して行ける樣にすると云ふ風潮になつて來たのは誠に結構な事である。昔の婦人の樣に、財産の

ある家は兎に角、無財産の家では、家の中心になる主人に病氣とか失職とか又は死亡とかの不幸に遭遇した時子供はまだ小さし、少々の貯へがあつてもトテモそんな事では生活して行けないと云ふ場合、僅に賃仕事位をして細い煙を立てて行く樣では、子女の教育も充分に出來ず、朝夕その身の薄命を嘶つのみで如何ともする事が出來ないと云ふ樣な慘めな境遇に陷らねばならぬ事は屢々實世間では見受ける處である。斯ふ云ふ場合にその人に一定の職業即ち身に藝があつたならば、どれ程家族のものは助かるか知れない。特に當今の樣に、世の中の生存競爭が激甚になつて來ては、女子としても只家事を治めて行く丈で滿足して居つては、中産以下の家庭では非常な困難に陷らねばならぬ。そこで大分女子の職業と云ふ事に世間が注意する樣になつて來て、今や男子の職業の範圍に迄女子が侵入する樣になつた。女の譯長が出來たり、外國では女の辯護士、女の代議士なども出來て居る。其他女繪師、婦人記者、女教師、女事務員、近頃では女自動車運轉手、女飛行士、女の郵便配達迄も出來て居る。尚此の外に女の職業としては枚擧に遑ない程ある。將來は尚益々女子の職業は進んで行つて、凡そ男子のなす職業はすべて女子も行ふ樣になるに相違ない。然し考へて見ると、女と男とは生理的に身體の構造も性質も違つて居る、如何に生存競爭が激しくなつて來たとは云へ、到底男子と同一の職業を女子が悉くやつて行けるものではない。女には一ヶ月に一度は月經と云ふものが來潮して男の如き働きが出來ない、又女は人の妻となれば、どうしても姙娠し分娩し育兒をしなければならぬ、之は女子の天分として忌む譯にはゆかない、だから女子の職業も結構ではあるが、男子に妊娠分娩を代つてして貰ふ事が出來ない以上、どうしてもその職業を擇んで、女にふさわしい適當のものでなければならない。そこで産婆と云ふ職業はどうかと云ふと、凡そ種々の女子職業もあるが此の産婆の職業程女子に適した職業はない。第一、お産と云ふものは女のするもので、男で助産は出來ない事はないが婦人が好まない。第二、産婆になるには他の職業の樣に多くの年數と費用と高等の學問素養を要しない。第三、其れにも拘はらず收入の點から云ふと、多くの費用と長年月とを費して高等教育を修得し中等以上の學校の教師になつて居る人々、又は小い時から苦心と辛棒をして來た職工などより多大の收入を取る、田舍でも一ヶ年三百や四百の分娩を取扱ふ産婆さんは珍らしくない、一度の平均五圓として四百で二千圓、その半分として千圓、所が都會などでは平均一度の助産料五圓位ではない、

十圓廿圓、甚だしいのは數百圓と云ふ助産料を支拂ふ成金達も少くない。第四、尙之の職業の性質から考へると、之は又非常に尊とい職業で、妊産婦の爲めには神樣とも佛樣とも云へば云ふ可き仕事で、眞逆間違へば母子諸共命を捨てねばならぬと云ふ悲慘な事になるのを、産婆の周到なる注意と巧妙なる技倆とで母子とも無事に經過すると云ふに至りては其責任や重大、其効蹟や誠に神とも佛とも稱へ樣なき尊とき職業と云つても過言ではあるまい。昔からとりあげ婆さんなどと卑しむ可き、地位の一段低い者の樣に云つたのは其の職業の卑しいのではなく、之を行ふものの人格の低かつた爲である。實際又從來の免許産婆なる者は産婆學の如何なるものかを知つて居る譯ではなし、妊娠分娩産褥の學理及取扱ひ法など合理的な事は皆目頭になく、只素人の稚經驗がある位のもので、或は時に墮胎などと云ふ不都合な事もすると云ふ、非道い奴もあるのだから、使はれる方にもそんなに自分の職業に抱負と責任がある譯でなし、使ふ方にも只産の事を知つて居る下女位に思つて居つたのである故、社會的の地位の低かつたのも致し方のない話である。然し現今の産婆、即ち助産婦なるものはそんなつまらぬ輩とは異り、一定の學理と實地と國家試驗とを經て來た堂々たる人々であれば、昔のとりあげ婆式に自らも考へてはならぬし、世間もそんな考へで今の助産婦諸氏に對すべきではないのである。然しかく云つたからとて俄に威張り返り、鼻が高くなり高慢不遜な擧動があつてはならぬ。所が左樣に地位あり學問あり抱負ある所謂新進氣鋭の新産婆さんが社會に立つて門戸を張るに及んで、どう云ふ結果を來して居るか、世間は之等新産婆さん方を遇するに如何云ふ風であるかと云ふと、之は又意外、下女位に思つて居る舊産婆より信用を置かない、處にも依るであろうが、多くの地方では新知識の助産婦諸氏より舊式婆さんの方が助産の取扱ひが多くて、世間一般の氣受けがよい、大都會の堂々たる病院醫院で經驗を積んで來た助産婦さんの門はいつも雀羅を張つて閑古鳥が啼いて居るのに、舊式婆さん、日も尙足らずと東奔西走して御座る。不思議な事もあればあるものである。然しよく考へて見ると不思議でも何でもない、そこに一つの原因がある。其原因なるものを知らない故不思議に見ゆる。敢て舊産婆と新産婆との間許りでない。新助産婦同志でも一方はよく流行してあちらからもこちらからも引つ張り凧になつて流行して居るのに、一方は世間の人が見向きもせず麥稈眞田や針仕事の内職、百姓仕事の手傳ひなどして本職は一向振はない。同じ素養と腕とを以て、何故かくも不

同不公平があるか、他なし、之れ其産婆達が開業術を知らぬからである、醫師でもその通り、學力素養の優れた博士先生方の門前は雀が巣を作つて居るに肩書も何もない開業醫先生の門前は市をなして居ると云ふ事も珍らしくない。之は何故であらう、種々なる原因がその間に伏在する、之等の原因を總括して云ふと開業術を知るか知らぬかと云ふ事に歸着する。では開業術とは全體どんなものか。別に何の奇もなく不思議もない。以下述ぶる樣な事柄の總稱である。

二、産婆と年齢

産婆業は産婆規則の定むる所により、年齢滿二十歳に達すれば、資格あるものは誰でも開業は出來る。然し醫師と同樣、あまり年の若いのは産家の信用がなくて都合が悪い。醫師でも其腕が立つや否や、學識があるや否やは第二に置かれて、先づその人の年齢があまりにお坊ちやんの樣に若すぎると、あんな孫の樣なお醫者さんに大事な命を任すのは劍呑だと、誰もが後退りする。たとへその人が年とつた醫師より技術學力は遙かに優つて居つても仕方がない。ナニ俺は年こそ若いが仕事をさせればアノお父さんの樣な醫師には負けないと傾程力んで見ても世間が相手にして呉れなければ何にもならない。之と同樣産婆とても大丈夫な〳〵な妻や小供の命を任すのだもの、まだうら若い肩揚のとれた許りの娘さんには任されぬと云ふのは無理のない話。又一面から考へると世間がそう云ふのにも一應の理由もある。あの醫師はまだ若い、も少し人を殺して來なければ安心ならない、などと飛んでもない事を云ふ意味は經驗が足らない、年とつた人は屢々失敗して人も殺して來た、大分經驗が出來て居る、と信頼されるのであるが、實際二十歳やそこらで始めて資格があるからとて開業しても手につけた妊産婦は少し世人が劍呑がるのはチットモ不思議はない。早い話が皆さんが靜かに自分が妊娠して、さてどの産婆の世話にならうと考へたと思つて見ると、その人の眼前に現れて來る分娩の介助を依頼しやうと思ふ人は、まだ肩揚のとれぬ紅入りの友染の帶を締めて居る娘さんの樣な産婆でなくて髮に多少の白髮の交つたお母さんの樣な人であらう。此點から考へると醫師でも産婆でもなるべく先方の信頼を得る爲めには勉めてジミに、その着物なり、その髮飾なりをしなければならぬ。又その態度も初々しい、オボコらしい態度よりも

世間なれた、どことなく世帯ぢみてたよりになり相な言葉遣ひや樣子をしなければならぬ。若い内、特に御婦人は少しでもメカシて若々しうなりたいものだが之の職業許りはなるべくジミに年をとつた樣にせよと云ふのだから六かしい、又情けないが職業上そうしないと都合が悪いのだから仕方がない。然し女としては最も青春の、花ならば今や漸く蕾を破つて咲出した許りの廿歳や廿一二の時代に、如何に職業上だからとてジミな伯母さんの樣な服裝や態度をせよと云ふのは無理である。處が茲によい方法がある。それは産婆の試驗に及第する位の人は同種の學問であるべき看護學は大抵修得して居るべき筈である。その看護學を以て當分相當の年齢に達する迄稼ぐのである。廿歳やそこらの若い身空では以上の理由により餘程注意して開業しても産婆としての成功は一寸難儀である。それ許りでなく開業の當初に、あの産婆は賴りにならぬと云ふ感じを依賴者の頭に注ぎ込むと所謂先入主となつてその産婆さんが相當年とつて來ても矢張り賴りにならぬと云ふ感念は除き難い、遂には生涯あまり流行せずに終つて了ふ事になる。其れよりは若々しい花の娘時代或は人妻となつても美しい新妻の時代は同じく世の哀れなる病者の同情者となり世話人となると云ふ、美しい同情的なる女の職業としては、之れ位尊い適當なるものはない、と云はれて居る看護婦の職業に從事して相當の年になる迄待つと云ふのが最も策の得たるものである。斯ふ云ふと、私は看護婦なんかにはならない、看護婦は誠に世間の評判が悪い又私は夫のある身である故看護婦の職は務まらないと云ふ人があるかも知れない。處が其れは間違つた考へ方である。産婆を希望した人が何故看護婦が悪いのであらうか、同じく女の職業として適當で、しかも世の哀れなる病者や産婦を介助する同性質の職業であるのにナゼ一方を好み一方を嫌ふのであらうか。之には理由がある。近來は京阪地方でも至る所看護婦會なるものが出來て、多くの看護婦を派遣して居る、所が看護婦は産婆と違つて女子許りの看護をしない、男子の看護もする、その爲めに若い婦人が獨手放しで日夜男子の側に侍するが爲めに、時とすると風儀上の悪評が時々起る、多くの看護婦の中には思慮の足らぬものも居る、多くの男子の患者の中には行儀の悪い男も居る、爲めに意志の弱い看護婦は遂に慾の奴となつて仕舞ふのが中にはあるこの一二の風儀の悪い看護婦の爲めに看護婦は一般に風儀が悪いと言はるるのである。派遣先の男子が怖ろしい樣なれば産婆としても同樣である。人も通らぬ眞夜中に獨り産家へ行かねばならぬ、産家には隨分行儀の悪

い男子も居る筈である。之等は只その看護婦なり産婆なりの意志の強弱如何にある。京阪地方の看護婦會に就て斯ふ云ふ事があるや否やを尋ねて見ると、それは多くの患者である故、中には隨分失禮な事をする患者もある、然し斯樣な患者は斷然その無禮を叱責して歸る由である、今や京阪では看護婦の數が非常に不足して居る爲めに派遣の申込みは非常に多忙でどの會でも、一日中に五軒や六軒は申込に應じ切れないで斷つて居る、故に看護婦に對して無禮を働いたり不待遇の處はドシ〳〵暇をとつて歸つてもいくらでも他へ派遣が出來る。私には夫がある故派遣が出來ないと云ふ人があるかも知れない、が夫のある人て派遣看護に從事して居る人は非常に多い、かの大都會に於て夫が會社へ出るか又他の職業に從事し、妻が看護婦に從事して居るのは理想的の夫婦共稼である。夫が都會へ出られない事情のある人ならばその地方で妻は看護に從事すればよい。近來は一般人の衛生思想も次第に進歩して、從來は看護婦をして病者を看護させるなど云ふ事は病院でなければなかつたのが近來は一般家庭でも少し重態の病氣には醫師も看護婦の雇傭を勸める樣になり家庭でも看護婦の周旋を醫師に賴む樣になつて來た。將少は田舍でも隨分看護婦派遣の申込は多忙になるに違ひない。特に全國到る處の避病舍は、之が開けたら直に看護婦が必要となる、其れ許りでなく或は種痘或はコレラ、赤痢の豫防注射の介補、或は學校トラホームの洗眼など看護婦需要の傾向は益々多くなつて來た、扨又その收入から考へると之程女子の職業として收入の多いものはない、大都市は無論の事、田舍の看護婦會の規定でも普通病一日一圓五十錢乃至二圓傳染病一日二圓五十錢乃至五圓、そして半日行つても一時間行つても其日の日當はつくのである故朝歸つて午後は他へ行けばその日は二日の日當となるのみならず看護料は一定して居つてもその他に心附けと云ふものがある、之の收入は不定ではあるが、之が又非常に大きく規定の看護料より之の方が大きい事が屢々ある、故に京阪地方の看護婦の收入は一ヶ月少くも五六十圓より百二三十圓に達するのである、しかも食料先方持てある故尚更大きい、かく收入の多い事が一面その女の虛榮心をそそり墮落の淵へ導く經路となることもあるが、そこはその人の心次第で、その多くの收入を消費せず貯蓄して置くと二三年の內には小官吏などでは到底及ばぬ蓄財が出來る。現今諸處の看護婦會にも産婆は開業したきも年の若い爲め當分看護婦で働かうと思つて入會し爾來孜々として蓄財し少からぬ貯金の出來た人も少くない、田舍で開業して居る産婆で、かかる

方法で基礎を作り一面その村落の衛生の手傳ひをして村の信用を得、延いては自己の本職の産婆業の信用の基礎を作つた先輩の産婆は考へて御覽なさい澤山ある。

要するに産婆はあまり年若てはいけない。年の若い人はなるべく老けて見ゆる樣にすること、先づ年の若い内は看護婦として働き相當の蓄財と將來産婆開業上必要なる看護上の實地練習を、失敗しても差支ない他處で練習して置く方が得策である、と云ふのである。

三、産婆と容姿及服裝

容姿は天性のものである。花も羞ぢらふ窈窕の美人だからとて徒らに纖纖自慢をすべきでないが人の顏を背ける樣な不美人でも誰を怨まう樣もない。だが産婆としてはあまりの醜婦はチト不適である。特に顏や身體に甚だしい畸形などあつては産婆さんには不向きである。婦人は一般に神經過敏のものであるがそれが妊婦となれば生理上一層感情が過敏になる、俗に昔から云ふ樣に妊娠中火事を見ればアザが出來ると信じて居るなどの類で兎唇などあるとたとへ奇麗に縫つて一寸見て分らぬ位になつてをる人でも妊婦は最もこんな人に接することを忌み嫌ふ。故に顏にアザある人、輕度であつても兎唇などのある人は産婆さんとしての流行資格は先づ落第である。かと云つて眼覺める樣なあまりの美人も一寸考へ者である何故なれば美人薄命は昔からの通り相場、あまり素的な美人だと世の不行儀連中が仲々隅に置いて置かない引く手あまたで、よほどその人の意志が強固でないと恐ろしい誘惑に陷り易い從つてたふとい本業に熱心さを缺ぐ樣になつたり或は産家の家庭に低氣壓の赤玉を出す樣になつては流行の要素に缺ぐる所が出來はしまいかとも心配される。夫れ故先づ中等程度の美人か十人並の容姿を具備して居る人が最も流行の素質を持つて居ると云ふ事になるが之は仲々六かしい條件である、否々十人並と云へば或は却て最も都合よき條件であるかも知れない。

それから衣服であるが之も前項に述べたる通りなるべく老けて見ゆる事が産婆の得策なれば從つて衣服も地味にする必要がある。女優か藝者の樣にクラブの厚化粧でならばまだしも産婆の言葉で云へば未熟胎兒の顏に胎脂がついて居る樣な化粧振で髮は腦天を七三にとき分矢狀縫合の現出した樣な所謂女優髷でケバ〳〵しい柄色

の着物を着てシヤナリ〳〵と遣つて居つては先づ以て分娩の依頼は願ひ下げにしたくなる。職業が職業である故若くとも白粉氣の全くないのを貴ぶ髷も普通の束髪が最もよく衣服は派出なものよりは清潔なスガ〳〵しいしやうしやな服裝が最も心地がよい、然し又あまりの無頓着で襟垢の光る潮風に吹かれた樣な衣服に手術衣も白と云ふより灰色と云ふのが適當なと云つた風では其人の腕迄が汚れて居る樣な不快な感を產家の家庭に抱かれる恐れがある。特に產婆は其仕事を消毒嚴重に殆と無菌的に遂行しやうと云ふのに手術衣は破れ汚れ爪垢は新豆がおはぐろ附けた樣な指頭ではその人の技倆の程も實際に疑はれ從つて流行などとは思ひも寄らぬ話となる。されば衣服は華美な上等物はいらない身分相應洗濯物でも宜敷い、垢のつかないサツパリしたものを着ると云ふ事を心掛けねばならぬ、尤も醫者も產婆も同樣その職業上特意とする病家產家の富の程度により一概に木綿の洗濯物許りがよいとも限らない。こんな話がある述者の知人の妻君、初めて岡山へ行つて病らひ近所の醫師にみて貰ひに行つた所出て來た醫師が衣服も粗末で紺小倉の色の剝げた帶を締めて出て來たので初めは代診かと思つたが、聞けば院長であつた由、之を聞いて何だか貧乏らしくその藥も效かない樣な氣もちがして

他醫に轉醫したと云ふ話がある。一流の、天下に知られた大家は粗末な風をして居つたら却て人が敬慕するがまだ名も知れない者が粗末な風をしてはその技倆迄も貧弱に見らるるおそれがある。醫者や產婆は先方の信頼を得なければ仕事を完全に遂行することは六かしい、されば他の職業とは少しく趣きが違ひ身分不相應の贅澤はいけないが、少しは衣服調度を張り込んで上等物を撰ぶ必要も全然ないではない、只くれ〳〵も注意を要するのは輕佻浮華に流れぬ樣シツクリした上品な風をすることである。尙一言注意すべきは指輪である時計などは金時計を持つても宜しいが產婆で金の指輪などを入れて居つては識者の眼から見るとその產婆の技倆は先づ劣等と見らるるのである。言ふ迄もなく豫防消毒のやかましい現今の我醫界、特に產婆學では產褥熱の豫防上手や器械は嚴重な上にも嚴重な消毒を要する、流行の產婆は殆ど終日手を消毒して居らねばならぬ、金指輪など入れて居つてはたとへ消毒の時之を拔くとしてもそんな心得ではどうして完全に消毒が出來やうか、之の點に於て指輪を差して居る產婆は眞に流行する資格はないものと斷定してよいと思ふ。

四、産婆と體質及性質

朔風肌をつんざく眞夜中に患家よりの招聘に應じてねむい眼をこすり乍ら出て行くと云ふのは誠に身を切る樣に辛い。辛いと云ふのが眞實て辛くないなど云ふのは嘘の皮だ。だが招かるる此方より招く方の辛さは又一層である、誰しも寒い〳〵夜ふけに人を安息の睡りより叩き起して來て貰ふのは誠に氣の毒に堪へないには相違ないが、家族生死の苦しみを見ては醫者産婆を叩き起す苦痛を考へても居られず止むを得ず遠慮氣兼ねして來診を乞ふのである。斯ふ思ふと自分の天職の上から辛いなどとは言ふては居れない急ぎ用意して飛びだすのである、が然し人間は横着なもので温かい床からはひだす時こそ辛いとも思ふが、さて表へ出れば最早さほどでもない、然し嘸悪く一夜に二三度も床に入れば起されヤット寢入ると又起されると殆ど一夜少しもねむらず過ごすことがある。他の職業なれば明日一日は疲れた故を以て休まれもしやうが醫師や産婆は多くの患者産婦初生兒を預つて居る、自分が疲れたからとて之等の哀れなる依頼者を拒絶することは許されない、されば時と

すると二三日に亘つて少しも安眠が出來ない事が屢々ある。特に産婆は醫師よりは一層夜間の勤めの時間が長い、醫師ならば一寸病氣の診察手當をして投藥して置けば歸つて休まれもするが、産婆はそうはいけない、招かれたら大抵は兒が生れる迄は、たとへ日が暮れ樣が夜が明けやうが産人が苦しめば苦しむ程慰撫し介助し心と身體を使ふ事は並大抵ではない、茲に於てか余程身體の強壯なるものでなければ勤まらない。後段述ぶる如く、特に田舍に於ける醫師や産婆は勞働者である。自分の預つて居る患者産婦は足を摺古木の樣にして數々見舞つてやる程人氣がよく、よく流行する、されば身體の虚弱の者は前夜の難産に身神共に疲れはて、その日一日行く處をやめて休息する必要があるが、そうすると來診を待に待つて居る産家は待ち呆けを喰はされてあまり善い氣持はしない、産婆でも醫師でも一般人に氣受けがよい程大流行する、反感を抱くものが多ければ玄關は自と淋しくなるものだ、かく考へ來ると少々の疲れは物ともせず、行くべき處は屹度行くと云ふ頗る強健なる身體の持主は流行産婆の資格の一つを備へて居ると云はねばならぬ、從つて之に反するものは落第である。以上は身體の強弱であるが更に精神の狀態即ちその人の性狀の如何も産婆流行の一要素を作る。人の性質も亦

容貌と同樣、殆ど天性である。然し性質は容貌とは違つて生れつきとは云へ多少は修養によつて變化し得るものである。一般に氣むづかしく、人附きの惡いと云ふよりは、誰にでもサラ〳〵と言葉をかける氣輕な人に接するを快よしとする、産婆は特にこの人附きのよい極めて氣輕な事を第一の要件とする、その上どこか親むべき中に犯すべからざる威嚴を備ふる必要がある。あまりに氣輕に過ぎて多辯なるは品惡しく輕々しく人の依賴心を起さしむるに足らない、かと云つて勿體ぶつて無口でいつも澁面作つてシンネリムッチリして居る樣ではその人に接しても氣がつまる樣で面白くない。誠に氣輕で人附きがよく、いつも快濶によく語りもするが時には激しい言葉で叱り罵りましても、何となく親もしく慕れると云ふよりは服すると云ふ威嚴を備へて欲しいのである。實際産に臨んでは常に、よほどたしなみのよい人でもあまりの苦痛に不謹愼の我儘を云ふ時が數々ある。そう云ふ時に産婆の一言が産人を親もしく威壓し得る丈の修養はどうしても産婆には必要である。かかる注文は仲々六かしい樣に思はるるも知れないが、人の修養習慣は恐ろしいもので、常にその心持で修養を積んで行けば、いつとはなしに左樣云ふ性質の人となり得るものと信ずるのである。何事でも人より一頭地を拔く樣になるには一通りの苦心は入るものである。

五、開業地の撰擇

大阪でも神戸でもすべて大都會で醫師が開業して居る有樣を御覽なさい、狹い一町内に幾軒と云ふ醫師が開業して居る、甚だしい處では三軒四軒軒を並べて玄關を張つて居る、ナニもあの樣に軒を並べなくとも醫師の無い所へ行つて開けばよいものを、他の道具屋さんとか呉服屋さんの樣に、この店になければ次の店を探すと云ふ便利があると云ふ譯ではなし、あの町は醫者町だから醫者にみて貰ふにはあの町へ行かねばならぬと云ふ樣に、殊更に醫師許り集まつて居らなければ患者が來ない譯でもあるまい、却て附近に醫師のない邊鄙で開業する方が、そこらの病人を一手に引き受けて診察し得る故その方が得策である樣に思はれるのであるが事實はそうではない樣である。丁度魚釣に行つた人が、ある一所でよく釣れるから釣つて居ると、後から來た人もまたそこで釣る、その後から來たものも亦そこで釣る、あとから〳〵と澤山の釣手が皆そこに集まつて釣つて居る

が皆よくつれる、所が一番最後に來たものがアンナに一所に大勢集まつて釣らなくともよさそうなものだ、何にもあすこ許りに魚が居ると云ふ譯でもあるまいし、外の所にも釣れる所はあらう、自分は一つ他の所で彼奴より一人離れて餘計に釣つてやらうと、その釣人の群を離れて他の所で一人釣つて居つたが、夕方歸る途で御互に魚籠の魚を較べて見たらやはり一人離れて居つた方が少くて多く集まつて居つた方が獲物が多かつたと云ふ樣な話がよくあるが、それと同樣人の多く集まる所にはやはり何か好い事があるに違ひない、だれもが開業しない邊鄙は誰もが開業しないと云ふ缺點があるに相違ない、故に開業する初めによく之等の點は攻究してからかからねばならぬ。然し初め開業した所でどうしても流行しない爲め意を決して他へ移轉すると、そこでは意外に患者が來て大流行すると云ふこともあるが、それは最初に開業した土地に何か缺點があつたのに氣が附かなかつたからであつて、初めからよく調査をしてそんな土地では開かなかつたらよかつたのである。たとへ一年でも二年でも無駄に年月を費やしたのは非常な不得策である。醫師でも産婆でもその土地に馴染が出來て多くの人が知つてくれなくては患者は來たくとも來られない、それ故彼處此處と常に移轉して居つては土地に馴染がなく、いつまでも流行しない、よく初めから調査して此處と思つた所はなるべく移轉せぬがない、以上は醫者でも産婆でも同樣であるが、然し茲に又一つ考へねばならぬ事がある。成る程一ヶ所に多くの同僚が開業するのは、確にその土地が患者の來よいとか、人數が多いとか、何かよい所がある爲めではあらうが、それは都會での話で、田舍ではなるべくその村なり町なりの妊産婦を獨占が出來る樣な土地を擇ぶのがよい、無論開業地の擇び方が違ふ故その開業の手心も都會と田舍とはその趣きを異にせねばならぬが、その土地の一定の勢力範圍を獨占が出來る爲めには。第一、その土地に昔からの緣故があつて欲しい、例へば自分の鄕里であるとか、――但し鄕里で開業するには一定の年齡に達する迄實地の練習を他の土地でやつて來る必要がある。醫者所で流行らずで、その土地で成長した人は、その地の人がその産婆の小さい鼻たらしの時代からのことをよく知つて居つて、年が相當になつて居つても土地の人はまだ小供の樣に思つて居つて、えらい人と信賴するに足る樣に思はせる點に於て少し都合が悪い故にあまり其地では失敗せぬ樣あまり小供らしく思はれぬ樣に他の場所で充分腕をみがいてから歸鄕して開業する方が安全である。その代り

その土地で生れた者は一旦信用を得たならばその地盤は仲々強固で、他から新開業のものが飛び込んで來ても得意は動かない。第二、その村に第二第三の新産婆が出來る見込みのない所がよい、自分の地盤が充分強固になつてからなればよいが、まだ地盤のかたまらぬ内にその土地出身の新産婆が歸つて來て開業する恐れのある樣な所は不適である。都會と異り田舍では狹い村狹い町に二人三人の同業者があつては自分の取扱ひする數が少くなるのは明かである。第三、出來得る限りその土地の衛生上の手傳ひ例へば種痘或は豫防注射等は骨身を惜まず働いてやり、傳染病患者などの出來た節は出來得るならば看護婦として手傳つてやれば益々その村の信用は厚くなる。第四、なるべくその地の多くの人に馴染となり心安く、小さい小供でも顏を見れば誰某産婆だとすぐ知つて居る樣になる事。以上の樣なことが容易こ出來得る土地を擇ぶのが産婆流行には最も肝要である。そして出來るならば小村より大村、貧村より富有な村、即ち農産物海産物其他産物の豐かな製造工業の盛な土地がよい、尙その村許りでなく隣村にも産婆のない所なれば尙更結構である。とにかく開業地を撰擇すると云ふ事は流行不流行のわかる處で、一度意を決して開業した以上は容易に動かぬ方が得策である。以上は輕々しくその土地の狀況を調査もせず開業しては將來取り返しのつかぬ損失となるものであると云ふ事を述べたのであるが、開業すれば古く長くして居るもの程信用が厚いのである故所々に移轉して居つては一所に居る年月が短かい故從つて信用も薄い道理である。信用が薄弱なと後からもし有力なる新産婆が出來て來るとすぐ敗北して逃げ出さねばならぬやうな不幸な事となる、故に開業地の撰擇は産婆開業の初めに當り第一に頭をなやます肝要の基礎たるべき問題である。

六、田舍式。都會式。

醫師でも産婆でも同樣であるが。醫師は患者を治療し産婆はその醫師の仕事の一部分たる産科學の一部を行ふのであつて、妊娠中はその妊婦の健康及びその經過に異常を起さぬやう、分娩に際しては短い時間に樂々と安産し得るやう、産褥中は母體の恢復が障害なく早く復舊し得るやう、初生兒も障害なく成長するやうに介助を與へ注意々すると云ふ根本の仕事には都會だからとて田舍だからとて何の區別があらう筈はない、がその根

本の仕事をやつて行く方便に於て異るのである。醫師でも產婆でも一旦之を自分の職業として行く以上はその依賴者が寂々寥々として徒らに門戸は開ひて居つても、依賴者が曉天の星のやうにしか來ないやうでは誠に心細くて不愉快なものである。門前市をなすやうに妊產婆が蝟集するやうであれば心地よい限りである。成る程一面から考ふれば人の勢力には限りがある故一人の手で拔ひ切れぬやうな多數の依賴者があつては困りもするし、勢ひ取拔ひが不親切になるおそれがあると云ふ點もあらうが、それは又助手を置くとか何とか方法もあらう、とにかく多くの人に賴まれると云ふ事は多くの人が自分でなければならぬと、自分に對する世間の信用が厚いのである故此れ程愉快な事はない筈である。そこで一寸考へる必要が起る、如何に技倆が優秀であつて人一倍の親切な同情心がその人の心の中に燃て居つてもそんな產婆さんがここに居ると云ふことを世間が知らなければ術の施しやうもないではないか、年月がたつに從つて自然に世間に知れるとは云ふもののそんな氣の長い話で居る譯には行かない、茲に於てか初めて廣告の必要が起る、只その廣告なるものが他の商業のやうに樂隊鳴り物入りの下品な事や、その廣告することが誇大に失した事をしてはその人の人格がさがる、職業が高尙な事であつて決して原價で仕入れた品物に利益を加算して賣つてその差額を利して行くと云ふのとは違ふのである。この所謂下品な商賣氣さへなければ自分の存在を認めしめる爲めに世間が認めて穩當であると云ふ方法で廣告するのも無論惡からう筈もなく、別に新聞廣告や辻はり廣告をしなくともその他の方法で自分を世間に紹介するに何の遠慮がいらうか、かくの如く種々なる方法で自分を社會に紹介し依賴者を多くすると云ふ方法を稱して開業術と名づけるのであるが、この開業術の巧拙によつてその人の盛衰はわかるるのである。當今の世の中は昔の人が云ふやうに仁術を行ふ使命がある者が廣告などをするのは品性の下劣な奴だとて隱者のやうに世間にもあまり知られず高く止まつて濟まして居れるやうなそんな呑氣な時代ではない、生存競爭の激しい生活の脅威は刻々に我等の足下より起りつつあるのである。自らの仁術を人の求むるに任せ置く時代ではない此方より進んで哀れなる被治者を求め、その要求に應じてやるべき慌ただしい世の中になつて居るのである。一旦己れの職とした以上多數の依賴者信賴者を得ずして僅少の人の求めに應ずる位で、つまらぬ業務以外の手仕事をしたりブラ〳〵遊んで居るやうな意久地のない事なれば寧ろ自分にもう少し適する職業と商賣替をする

方が遙かに國家社會の利益になるのである。

以上自分が產婆としてその天職を遂行して行くに當り、下劣ならざる方法を講じて自己の存在を社會に紹介して行くことが必要であるならば、隨所隨時に適應した開業術を巧に適用しなければならぬ、その點に於て田舍と都會とは少しくその趣きを異にするであらうと思はるゝ。總括して云へば都會はその衣食住とも派出であるが田舍は地味である、都會は生活が慌ただしいが、田舍は誠に呑氣である、人の性質から云つても都人は感情が過敏であつて地方人は一般に氣分が悠長である。同じく產婆の業務を行つて行くにも此等の點は大に考慮をしなければならぬ、氣のきいた格子戸附きの表構へに案內をこへば、美しい小間使ひが三つ指ついて丁寧に應對する、通された客間は美しい絨氈を敷きつめ唐木の美しい卓に光淋蒔繪の桐胴の丸火鉢と云つた體裁で、床の間の軸から楣間の額に至る迄相當こつたものを揭げ、絹ふとんの上に端座した先生は應揚に年頃の助手に苦者を進めさせながら客と話をする、イザ往診となれば定紋打つた肱しいやうな自用車に打乘、多くの助手小間使ひに送られながらユツタリと出かけて行くなど云ふのは都會でなければ見られない圖。

今、太郎兵衛の家內が產氣がついて居ります、すぐ來て下さるまいかと、野良仕事に出て居つた手甲脚絆そのまゝの百姓が慌ただしい注進にア、左樣かな、ヨシ行きましやうと裏口の井戸端で洗濯物に餘念なかつた手を拭き〳〵着物を着替るでもなければ髮繕ろふ暇もなく產婆器械入りの袋をさげて車にものらずコツコツとかけつけて行くと云ふ氣輕さ、之も亦田舍でなくば見られぬ圖である。

都會人にこの田舍產婆さんの氣輕さは氣に入らない、何だか貧乏らしい、內のお松どんの方がよつぽど氣がきいて居る、あんな產婆が何取り上げが出來るものか、賴りない限りである、あれは宅へ出入りの誰某產婆の下働き位なれば使つてもよいが、あの人に取り上げを全部任すなんどは眞平〳〵と云ふであらう、又一方田舍の爺さん婆さんに云はすれば、町の豪い產婆さんに昨日も一寸嫁のお產を賴まうと思つて寄つて見たが、いやもうおらが村のお醫者さまでも叶はないやうな立派な家で、奇麗な姉さんが、先生は只今往診で御不在だが御所を承たまはつて置きましやうと云つたが、この分じやお產を賴んだら大枚のお禮がいるだらうと思つたので特別下等で何程で御願ひが出來ますかと聞いたら、お禮はとにかくお所を承たまはつて置きましやう宅の先生

はお禮など、とやかく仰しやる方てはありませんとは言つたが、おら何だかおつかなくつて、いづれ又伺いますと云つて、そのまゝ出て來たが、一體あれは女の御醫者樣か、とりあげ婆さんだらうか、お禮はいくらでもいゝと云つても、あれでは嫁も窮屈で樂なお產が、もめでもすると大變だと思つたて、親まずに歸つたよ、やつぱり此方等はいつもの婆さんに限るよと云ふであらう。

と云つた鹽梅に都會で開業するものは身分相應に玄關をはらねばならぬ、たとへ內實は火の車が廻つて居つても、その住宅、その衣裳、その調度に至る迄、相當に世間體をかざらねばならぬ、都會に開業せるある醫師が同じ資格の田舍開業の友人にこう云つた、君等はナゼ自轉車に乘りなどして往診するのだ、自らの品位をさげると云つたものだ、往診料なども遠慮なく高くとるべし、安くする程患者の信頼は薄らぐよ。と一寸聞くと誠に亂暴な言ひやうだが、よくあぢわつて見ればその中に幾分の理屈がないでもない、他の職業と異り醫師や產婆は患者の信頼の程度如何によつて、その業務上の効績が現れる場合が多い、無論その職業の根本精神たるべき厚き同情ある誠意を缺いではならぬけれども、その根本精神さへ動かなければ時により、所によつて適應したる對策をとつても何等差支のあるべき筈のものではない、されば都會開業者はその態度に於ても、あまりの謙遜に過ぎてはいけない、その話し振に於ても存ざいな朋輩間に用ふるやうな言葉遣ひをしては安く見らるゝ恐れがある、一段高く止まつて大に大家ぶる可しである。

往診料助產料とても眼がむける程高くとるべし、高くとれないやうな貧民には寧ろスツパリとまけてやるべし

尙赤ん坊に着物の一枚も持つて行つて着せてやるべし、そうすれば世間はあの產婆はゑらい、あの產婆は慈善心に富んだ神か佛かと忽ち評判は沸騰するであらう、診察なども馬鹿丁寧にのろ〳〵やつてはならない、敏速に、しかも要領を得るやうにやらなければならぬ。之に反し田舍ではこんな方法は喜ばれない、業務の餘暇には鍬も取るべし、急ぐと云へば常着のまゝでかけつけるべし、上品なハイカラな言葉遣ひよりは、お前がわしがのいけぞんざいな言葉を却て氣が置けぬとて氣に入るべし、園藝だ、文學だ、抱月だ、須磨子だのと云ふ話より、麥がよく出來た、牛が子を產んだ、今夜かかつて居る浪華節劇の藝題の話でもするがよかるべし。

往診料などは出來るならばとらぬがよし、診察は分つて居つても馬鹿丁寧にするを喜ぶ。

之を要するに、都會式ではなるべく邊幅を飾て出來るだけ重々しく、勿體つけて大家ぶり、往診料手術料など思ひ切つて高く取る方がよく、田舍式では万事手輕に、氣輕に足を摺古木のやうにして醋寒と云はず、炎天をいとはず、朝から夕迄かけづり廻れば、あの産婆でなければならぬと引つぱり蛸で、人氣は更に沸騰することは請合である。

七、種々なる産婆の型

一、豪い産婆

人はその顏貌が違ふやうにその性癖に於ても十人十色である。無くて七癖、あつて四十八癖。まさか四十も五十も癖がある譯でもあるまいが人夫れ〳〵に癖はあるもの、持つて生れた性癖や、小さい時から長年の境遇上種々な感化は誰もが受けて居るが、同じく産婆さんと云つてもその性來の氣質があらはれて、見渡す限り樣々なタイプの産婆さんがある樣、中々に面白い。主人は昔の御殿醫格の漢法醫で、廿世紀の今日からは古物扱ひは受けて居つても、御本人はやはり昔の全盛の夢がさめない。時世に取り殘されたみじめさには、御臺所の運轉甚だ意の如くならず、之れではならぬと一大英斷で小引出しのあまたある藥簞笥を廢して、診察室には椅子テーブルの模樣替はしたが、やはり家庭では左樣然らばの三ッ指式の行儀嚴然として、家風は一糸も崩さないそう云ふ主人につれ添つた奥樣なれば、御興入れする前はお里にあつて、英語數學などと云ふ教養は無論あろう筈はないが、女のたしなみの諸藝は何一つ知らぬと云ふことなし、特に漢籍は振分け髪の幼い時から、四書五經と四角い文字をたゝき込まれ、七言絶句位は幼學便覽など見るまでもなく、即座に御家流の達筆を揮つて物するの手腕あり、さては敷島の三十一文字、色紙にでも短册にでも、見事なる出來ばへ、かほど堪能の奥樣ながら、御主人の御氣質柄、貨殖の道にはトンと無頓着、その爲めに主人歿後は多くの小供を抱へて、一時途方に暮れもしたが、窮すれば通ずで、主人在世の折、長年の間見まね聞まねで心得た治病濟生の手心を應用しての産婆開業、十德樣の被布姿に、お茶筌髪も何となう奥ゆかしう、上流の家庭に招かれても、床の幅でも扇

間の額でも、スラ〳〵と讀み下す素養は、とても若い醫學士の比に非ず、歌ごされ、詩もごされ、茶の湯、生花、琴、三味線、何でもござれの四通八達、都大路の道路のやうな精通ぶり。その上本職上の產婦操縱の技倆は、系統的の素養はなくとも、學ばずして通じ、機微にふれたる手腕は中々堂に入つたもの。されば上流家庭の招聘引きも切らず、家には數名の新知識の助手のあるあり、赤貧の九尺二間へは先生、とてもお手が屆かず助手產婆殿の實地練習の實習地となる有樣。御主人在世中不如意なりしお勝手向きも、今は中々の御裕福主人歿後危く丁稚奉公にもやられ想になつた息子殿も、今や帝大卒業して大學院で博士學御修業中と云ふ勢ひである。

二、氣輕な產婆

以上は大分堂々たる產婆さんで、物の言ひ樣、立居振舞、中々御上品で、上流の家庭や一部の人々には此人でなければならぬと云ふ、隨喜渴仰の信賴を勝得る底の產婆ではあるが、一寸之の域には誰もが到り難い。又一面にはチト物事が仰山で、万事手輕に運ばないのと、溫容慈顏であれば別に怖れを抱かれることもあるまいが何となく威壓せらるる樣で、中流以下一般の家庭では窮屈がられて不向きの點もないとは云へぬ、中流以下に最も喜ばれるのは、あまり下卑ではいけないけれども、ザックバランの極めて氣輕な產婆である。もとより前述の如き豪い產婆になると、高貴の家庭、富豪の御產に招かるる故、隨つてその收入も意想外で、一度の助產の御禮が五百金千金と云ふのもないとは云へぬ、中流以下ではそんな多大の收入は到底望まれないが、數が多い故それ相當の收入もある筈である。衣服調度にも金もかからず、小ザッパリした木綿着でもよく、急ぐ時には車でも行かうが、常には殆ばお徒歩で、產家に車代の、車夫に御祝儀のと雜作をかけず。オヤ產婆さん入らつしやい。毎度有難うの挨拶を聞き流し、ズン〳〵奥へはいつて行き、ア、着物なんか着換なくともソノマ、〳〵、今日はどうです、別にお變りはありませんか、ナニお腹が痛いッ？、何時から？、今朝から？、ドレ〳〵、イヤマダ〳〵、之はね、モー大分時が迫つて來たから、赤さんがお母さんと云ふお腹の國から世界見物に出掛け樣と思つて、手荷物やらおメカシやらと、大騷動で準備が初まつて居るのですよ。私の方では之を準

備陣痛とも又前驅陣痛とも云ひます。然しコレがあつたら、もう油斷はなりませんよ、大抵一週間位の內には赤さんの御出發がありませう、ナニ恐ろしいつて、ナンノ案じることがあるものですか、案ずるよりは產むが易いと云ふぢやありませんか、日本の何千万と云ふ人は皆お母さんのお腹から出て來たのぢやありませんか、大丈夫ですよ。大船に乘つた氣で安神してお出でなさい。難產なんて、みんな妊娠中不注意不養生をする人に限ります。アンタの樣に體格はあるし、赤さんの居り具合はよし、妊娠中に少しも故障のなかつた人に、難產なぞがあるものですか、ソレはそうと、何時かも御話のアンタの御同窓の美代子さんね。ツイ一週間許り前に御安產なさいましたよ。オヤまだ御存じなくて、ソレハ〳〵丸々とよく肥つたホントに愛らしいお人形の樣な坊ッチャン。どちらがお早いかと思つてましたが、到々負けましたね、アナタも大抵坊ッチャンよ。イヤ保證はいたしませんよ。もし間違つたら無罪放免。適中したら御褒美に赤ちやんつれてお芝居の御供をさして頂くことにしましやうね……。大變都合のいいことねホ、、、、、。當りさわりのない世間話。その內に、豫報陣痛を敎へ、妊娠中の攝生の大切なることを敎へ、妊婦に安神を與へ、安產の例を示して元氣をつける、と云ふ

風に少しも高ぶらず、雜作をかけず、いつもいきゝ氣輕に、話して居ても氣持ちのよい樣に妊婦に接すると云ふ樣な、か樣な產婦は最も理想的と云はねばならぬ。

三、生意氣產婆

前項述べ來つた二つの型は善良の型で流行に必要なる型である。以下述ぶる二つの型は流行にはチト不向きな不良の型である。生意氣と云ふのは意氣卽ち心が生である、熟して居らない形である。果物でも熟して居らない生では、味もなく、消化も悪く、誰もが好まない。心の未熟は精神の修養が足りない事で、平たく言へば苦勞が足らない事である。果物でも花濟みの昔から長い間、風にもまれ、雨にたゝかれ、日に燒かれ、艱難を積んで人も喜ぶうまそうな果實となるのである。人も種々な苦勞を積んでこそ、その性情も圓滿。誰人にも喜ばれる樣になるのである。特に平生よりは一倍神經過敏になつて居る妊產婦を取扱ふのに、人情の機微を察せずして、修養の足らない我儘、氣障な性情で之に對しては、事毎に先方の感情を害し、信賴の心が離れ從

つて正當なる手當も出來ず、結果も悪いと云ふ事になる。かく言へばとて決して先方に阿諛せよと云ふのではない、佛の樣な大きな心を以て先方の意志を迎へてやらねばならぬ。迎合するのではない、みちびいてやるのである。神經過敏である上に醫學產婆學上に無智である素人なる妊產婦が、不合理なることを云ふからとて一々之を叱責したり議論をして居ては限りがない、行く度毎に喧嘩しに行く樣な事になる。患者や產婦が云ふ我儘氣儘は、病氣や醫學に對する無智が言はすのであると思ひ、同情を以て之に向つてやらねばならぬ。かと云つて只何事を言はれても、ヘイ〳〵、ハイ〳〵と這込む許りして居ては次に述ぶる下女代り產婆となつて、產婆たる天職を恥かしむるものである。或る老練なる產婆は、愈々分娩と云ふ際產婦は苦痛の極、我を忘れて產婆の命を聞かず、合法的の處置を行はんとする際に、之を拒み、爲めに產婦の生命が危いと云ふ時、しつかりせよと聲一番、產婦をはり倒して元氣をつけたと云ふ話も聞く、何も左樣に亂暴に產婦をはり倒さなくともよいが、あまりに產婦に氣概がなく、產婆も堪忍袋が破裂した爲めであらうが、この產婆の常々の行動が信賴するものであつた故に、例へ叩かれても怒りもせず、否怒る所か、すなをに產婆の言ふ事を聞く樣になるのである。之は畢竟常の取扱ひ方に親切味と、眞劍さとが現れて居る故にこんな場合、少々亂暴な事をしても惡意にも取らず、却て後では喜んで呉れるのである。之に反して充分の經驗もなく、熟練した技倆もなく、取扱ひは常に淺薄で、することに親切味と眞劍さとが含まれて居ないと、何となく產婦はその人を信賴する念が起らず、言ふ事を聞かない。此際自分の足らぬ所に氣がつかず腹を立て自分の技倆を仰山に吹聽したり、妊產婦の仕方が悪いと、只もう、ポン〳〵云ふばかりで、自分程上手な產婆は他にないと云はぬばかりに他の產婆の悪口を頻にしやべり立て、ヤレ待遇が悪いの、我儘だの、家がきたないの、蒲團や着物が粗末だなぞと、如何にも自分が上流家庭ばかりに傭はれて居る樣、又自分の生活が常に百万長者の生活でもして居る樣に云ふ。こう云ふと諸君はマサカそんな人もあるまいと云ふかも知れぬが、比較的こう云ふ手合の多いのには驚くの外ない。之は全く自分自身ではそう云ふ行ひをして居りながら氣がつかぬのかも知れない。產婆看護婦たるものは深く戒しめてこんな型にはまらない樣、愼まなければならぬ。この型が四種の種類の内でも最も不良な型でこんな人柄では到底流行など云ふことは思ひもよらぬ事である。以上は眞に心からが生意氣なのであるが、中

には心は誠に親切であり、そう輕薄でもないのに、その態度、その風采が、何となく生意氣で、氣障で、人に反感を起さしむる人がある。之等は誠に氣の毒な人であるが、自分では氣が附かない。か樣な人は自分の友人などに賴んで遠慮ない忠告をして貰ひ、矯正しなければならぬ。とにかく産婆には限らない、女たるものは、外に對して決して生意氣、氣障であつてはならぬ。どこまでも溫良貞淑でなければならぬ。啻に女ばかりでない、溫厚と云ふことは男子でも必要で、溫厚なる人に自分が接した時の快感を考へて見れば分ることである。然しあまりに溫厚なばかりで仕事迄が優柔不斷であつては之もいけない、心の内にはカッチリとした所があつて仕事には目から鼻へ拔ける程の機敏さと悧潑さがあつて、しかも人に對しては春風面を吹くと云ふ快感を與へる底の人が理想的である。然し之等も人の性質の然らしむる所で、之を矯正し樣と云ふのは或は困難の仕事かも知れぬが、流行しやうと思へば困難でも之の點に注意して行かねばならぬ。常に注意して矯正しやうと云ふ考へがあれば、完全に矯正出來なくとも幾分でも自分の缺點を少くすることを得て流行の素地が少しでも多くなる譯である。かう云ふと人によると、産婆は技倆さへ確であれば何も人に接してツキがよいの、惡いの、とそんな事は抑々末である。そんな事は氣にかけなくてもよいと云ふかも知れぬ。然し自分はそれでよくても人を相手にして行く職業である以上、何程技倆があつても以上の如き生意氣産婆では人が毛嫌ひして賴まない賴まなければ賴まれぬと云つて仕舞へばそれ迄である。そんな事を云ふ人に對してはこの産婆開業術の本など讀む必要は少しもないのである。

四、下女代り産婆

之の型は現今の新教育を受けた産婆、即ち助産婦諸氏にはあまりない型で、何れは天保、安政時代の御婆さん假實文字通りの取り上げ婆さんで、産婆學の何たる事など皆目知らない人達に多い。嘗て著者が多くの新舊産婆を多數集めて産婆講習をした時である。試みに初生兒の人工呼吸法の技術について質問を發して見た。婆さん、あなた方は永年産人をとり上げておるが、生れた小兒が生ぶ聲をあげないときは、之を死んだものとして捨てゝ置きますか、どうか、と尋ねて見た。多くの舊産婆の内、最も老たる白髮の老婆は、やおら顔をあげ、

ハイ〳〵、爲は今年で丁度六十年産婆をいたして居ります。ハイ〳〵、出來た小兒が生ぶ聲をあげません時はお箸でお鑵子（茶釜の事）の蓋をたゝきます。之の奇拔なる答辯に、講習生も講師等も一齊に好奇の眼を、この婆さんに向けた。鑵子の蓋をたゝいてどうします。ハイ〳〵、鑵子の蓋がカーンとよい音をたてますとこの兒は助かり泣き聲を上げますが、蓋が鳴らぬと、もう生き返らぬものとして諦めます、と眞面目に答へた。滿場ドット笑ひ崩れたが、婆さん怪訝な顏で、何がおかしい、と云つた樣子であつた。然しか樣の産婆も産婆學の發達した今日迄、六十年の長い間、廢業もせずにやつて居る、しかもこの婆さん仲々今開業の助産婦諸氏よりはよくハヤつて居るとは世の中は不思議な物だ。之等は所謂下女代り産婆の標本で分娩取扱ひ上の知識と云つては「まちぐわり」（陣痛）と「いきみ」（努責）と「うぶ水」（羊水）「よな」（臍帶）「よごれ」（出血）「がにごく」（胎糞）位のもので胎兒は姙娠中は常に骨盤位に居つて分娩時に頭位に顚倒して出てくるもの、胎兒の榮養は胎內で哺乳をして居るもので、夫れ故母親が高い所へ手を伸ばせば「乳かづら」がはづれ、胎兒は榮養が取れない故流産するものと思ひ込んで居る、生れた胎兒は口內より分娩後二三日間は「うぶ水」をはくものので、之をはかぬものは不健康だと思つて居る、腹帶の如きも懸垂腹の豫防で胎位を亂さぬ爲、腹部が冷ぬ爲にするもので、輕く下腹よりつり上げる樣にすればよいのを、さうは思はず、腹帶は胎兒が大きくなりすぎると、分娩が重い故かたく締めつけて胎兒を大きくせぬ爲めにするものと考へて居る、陣痛の如きも開口陣痛も娩出陣痛もなく、分娩の時期に關せず陣痛が起りさへすれば「いきみ」を立てよ〳〵と努責を命ずる、産婦の頭には鹽釜の御符を置いてやり、子安地藏の御洗米を頂かせる。後産期に恐ろしい出血が初まり産婦が大貧血を起し卒倒せんとしても、子宮の收縮狀態の良否を見るでもなく、産人が反けぞつてはいけないと頭部を低くする反對に、頭部を高くして寢かすまいとする、從つて貧血は益々强くなり、遂に脫血の爲めに絕命すると、後産のよなをシツカリ拇趾に糸で結びつけて置いたのに、トー〳〵後産が舞ひ上つて死んだものと思つて居る後産が舞ひ上るとて、幾ら上つても宮底より外へは上れない、もと〳〵宮底に附着して居るもの、上るとて上り樣もないではないか、と言つて聞かせても一途に胎盤が上昇したものと思ひ込んで居る。こんな具合に專門家の産婆が、か樣のふうである故、かゝる婆さんから妊娠中、産に對する知識を注入されて居る産家婦人等は

そのまゝそれ等の事を信用して、醫師や新知識の産婆の云ふ事など少しも耳に入れず、合理的の處置や攝生法をとらうともしない、その代り、かゝる産婆は謝禮も安し、待遇も下女並、出入りもの並で氣が置けず、蠟やしくと氣安い故、從來多年の間分娩について一度も蹉跌をしなかつた家庭では容易にかゝる御出入り舊産婆招聘を改めない。不幸にして一度姙娠分娩の障碍に出會ひ、信用ある醫師が充分姙娠分娩時の攝生處置の合理的取扱ひを說くに及んで、初めて夢が醒ると云ふ次第で、まだくか樣の家庭も世間には非常に多いのである

何れは、か樣なる産婆の命脈は長くは續かないが、それ迄に之等の暗愚なる舊弊を打破して、新産婆諸氏が自分の技倆を認めしめ樣とするには中々の困難がある譯である。

八、舊弊家の姙娠分娩に就ての言草

我國の醫學はすべて泰西より輸入し來つたもので、その年月もあまり遠い昔ではない。維新前後關法醫學により初めて西洋醫學を輸入し、漸次發達し來り、明治時代には獨逸醫學の輸入により長足の進歩を遂げ、歐洲大戰後は獨逸は戰亂の疲弊により昔日の感はないが、日本としては最早獨逸に師事するにも及ばない程の發達を來した譯であるが、維新前迄は所謂漢法醫學で治病と云ふ方には多年の經驗によつて中々馬鹿にならぬ技倆があつたが、病源の探究など云ふ點に至つては何しろ人體の解剖生理が分つて居ないので、今日から考へると隨分馬鹿くしい事柄をその道の專門學者でさへ稱へて居る、從つて素人などは皆目その點は只想像に任すのみで正當な考へをもつて居る譯がない。例へばマラリヤの如きある厄病神がとりつくものと信じ種々のマジナイを以て振落そうとしたり、チブスの如きは傷寒坊主の仕業で常にチブス病者の枕頭にはその坊主が居ると云ふが如き事を眞面目に信じ切つて居る、かゝる憶測や妄說から治療法や養生法などを割だすのである故滑稽な事や有害な事が多くある。中には自然に今の學理に叶つたのもあるが多くは現代の教育を受けたものは醫者ならずともその馬鹿くしさが分る樣な事柄が多い。しかし醫學上の事に關しては現代の教育を受けた知識階級の人も、不思議に昔の馬鹿くしい說を信じて居る、特に姙娠分娩に關してはそうである。今昔から當今に至る迄云ひ傳へてをる、姙娠分娩の解剖生理養生法に關したる言ひ草を列記し、助産婦諸氏が素人に對しその蒙を

啓く時の參考に資することとする。

一、先づ胎兒の位置に就ては今日に至るも十人中九人迄は骨盤位に胎兒は居るものであると思つて居る、それが愈々分娩に際してあの陣痛の度毎に廻轉して愈々出るときには頭から先に出る迄廻轉するのだと信じて居る尤もこの胎兒の位置に關しては泰西でも昔はそう思つて居たのである。之に關しては産婆は戒てその誤りを正す必要もないが、知識階級の人にはそは誤つたる考へにて、胎位は頭位が最も多く骨盤位は之に次ぐ由を説明し、腹の脂肪が少く胎位のよく分る人には、自ら押へさせて見て、之が頭部、之が胴、之が尻と合點が行く樣に教へてやつてもよかろう。

一、姙婦は骨盤端位を極端に怖れる。逆子だと云はれるとサー姙婦は心配で〳〵堪まらず分娩時は屹度難産して命が終る樣に悲しむものである。之に關しては産婆は逆子はさほど恐ろしいものでなく、頭位につぐ正常の位置であつて、難産と云ふ内には這入らない。出來る小供も時に窒息して死ぬ事はあつても、親の命にかゝることなどは、逆子なるが故に特に多いものでない、横位や斜位や顔面位やその他陣痛微弱や子宮出血や種々恐ろしい難産は多いが、胎位が逆子だからとて決して心配はいらない、醫師が胎兒を娩出するときなど鉗子手術の以外は特に好んで骨盤位にする位のものである由を充分話して聞かすがよい、又外回轉術によりて整復してもよいが、下手に整復すると横位斜位になる故注意しなければならぬ。

一、胎兒榮養の事。胎兒は胎内に居る内は頭に後産を頂き乳蔓を口に喰はへて居つて乳をのんで居るものである、故に姙婦が高い所に手を延ばせば、その乳蔓がはづれて流産すると稱して居る、胎兒榮養は胎盤血行により行はれ、胎盤が消化器、呼吸器の作用をなすなどの六かしい話は素人に話しても分りにくひ、寧ろ高處に手を擧げたり過激の運動をするなどの事をいましむるよい便法かも知れない。

一、生水と云ふ事。胎兒が生れて二三日の内に水樣のものを吐出す事が屢々ある。之は嚥下したる羊水を吐出するものか或は呑んだ初乳を吐くものらしいが、素人は之を生水と稱し之を充分に吐けばその子は健康だが之を吐かぬものは不健康だと稱してをる、之等は取るに足らぬ俗説で、何等生兒の健康に關係を有して居るものではない。

一、會陰裂傷の事。胎兒が分娩する際、舊式産婆は會陰保護の事を知らず、急激に會陰の伸張する爲め、舊式産婆に取扱はれる初産婦は殆ど十中八九は一度か二度の裂傷をせぬものはない、否全部の産婦と云つてよい位である、あの樣に大きな兒頭が出るのだもの、裂傷を起すのは當り前である、之の裂傷は七夜の間、股をつけて行儀よく坐つて居る間に奇麗に癒合するものだと思つて居る、産婆が思つて居る位だから素人は無論の事である、特に一度の裂傷等は、産婆も産婦も少しも意に介せず無關心の狀態である、之は適當の保護をすれば裂傷など起すものでないと云ふ事、裂傷が出來れば産褥中創傷傳染の危險のある事、將來外陰哆開、膣脱、子宮脱の原因たり得る事など少しも知らない、之の點は新産婆は充分産婦に教ゆべきであつて、之等の點てこそは舊式産婆の取扱ひの不法であつた事を痛罵しても差支ない、否寧ろ舊式産婆をいましめ産婦に覺醒を促すによい捕へ處である。

一、後産の舞ひ上ると云ふ事。胎兒娩出されて後後産がまだ出ない、舊式産婆又は素人産婆は必ず胎艘に附着せる臍帶端を結紮し、その糸を母體の下肢の拇趾にしつかりとむすび附けて居る、我等から見ると實に滑稽である、彼等に、なぜそんな事をするかと聞くと、斯樣にしてをかねは後産が舞ひ上り爲めに産人は死ぬると云ふ、之等は子宮と胎艘との解剖的關係を知らぬ證據で、宮底に附着して居る胎艘が臍帶を引つ張りつけて置かぬからとて舞ひ上り得る理屈がどこにあらうそ、彼等の舞ひ上ると稱するのは後産期の大出血、馳緩性子宮出血の爲に斃れるものをかく云ふのである。新産婆ならば子宮收縮の狀を檢し出血さへなければ暫らくはすて置いてよからうし、又クレデ氏眼出法を施すのもよからう、それで尚出なければ醫師を招き剝離法を行へばよろしい。

一、産人は反つてはならぬと云ふ事。分娩直後の産人が横臥する、又は仰臥すると云ふ事を舊式産婆又は素人は非常に嫌ふ、無論初めから寢産をするものには之の問題はない筈だが、舊式に座産をするものには常に之の事を八ヶ間敷く云ふのである。爲めに分娩後は樂々と仰臥は出來ぬもの双方に米俵を置き背後に布團を積み丁度拷問にかけらるゝ人の樣に七夜の間正座して居る、その苦しさは實に堪へられまい、膝小僧など碎ける樣に痛いと云ふ、昔は全部此式であつたが、近來新式産婆が寢産をする爲め、しかもその結果は良好な爲

め、七日間正座してる苦しみが馬鹿らしくなり、かと云つて斷然新式分娩法もよくせず、折衷案を産人が考へたか、舊産婆が案出したか知らぬが、分娩が終ると横寝藥と稱して、何物か藥を服用してそれから安風する、實に滑稽の至りである、之等は只産人が苦しいのに馬鹿〳〵しい昔からの考へに捕はれつまらぬ苦しみをして居ると云ふ丈に止まる樣だが、時とすると之の考へが非常なる危險を招き遂に母體の生命を奪ふ樣な結果をうむ事がある。次に述ぶる一例がそれである。

◉太郎兵衛の家内は御近所の親切が殺したのだ

ケタタマしい戸をたゝく音に、ふと夢を破られて耳をそばだてるとお向ひの先生の門の戸を破れる樣にたゝき續けて居る。夜は今や二時寢入り端なのと眞深いのとで中々起きぬらしい。が、やがて答へがあつたものと見へて百姓醫が明かに聞きとられる。

「何町の太郎兵衛の家内が只今産をして、子供は出來たのですが、後が來ないので大變樣子が悪い樣ですから、すぐ來て下さい」と。

大醫にさけんで居る。オヤ太郎兵衛の家内がそんなに悪いのかしら。太郎兵衛は貧窮ではあるが心掛けの好い男だ、あの子澤山の中で家内に、もしものことでもあつては大變だ、近い所だ、私も一寸見舞に行つてやらうとおき上つて寢衣の上に羽織を引つかけなどして居ると、やがて先生の門の戸がガラ〳〵開く音がする。先生は自轉車で行くらしい。自分も庭へ降りて自轉車の用意にかゝる。所へ第二の使が來たものと見えて

「ア先生いらつしやつて下さいますか、どうぞ御早く願ひます。病人が大變苦しがりますから私が又お迎ひに伺ひました」。

といつて居る、急いだものと見へてハーハーいふ息遣ひまでが聞こえる。やがて自轉車についてバタ〳〵と駈出した自分が車を引き出した時には早半丁も先を三つの提灯は走つてをる。

太郎兵衛の家に近づいた、第三の使が立てをる。

「どんな樣子だ？」

「先生どうも様子が怪しい様ですぜ」

第四第五の提灯さげた使は半丁置きに立つてをる、余程危篤らしい。

太郎兵衛の家は町端ずれの共同長屋で表には入れば直裏に出られるといふ一間限りの茅屋である、從つて近隣の嬶アどんやおやぢ連中が急を聞いてかけつけ來り上といはず庭といはず表にも裏にも無慮二十ばかりの所謂御近所の衆が騒いでをる。

「太郎兵衛さんや。しつかり抱いておいでよ。産人がのけぞつては其れ切りだよ」

「寝せてはいけないよ。後からしつかり抱いておれよ」

などと群衆は口々に注意を與へてをる、太郎兵衛は群衆の注意のまゝ一生懸命に寝かすまいと産人の後から抱きしめてをゝ、産人はと見るとまつさをな顔うなだれたまゝすはらせられて居る。

「ヤ先生が見えた！」

と後の方から誰かがさけぶと群集はパット道を開いた、先生は無言のまゝ群集の中をスツと通り病人の前にピタとすはつて静かにブラリと下てをる病人の手を取り脈を見ながら顔をのぞき込む。群集は様子如何にとカタズを呑んで控て居る。先生は暫らくし、産人から手を離し

「イケない」

と一口さけんだ

「ヘイ？」

と亭主は怪訝な眼を向ける、群集はハタと口を噤んで静まり返り皆の視線は期せずして先生の顔に集中された

「遠くに死んでるよ。駄目だ！」

重くるしい、しかも叱る様に先生はさけんだ

「ヒエ！」

亭主は一度に度を失ふ。群集は又どよめき出した

「どうしたのだらう今迄うなつて居つたのだに。」

「可愛想なことをしたよ。」

「死んだとよ……。」

先生はキットなつてなかば群集になかば亭主に向ひ叱る樣な口調でさけんだ。

「なぜ產婆につかない？產をあまり輕しめる故こんなことになるのだ、其日稼の者が十歲を頭に五人の兒を殘され六人目に出來たこの兒は生きて居る、こんな悲しい事があらうか。皆さん此產人はなぜ死んだと思ふ。今下を見ると可なり血もおりて居る樣だ。今皆は產人を寢かすな抱いて居れと注意して居つた。その寢かすな抱いておれとの注意が遂に此產人を殺したのだ。昔から產人がのけぞると惡いといふが、それは大なる間違ひだ、少くともこんな場合には大間違ひだ」

と斯ういつて先生は群集の顏をにらみつけた、皆は默つて呆氣に取られてをる、先生は更に語を次いで

「一體產をして小兒が出るとその時、身體の血は多く子囊の方へ集まつてをる。それが後產が出ない爲に子宮がちぢまれぬ爲どんどん子宮から血がおりる。すると血は水と同樣高い所から低い所へ流れる性質がある

こうやつて抱いてをると頭が高い、頭の血はさがつて子宮から出て頭即ち腦に血がなくなる。腦に血がなくなると腦貧血といつて顏色が青くなり遂にはズリ入つて死んで仕舞ふ、その際頭の方を低くしてやると身體の血は頭に流れズリ込むことが少くなる、その間に醫者が來れば適當の處置をして助けることも又出來ただらうものを、抱いて寢させなかつたと云ふことが遂にこの人を殺した、產婆が居ればこんな間違ひはないのである。ア、死んだものは遂に取り返しがつかぬのである。諸君よ決して此れからは產人を抱き起して置かねばならぬなどいふ間違つた考へを持つてはならぬ。此情けない有樣を見よ！」

と先生は宣告した、亭主は氣も轉倒して居るのか、涙も出ないと見ゆる、五人の小供はお母さんと、冷たい母の膝にとりすがつてワッと一齊に泣き出した、今出來た子供迄が火がつく樣に泣きさけぶ。群集は只あきれて口々に低聲につぶやくのみであつた。

一、みつ藥と云ふ事。胎兒娩出後舊式產婆は胎糞の出て仕舞ふ迄母乳を取らしめず、みつ藥と稱する大黃せんぶり等の苦味劑下劑を投藥し、母の乳房より出る黃色の乳は生兒には不良なものとして之を南天の木の根本

にすてさせる、（南天の木の根にすてるのは將來乳汁分泌が旺盛になると云ふ迷信。）その間、一晝夜又は二晝夜何物も與へない、之は日本在來の家庭では、どこでもすることで、今でもこの風は相當智識階級家庭にでも多い、初乳は胎糞を排出する爲めの絶好の下劑であり、哺乳の時期は分娩後八時間位、母も子も分娩の疲勞により一寢入りしてこゝろよく覺醒した時分から哺乳してよい事は新産婦は誰でも知つて居る事、之等はよく説明して之の不合理な弊風を改めたがよかろう。

一、序に人工營養の事。胎兒生れて母に乳なきとき、又は母に哺乳せしめ得ざるの疾病あるとき、或は乳母を撰ぶか、人工營養をする。「その人工營養法の方法及原理は後述人工營養を述ぶる條下を見らるべし）然るに生兒娩出後、間もない間は、體も小さし哺乳力も弱く、左樣に多くの乳量を要しない故、母乳の分泌も少く哺乳力も弱い、母乳は哺乳の力が強くなり、生兒發育するにつけ、次第に分泌量も増し、之に適合する樣、自然が巧に作られてあるにも拘はらず、只一途に母乳分泌の少きをうれひ、生兒發育の後れるのを恐れ、無暗に哺乳させたがるのみならず、之は乳が少いと稱して牛乳ミルク、甚だしいに至りては、生後一ヶ月にも滿たざる嬰兒に米の粉を溶いて呑ませて居る、嬰兒は母の乳房より適量に哺乳するより遙の乳房から哺乳する方が遙に多量に哺乳し得る故、母乳よりは好んで遙乳を哺む、されば母乳を哺む事が少くなり、少ければ母乳分泌は減少する、茲に於て益々母乳不足を感じ、益々人工營養をする、しかもその人工營養法は驚くべき不完全なる事を敢てする爲め、遂に嬰兒の消化を害し、よく發育せしめんとする結果は反て嬰兒の發育を害し、遂には可愛い生兒の命を奪ふ。之の點は新産婦たるものよく心得、母乳營養の何物にも優れる事、母乳は哺乳すれば益々分泌旺盛になる事、人工營養は如何に完全にするも缺點あること、如何に乳少きとて醫師にも相談せず人工乳を補足するが如きは害あつて益なき事を充分よく説明し置くべきである。特に無頼者なる中流以下の百姓相手の産婆は、折につけ時にふれ、之の點を説明し置くべきである。

一、腹帶の事。姙婦五ヶ月となれば帶の祝と稱して、犬の日に腹帶を産婆にしてもらふ、犬の日にするのは犬は御産が輕いからと云ふ緣起である。その腹帶をするの意味が舊來の産婆及素人には呑みこめて居ない、彼等は云ふ。腹帶をしなければ胎兒の行儀が惡くなり、あまりに大きくなり過ぎる故お産がもめると云ふのが

眼目である故、その仕方が無暗に硬く緊迫して、少しでも胎兒の發育を小くし樣とする、所が胎兒はいくら腹壁をしめつけても子宮内で發育する丈は發育する、少しも發育を制限することなどは出來ない。のみならず姙婦の衣服は可及的寛和でなくてはならぬと云ふに、かく緊迫すれば腹部の血行を壓迫して、さなきだに下肢に浮腫を起さんとするに、益々之を助長することになる、腹帶をする目的は懸垂腹を防ぐのと腹を溫包する目的であることを彼等は知らないのである。

一、腹を揉むと云ふ事。姙婦は姙娠中産婆に時々按腹をして貰ふ、産婆も亦月一回は腹を取る（揉む事）と稱して往診する、之は要するに腹内の胎兒の位置及胎勢の監視である。按腹する必要は少しもない、下手に按腹すれば適當なる胎位胎勢を亂し、刺戟を與へ、流早産を促進する樣なものである。成る程腹部の按觸は腹部血行を盛にし姙婦には爽快を覺ゆるであらうが、姙婦の期待するが如き、爲めに安産をなし得ると云ふ程の効はない、故に按腹は胎位胎勢の監視を目的として、之等を亂さない程度にやるべきである。全然之を廢してもよいが中々姙婦は承知すまゐ。

一、姙娠中の病氣は子の爲めで、分娩すれば治ると云ふ觀念。之には殆ど醫師が閉口さゝれるのである。なる程病氣によりては姙娠なるが故に來る病氣もあらう、否病氣でない或種の症狀即ち輕い胃腸症狀、惡心、嘔吐、流涎等や後半期の輕度の下肢の浮腫の如きもの、增泌する帶下の如きものは、分娩したらなほるであらう、然し姙婦の多くはその如何なる病氣も之を姙娠に源因づけ打すておく惡習が多い、顏面に來る浮腫、（姙娠腎臟炎）惡性の惡阻その他一般の諸種の疾病等が發來するも醫師を訪づれず、たとへ訪づるゝも姙娠の爲故、打すて置けば治癒するものならむと考へて居る、之は以ての外の間違ひである。姙娠ならずとも加療靜養を要すべき疾病である。特に姙娠すればその母體には大變化を起して居るのである。母兒二人前の働きをして居るのである。少しの異常も姙娠ならざるときより過敏て增惡すべきである。かの結核、心臟の如き、姙娠分娩産褥により驚くべく增惡するを世人もよく經驗して居る筈である。然るにかゝる誤れる觀念を持して居ることは、實に嘆かわしき事で、新産婆たるものは之の點を吳れ〳〵も說明して、誤りなからしむることは助産婦諸氏の重責の一つである。

九、巧みなる自家廣告

さほど技倆もないのに技倆あるかの如く自ら眞實に信じて吹聽したり、自己の容貌を万人に優れたる美人の樣に信じて他に對して自慢したりするのは、之を己惚と稱して人の笑ひを招く、然し獨りよがりの己惚丈なれば他を毒することが少い故まだ罪が淺いが、何か己れの爲めにする爲め、自ら技倆の未熟を知りつゝ、自己を吹聽するのは最も罪が深い譯である。從つて自家廣告など云ふ事は具眼者から之を見れば、その人格が低いと見られて擯斥されるものである。然し惡事は直に千里を走り、善事は仲々世間の人は知つて呉れない。産婆が姙産婦の保護をなし助産の仕事を行つてゆく上に於て、誰もがその人の眞の技倆を認めて呉れず、お産の組み手は寥々たる曉の星の如く少く、熟練したる技術も日頃修養した學理も、之を實地に應用する對照物がなければ只々脾肉の嘆に堪へないで、なさけない限りである。さればある程度迄は自己の眞技倆を世間に知らしめる必要がある。然し之の點が餘程六かしい、あまり人格を害する樣なやり方ではいけない、又自己に自信がないのに誇大に吹聽するのもいけない、自己を吹聽せんが爲めに他を惡口したり、おとしいれたりすることは最もいけない、産婆に限らず醫師でも決して他の開業者を誹謗してはいけない、之は必ず自己に返報されるときが來る、産家はその産婆の惡口を聞けば、何かの機會に惡口された方の産婆にその事を告げて歡心を買はんとする樣の事があつて、何時かはその惡口は先方の産婆に聞こへ、先方の産婆もまけては居らず又此方を惡口する、たとへ先方が惡口の仕返しをしなくとも、聞いて居る者がその産婆の人格の低い事を感ずればそれだけ損である。丁度天に向つて唾するのと同樣、その唾は自分の面に再び落ち來るのである。されば左樣な陋劣な手段でなく、眞實の事で、他を陷入れない範圍で、巧に自家廣告をしなければならぬ。ある取扱ひに關して産家が非常に感謝を表したなら、その感謝を自己誇りでなく喜び極まつて他にも吹聽させる樣に目立たぬ樣に仕向けるのである。こんな事はどう云へ、こう云へ、どうしろ、こうしろと云ふ事は出來ないが産婆の仕向け樣や、話の仕樣で、人は感情の動物、感極まつてどうしてこの産婆の德を稱へ樣か、この人の爲めよかれ、業務繁昌なれとの考へと感謝の念とで、他に向つて盛に吹聽して呉れるものである。だから産家の心からの感謝

を買ふ樣、眞心こめて技術は巧に、拔け目のない樣にすれば、産家は喜んで吹聽して臭れる、自己が吹聽するのは、よほど巧にしなければ失敗する、それよりは産家に吹聽させる樣に仕向けるこそ最善の自家廣告ではあるまいか。

一〇、御出入者

産婆自らが御出入者となることは下女代り産婆の條下にも述べた如く、殆どその家からは産婆として認められず、お産の時も一寸間に逢ふ下女位にしか思つてくれない程度であるが、之と反對に、産婆も産婆、立派な信用を得る産婆として、あの人ならずば家内や娘の産は任されないと云ふ事になつてのお出入者は、之程快よき事はない、又その家が中流以下でも、よき影響を他に及ぼすが、その家がその地、切つての名望家、素封家であつたら、その業務發展上多大の好結果を來すものである。あの産婆はあの家の御出入産婆だ、あの内はあの産婆さんでなければならぬと云ふ。餘程立派な産婆に違いない、内の娘も今度産するときは一度あの先生に取拔つて貰ひたいものだとある。こうなるとその限界はもう自分の勢力範圍で、他の割込みは許さない、然しかほどまでの信頼を得るには、仲々一應や二應の辛抱ではいけない、大抵大きな家には昔からの御出入産婆がある故、容易な事では入り込めないが、何かの機會に入り込める樣になつたら、日頃の評判を落さぬ樣、注意しなければならぬ、かと云つて又富豪だからとてあまりに恐れ入つてはいけない、ある程度の威厳をもち、しかも親み易く狎しめず、所謂富豪心理を呑み込んで、常方より先方を操縱するつもりでやらねばならぬ。

尚一つ他の意味での御出入者と云ふのがある。どこの家にも少し大きい家にはあるものだが、之の種の人間を甘く取り込んで置くことは、産婆として必要である。將を射んとせば先づ馬を射よ、此種の人々は常にその家の内室深く入り込むものである。此種の人々の御機嫌を損じ惡樣に告げ口されては、よほど家人に自覺のない限り、ふだんの告げ口で遂に落城されて、技倆も常の評判も、けし飛んで仕舞ふ、恐るべきは此等所謂御出入者である。されば此種の人間にも常に愛想よく好感を以て迎へらるゝ樣に心がけねばならぬ、然し此種の人間はあまりに心を許すと又大變な失敗をすることもある故に、此手合に對しては特に親むべく狎しむべからずの

態度を取ることが最も安全である。

一一、土地教育——衛生講話

前項述べ來つた巧なる自家廣告はよほど巧にしなければ却て反對の結果を來す、自己を賣らんが爲め、或は自己の業務の發展の爲めに種々な言動をしてをる樣な樣子が見聞するものゝ耳目に映ると、たとへそれが眞實の事、又誇大な事でなくとも、妙に反感を抱かれて意外の惡結果を來すことがある故、餘程愼重にやらねばならぬ。今茲に述べる土地教育も云はば一種の自家廣告ではあるが、之は前述した樣な危險は少い、土地教育とはその土地の人々の衛生思想の向上を促すことである。産婆としては衛生思想と云つても、一般の事より妊娠産褥分娩に關する一般人の知識の向上を計るのを云ふ。前述せる如くその地方の人々の妊娠分娩産褥に關する知識が低いと、つまらぬ迷信に動かされたり、低級な下女代り産婆をのみ依賴して、何等覺醒する所がなかつたり、新産婆の合理的な取扱ひを却て面倒なりとし、不經濟なりとし、或は甚だしきは有害なりとして忌み嫌ひ、又は恐怖するが如き結果を來すことが多い、かゝる狀態のまゝ打すて置いては何時が來ても新産婆の用ひらるゝ時期は來らず、徒らに低級の取り上げ婆の跋扈跳梁に任せて置かねばならぬ、然しかゝる無知の狀態、衛生思想の低級の狀態は一朝にして改善し向上することは困難である故、多年の間に日常接する個々家々について、臨機にその誤れる考へを正すのもよいが、或機會に多くの人の集まりを利用し、その專門に關する講話をすることは、この衛生思想を促進する上に於て非常なる効果がある譯である。然し醫師たらざる産婆諸氏は諸處で開かるゝ衛生講話會に飛び出して行つて、無暗に喋舌る譯にも行くまい、そこは又どこの町村でも婦人には婦人の集まりがあるものである。例へば處女會とか、婦人會とか、小學校同窓會とか種々の婦人の集まりには是非出席し、人前で話すのが羞かしなどゝ引込思案をせずに、然し又あまりに生意氣にハイカラぶらずに穩かに婦人衛生の御話を機會ある毎にやつて行つたならば、永年の内にはその土地の婦人の妊娠分娩に對する理解力も向上させることも出來、一面にはあの産婆はその業務に熱心である。仲々其道に明るい人であるとの信用も博し得られて、その業務上に好影響を及ぼし來ることは請合である。此方法は何等の危險もなく、産家

の信頼を得る最も効果ある方法である、にも拘はらず何れの市町村でも、女醫には時に講話の一つもする人があるに、産婆さんで講話をする人あるを未だ一度も聞いた事のないのは如何なる譯であらうか、之は到底産婆風情で、多數の人前で講話なんか出來るものかと、初めから尻込して、そんな考へを出した事もない爲めであらうと思はれる、醫學者許りを集めて話をするであるまいし、聞手は何にも知らぬ素人の集まりである。特に妊娠分娩産褥に關しては、産婆は充分人の前で話して聞かせるだけの素養があるのであつて、女醫だつて男醫だつて、之等に關しては産婆以上に特別に高尚の知識を持ち合せて居る譯ではない、否たとへ醫師は醫師だけに特別に六かしい理論や實驗はあつても、素人には何の用もなさないのであつて、素人の衛生思想の向上を促すには、産婆が知つてをる産婆學一卷と、日常多數の貴重なる經驗から割出される注意點とで充分であるされば今後は是非之の點に留意して、産婆はその土地、特にその土地の婦人達の頭に、充分に妊娠分娩産褥延いては初生兒嬰兒の看護上の理論及注意點等、平易に理解せしめ置く必要がある。之は産婆流行の秘訣の一として重きをなすものである。

一二、眞の流行の奥儀は技術の熟達

産婆に博士はまだない樣だ（雜誌閲讀の必要）

土地の婦人の衛生思想の向上を計つたり、産家に接する言動を注意したり、開業地を考へたり、その他之迄述べ來つた事も皆産婆流行の一素因をなすものではあるが、如何にすべての點がそなはつて居つても肝腎の自己の腕が生倉であつては打ち壞しである。

如何にお上手を云つても、又如何に人柄が産家の御氣に召しても、サテ實際にその技倆がまずいと度々失敗をやらかして、折角かち得たる優秀な位置も信用も遂には離れて仕舞ふ。反對に産家に接する態度は圓滑でなく、少々いろんな癖のある人でも、その技倆が常に抜け目なく、いつも着々として成効して行くならば、少々の缺點は顧みずに産家の信頼をかち得らるゝ、況やすべての點が上述の諸點にかない、しかも技倆優秀であればそれこそ鬼に金棒、嫌だと云つても人はすてゝ置かない、一體醫師でも學校を卒業して開業すると、開業と云ふ

事は病院勤務などゝ異り、一定の執務時間が定まつてゐない、朝から晩まで、或は夜中にでも患者の招きに應じて行かねばならぬ、從つて落附いて勉强したり、研究する暇がない、爲めに新しい學說や實驗はよほど注意して暇を盜み、勉强しなければ時代に後れ、古くなつて仕舞ふ、産婆も養成所を卒業して、さて開業して見ると、殆ど晝夜の別なく諸方を走り廻つて、やれ分娩、やれ妊娠の診察だの、やれ嬰兒の入浴だのとはやればはやる程、二六時中殆と身體を休める暇がない、まして勉强だ、研究だと云ふ餘裕はないらしい、然し醫術が日進月歩の勢ひで進んで行く以上、醫學の一分科である産婆學及びその取扱ひ法も研究され、改良されて行かぬ道理がない、されば産婆も常に時勢に後れぬ樣に心掛けて居らねば、遂には、かの初生兒假死の時に、茶釜の蓋を叩いて生死の鑑別をした老婆と同樣、今度は新しい學問をして來た後輩の産婆に、古物扱ひをされて笑はれる樣なことになる、イヤそんな進んだ新しい研究所か、自分が習つた今迄の方法でも諸君が再び繰いて見る樣とするであらうか。ア、あの産婦はあんな不結果な事になつた、なぜあの樣になつたのであらう、その原因が分らない、誰か先生方にお尋ねして見ねばならぬ、ア、あの時にはほんとうにどうしやうかと思つた、あんなときにはどう云ふ處置をすることになつて居たかしら、今夜歸つたら書物を見て見樣と、産家先や往診の歸途に、諸君の頭に思ひ浮んだ事が屢々あつたであらう、が然し諸君が家に歸つた時、左樣思つた點を研究もして見たか、先輩や先生方にお尋ねして見たであらうか、胸に手を置いて御覽なさい、必ずやその時だけで、歸つたら他の事に紛れ、忘れて仕舞ふか、心にかゝりながらもその儘になつて仕舞つて居るであらう、産婆の技倆の優劣はそこの所の心掛け一つにある。なるほど生れつき不器用の人もあり、器用の人もあらう、が己の仕事に興味と熱心を持ち、種々な場合に出逢ふ毎に、これはどう、あれはこう、と一々研究的態度で、深く頭に刻みつけて行くのと、只うか〳〵とその日〳〵の目の前の仕事のみを行ひ、失敗しても何とも思はず、うまく行つても今度からこの調子でやらうと云ふ心のはげみもつけずに過して行くのと、永年の間には天地の差が出來るのである。古い許りが能てない、私は今年で六十年も産婆をやつて居ると云つても、内容がからつぽではうどの大木役には立たない、古く、そして多くの經驗をかつちりと積んで、内容が充實して居たらどんな産に出會しても、急がず慌てず、しかも時機を失せず、實にその人の腕の光りは燦然として輝くのである。高貴の

方々を御世話する産婆も、九尺二間の嬶どんのとりあげをする産婆も、産婆學産婆術に少しも變りはない、未だ産婆に博士があるとは聞かぬ、諸君が習つた産婆學、それに時勢に遲れない樣に新しい方法學理をとり入れ、實のある實驗經驗を積み、どんな産にも驚かない自信と腕とが出來たら、諸君が即ち産婆の博士で、たとへどんな高貴な方々からお産の申し込を受けても、少しも胸が騷がず、ビクつかずに應ずることが出來るのである。どうです諸君、私の話すのは嘘ではありますまい、諸君が私の話を了解して呉れるなら、諸君の内の一人でもよい、私の說に共鳴して、そのつもりで經驗をつみ、日本中での第一の産婆、あの産婆は産婆中の博士だと云はれる樣になつて見ては如何だ、そこ迄産婆學の堂に入つたら、産婆開業術などは問題でない、諸君の身體が二つあつても三つあつても足らない樣に流行る事請合である。然し今の樣に、あの場合どうしたらよいのであらうかと思つても、先輩先生方に尋ね樣ともせず、この場合こうしたら結果がよからう、本にはどう書いてあつたかと思つても、本を開いて見樣ともせず、ズル〳〵ズル〳〵その日暮らしで送つて居る樣では、博士は愚か、やがては時代にとりのこされて、舊式産婆さんになつてしまう、凡そ何事でも人より一等優れ樣とすれば、人一倍も二倍もの苦心と熱心が入るものである。所が醫師には開業醫の補習教育機關として、種々の醫學雜誌が多數ある。然るに産婆の補習機關としての産婆雜誌と云つては左樣に澤山ない、之は多くの産婆さんが、そんな方面にチッとも考へを持たぬ故從つて雜誌も出來ないのである。然し一面には現在出來て居る産婆雜誌そのものも欠點がある。之を讀んで見ると丁度産婆の爲めの雜誌やら、醫師の爲めの雜誌やら分らぬ樣な、六かしい業績や、理論や、實驗が、しかも堅苦しい欠伸の出る樣な書方で書いてある。アレでは私の云ふ産婆補習教育の機關にはならない、そんな雜誌をとつて居る産婆も、多くは机の上の飾り物、帶封もとかずに投り込んで居るのが多い、之ではいけない、私は以前から産婆雜誌として極めて通俗的に、然も新聞の三面記事を讀むが如き、興味ある書方の雜誌を作りたいと思つて居る、此書發行社から發行しておる拙著「おそろしや婦人病とその實話」なる小冊子も、そのつもりで書いて見たのである。御希望の方は御送本いたします御讀み下さい。この本の樣な書方で産婆雜誌を作れば、あまり肩もこらず効果が餘計に上ることゝ思ふ、出來たら諸君も御試讀を今から御願ひ致して置きます。

一三、醫者の氣に入れ

醫者の氣に入れと云ふ標題丈けを見て、醫師と共謀して悪い事をせよと云ふ樣に思つてはならない、産婆と醫師とは常にその業務上に於て接觸する機會が多い、故に此兩者はどうしても相扶け相補ふて行かなければならぬものである。醫師はよく産婆を訓へて指導し、産婆は又醫師を顧問格にしてよく導いて貰ふてこそ旨く業務が行はれて行くのである。此兩者の仲が悪いと誠に都合が悪い、醫師の内にも隨分考へ方の間違つて居る人もあつて、あの産婆は氣に食はぬ奴だ、不都合な奴だと思ふと、靜かにその人に注意もし、訓へもしてやればよいものを、左樣はせずに産家でその人のやり方をクソボロにやりつける、悪い事を悪いと云はれたのならまだしも怨し得るが、欠點もないのに悪樣にケナシつける、例令ば産婦が稱熱を起すと、一概に之は産婆の消毒が悪かつた爲だと云ふ、夫れでも治れば患家もさほどにも思ふまい、が一朝その産婦が死にでもすると、その産家は醫師の言を信じて何日迄もその産婆を敵と怨む、か樣にして仕事に眼をつけられると、人間だもの、如何に注意して居つても拔け目がないとも云はれない、何等批難さるゝ樣な取扱ひはして居なければ、何と云はれても俯仰天地に恥ないけれど、爲めに悪評を立てらるれば一々斷つて行く譯にも行かない故、さしづめ立てられ損となる、尙産婆の方も、醫師がか樣なやり方ではヨツト誤つて會陰破裂でも起した時にも、又あの醫師に見てもらつたら保護の仕方が悪いからだと罵倒されるのが恐ろしさに、ナニ之位は自然に治ると醫師について縫つて貰へと勸めない、又悪い産婆になると自分の欠點は棚にあげ、あんな醫者は産の方は駄目です、先日も何處そこで難産に出合はし、あの醫師がやり損なつて到々親子共に殺したの、なんの、と悪口する、之では醫師も産婆もお互に悪評の立て合ひで、お互の損許りでなく、産家の爲めにも親切とは云はれない、之が反對に産婆と醫師との間に意志相通じ、仲がよければ少々の失策もよく産家の前はつくろつてもくれ、又陰ては親切に教へても呉れる、注意はしてをつてもヨツト會陰破裂を起しても、すぐその醫師に言つてやれば時を移さず縫合してくれる、その他如何なる異常があつても、連絡提携さへして居れば躊躇もせず迎へも出來、時機も誤らずに適當の處置をとり得て患家の爲にも幸福である。

されば産婆はその業務遂行上、遺漏なき爲め、又非常の場合にも快く適當の處置を誤りなく出來る樣に、平素から人病のよい優秀な腕前の婦人科醫を見立て、自分の後援として充分の了解を得て提携して居らねばならぬ、醫師に氣に入れと云ふのも、別に醫師に阿諛するのではない、かゝる業務遂行上萬全を期する上に於て必要なからである。

一四、種々なる實驗例

今著者が日常經驗したる、産婆に確に參考となる可き諸種の實驗例の二三を列記しやう。由來人の失敗談や實驗談を聞くことは、己が業務を行つて行く上に於て大變な參考になるものである。産婆の教科書などには學理や技術の原則は示してあつても、千態万樣の實際の狀態に適する樣な記述は、とても出來るものでない、先輩や先生方の經驗談は實に貴重なる教科書以外の教科書である。著者も多年産婦人科醫として、それはいろ〳〵の場合に遭遇した、その一々を茲に記述したら定めし諸姉の御參考になろうとは思ふが、左樣にするには、かゝる樣な本が何册あつても書き切れない、故に茲には只二つ三つ記述するに止め、尚後述する各々の條下にも少しづゝ挿入しやうと思つて居る。

一、頭、兩手、胴の半迄娩出して後が金輪際生れて來ぬ。

頭位で胎兒が分娩するとき、身体周圍の最も大なるは頭圍であるから、頭さへ娩出すれば跡は樂々と出て來るものと誰しも考へる筈だ、今産婦の外陰よりは、頭部は無論兩上肢、軀幹の半分、乳の所迄娩出して居るとすれば、あとは努責一つすれば難なく出るか、或は産婆が出て居る頭部、上肢、軀幹に手をかけて、一引き引けば、ズル〳〵と出て來るものと思ふのも無理はない、處が不思議や胎兒は出ない、力をこめて胎兒を索引すると母体迄がついて來る程なのに、胎兒はビタと止まつて進行しない、コンナ筈ではなかつたがと産婆も産婦も汗ミドロになつて、綱引の樣に引つ張つたが、ビクともしない、サスがの産婆も困じ果て、如何はせんと考へ

たが分らない、初めから横位とか顔面位とかで、分娩が遲延して居るなら、すぐにも醫師を迎へる筈だ、が普通に分娩は進行して、頭部上肩軀幹と娩出して、さて軀幹の後半分になつて出ないと云ふのだから何でもないと思つて索引したのも、あながち産婆が無理とも申されない、然しいくら索引しても胎兒は出ぬ許りか、母体の顏の色迄變つて來たので、初めて産婆は驚いた、之は容易ならぬ事だ、大變だ……、私の手にはとても叶はない、醫師を迎へて呉れと切り出したが、その時、はや母体の様子が益々怪しい、茲に至つて産婆は狼狽度を失し、遂に苦しむ産婦を捨て置いて、私にはとても駄目と、早々家に逃歸つた、一体ならば、母体が左様に危險ならば、とても歸れる處でない、應急の手當をすべき筈である。が事の意外に度を失して居るのと、醫師が來たら叱られるとでも思つたものか、立ち歸つた、産家は輕みに思ふ産婆さんに捨てられ、急ぎ著者の所へかけつけた、「今すぐ來て下さい」「どんな様子かね」「出かゝつて出ません……胴の半分迄出てあとが出ません」「胴の半分？」「不思議だな、とにかく行かう」と器械の用意をして車に乘ろとすると、第二の使が來た「到々母は死にました」「死んだ？」「子は！」「子は出かゝつた儘で」「どこ迄出て？」「頭と手と胴の半分を出して、股の間に挾んだまゝ」「妙だな、そこ迄出たら、後は何の苦もなく出そうなもの、ハテ……」「然しそのまゝ葬式も出來まい、身二つにしなければならぬ」「然し私は使のもの、歸つて一應相談の上、又お願ひに出ましやう」と歸つたのが朝であつた、どうも不思議だ、重複畸形かな、或は脊推破裂か、胎兒の腫瘍かと、色々頭の裡にかゝる場合を想像して居つたが、其の日の午後になつても頼んで來ぬ、貧乏人の事だ、胴迄出た胎兒を挾んだまゝ死んだ親を、そのまゝ葬式するのと見ゆる、と思ひ午後の往診に出て、その日は夜遲く歸院したが、まだ何とも便りがない、午後十二時頃、戸を叩くものがある。何だらうと思つて聞くと、今朝の産婦の手術をたのむと云ふ、今頃迄どうして居つたかと尋ねると、貧乏人の事、親族相談の上身二つにしてやらねば、佛も浮ばれまいと相談一決、お願に上りましたと云ふ、ピュ〜と朔風の吹く夜中、しかも死人の分娩手術は生れて初めて嫌ではあつたが往診して見た、僅三疊一間の茅屋、産婦には白布をかけてある、枕頭には形の如く紙花、枕團子、蠟燭の光りも薄暗く、隣家の女達は經帷子の裁縫に忙しい、死人を覆へる白布をとれば、色蒼ざめて合掌して居る、腹部は双胎かとも思はれる様に大きい、更に股間を見ると、褐色に鬱血してをる兒頭、軀幹、下

なる上肢は殆ど紫色に膨張し、上部に出せる上肢は鬱血せず却て貧血し、違つた子の手の樣に眞白だ、氣味の惡い事夥しい、家族は、どうぞ先生、佛も今少し早く先生のお手にかゝれば、か樣にお參りするでもなかつただらうに、ア、、產婆が、エー譯はない出來ますと申す故、到々こんな事になつて仕舞ました、どうぞ佛の爲め、子供は躰を碎かずに、出來るなら丸の躰で產ませて貰ひたいとの願み、見れば大部分出て仕舞つて居る、何でもなさそうだ、宜しいと安請合して、屍毒を恐れる爲手には、ビン附を充分にぬり、さて兒體を握り索引した所、コリヤ不思議、金輪際ついて來ない、胎兒を傷つけずに引き出す約束、氣味は惡いが左手を胎兒の横から宮內深く突込んだ、生きてをれば生溫かいが、死して既で强直狀態になつてをる產婦、その冷たさ、ゾッとする樣な死人の冷たさ、特に宮內は出血の爲め血液凝塊一杯だ、更に深く手を入れて宮底を探ると、初めは兒體が宮底にでも癒着して居る樣に思つたが、ナニソーではない、丁度馬乘提灯の如き兒腹の膨滿、ヤッ胎兒腹水ダッ、なる程之では出られぬワイ、胎兒の腹部は丁度兒頭の二倍以上もある。產婆が如何に引つ張ればとて出る氣遣いは金輪際ないのである。靜かにメスを心窩部に當てゝ、一突ブスッと突くと、突然迸り出る腹水一升許り、兒體を片手にもつて引き出せば、何のことなくズル〳〵と出てしまつた、ア、早くこの診斷がつけば、この親は殺すでなかつたにと悔んで見ても後の祭、之は然し、珍らしい例、產婆の罪とも一概に云はれない、後產を剝離し、あとは死んで居ることとて子宮の收縮も起らねば、惡露が流出して沐浴も出來なからうと、澤山の繃帶を突つ込み、術を終つた、隨分氣味の惡いお產であつた、然し貴い經驗を得たものだ將來かゝる場合、自分の頭には第一に胎兒腹水が頭に浮ぶ、之の話を聞いた產婆も、胴迄出て後が出ない產に遭遇したら胎兒腹水？、との念はもはや到底忘れられまい、實に患者には氣の毒だがよい經驗であつた。

一、破水をせぬ內に子宮が脫出しました

只今產家に參つて居ります、昨年も胎兒が窒息に陷り、死亡したあの家です、本年は妊娠中異常はありませんでしたが、今朝から陣痛が起り只今外陰部から暗赤色の大きな袋樣のものが脫出して、產婦はしきりに苦しがつて居ります、子宮の脫出であらうと思ひます、夜中恐れ入りますが、御往診をお願ひ致します、と云ふ手紙

を受取つた、産婆は關西の有名な産婆學校卒業生で開業後まだ二年にならぬ年の若い産婆である。此の地方には隨分古くから開業して居る有力な産婆があつて、その産婆は隨分思ひ切つた取扱ひをするので産家の氣受けはよい、然し醫師から見るとチト危險性を帶た産婆で、時によると胎盤の用手的剝離もやれば横位の廻轉術もやらうと云ふ云ふ物である。そんなゐら物を向ふに廻して開業し、新に自分の地盤を開拓しやうと云ふのだから失敗つては大變、慎重にやらなければ開業の當初で、しかも近所のこのお産にやりそこなつては將來に影響すること大である。しかも腕が悪く、産家が非常に小兒を熱望して居るのに昨年の初産に陣痛微弱で鉗子手術を受け、小供は窒息死をして居る、今度こそは健全な小供を産ませ前回の名譽のとり返しをしなければ困ると常から非常に心配して居たにも拘はらず今朝からの分娩に、陣痛も相當に強かつたのにも拘はらず今此の有樣産婆は小さい女心を如何に痛めたであらう、恐らく産婦よりは餘計に心配して居る事だらう、しかも今度は子宮脱出！、定めし驚愕と悲痛の心持ちでこの手紙を書いたのであらう、然しこの手紙を受け取つた自分は一寸合點が參らぬ、頭から子宮脱出などゝ、この産婦は姙娠中自分も一度診察した事がある。もはや臨月で、正規の分娩月である筈、亦如何に尨大なものが出て來たとて姙娠末期の全子宮が脱出したとも考へられない、之は何か間違つて居るだらうと思ひながら行つて見ると、産婆は心配そうな顏附きをして居る、産婦は苦しい〳〵と唸つて居る、「水はいつ來ました」「まだ水は來ません」「水が來ない？」「宮口は開大して居ますか」「開大して居る樣に思ひます」「どれ〳〵」と外陰を見る、何のことだ、外陰部からは約手掌大の暗赤色の氷嚢みた樣なものが膨出して居る、子宮が轉倒したか乃至は前置胎盤が脱出したかとも見た事のないものは思ふであらう、が狼狽せずによく落ち附いて考へ、又檢べて見れば譯なく解決がつくのである。が失敗してはならぬとの心配と一度も見た事のなかつた悲しさに、暗赤色の尨大なものを見たときに、破水のまだないのも氣づかずに、直覺的に子宮脱出と憶測して、心配して居るのである。自分は産家へは、ナル程之はチト子宮が脱出して居る、然し心配はないヂキ直ります、小供も出來ますよと慰安の言葉を與へると、産家の方でも産婆が子宮脱出と云つて居る上に現在目の前に尨大な暗赤色の塊を見て居ることとて大心配をして居る處へ、自分がこう云つた爲め、やゝ安堵の色を現した、自分は先づ産婆を傍に招き、手傳ふべく命じ、鉤ピンセットを以て、無言のま

丶產婆の見て居る前で、しかも產家の人を遠ざけて、その尨大な怪物の先端をねじきると、中からは暗赤色の水樣のものがドッと出ると、今迄の膨大物は忽ち消散して中に指を挿入すれば兒頭の毛髮が指に觸れる、產婆にも觸れさせて見る、產婆は稍得心がいつたらしい、產婦は俄に多量の羊水が出て緊張が減じた故、稍苦痛の聲が細まつた、續いて暫時の後、强陣痛が起り、胎兒は無事に娩出した、產家は非常に喜んだ、歸り際に送り出した產婆を、產家の表の陰によんで、君も、もう分つただらうが、あれは子宮ぢやない、卵膜の强靱な爲め破水をせずに胎胞が長く延びて外陰に露出した丈のと、內容の暗赤色は多少の血液と胎糞とが羊水に混じた爲だ、こんな場合は屢々ある。破水が遲れて居るのである故、今見た樣に人工破水をすれば、產婦も緊張痛が去り、陣痛も正規になつて分娩をするものだ、之をいつ迄もすて丶置くと、分娩は出來ても胎兒は窒息して死んで仕膜ふ、今のでさへ早胎糞を洩して居つたと訓へてやつた、この產婆今後はもはや羊膜强靱には驚かないだろう、然しこんな例もある、卵膜强靱で今の樣な場合人工破水をしてくれる產婆も居らず、胎兒は羊膜を被つた儘娩出し、胎兒の顏特に鼻口にアノ薄い卵膜が密着し、首の所で破れ、羊水を洩し、外陰部に娩出したが、鼻口に卵膜がかゝつて密着して居る爲め呼吸が出來ない、暫らくジタバタもがいて居るが、暫時にして死亡し遲れ馳にかけつけた產婆や醫師になぜこの卵膜を小兒の顏から剝離しなかつたか、惜い事をしたと產婦に言つて聞かせる場合が數々あることを記憶して居られたい。

一、術者を生涯怨む尿道膣瘻

之は又前の反對に人工的早期破水に原因することが多い、尿道膣瘻を起すのは膣壁が硬い頭部等に久しく固定壓迫され、血行障害を起し、壞死に陷り生ずるものである。兒頭と骨盤との關係の異常の爲め、又は陣痛微弱の爲め起り易い、その陣痛微弱が起り又兒頭の固定壓迫の樣なことを起す原因として胎胞を早期に人工的に破ると云ふことが原因になることが多い、胎胞は楔狀に宮口に釘入し、子宮口を開大する作用ある事は誰もが知つて居る、之の胎胞を宮口の全開大する迄待たずして、兎角破りたがる、何故かく人工破水を產婆がやるのかその目的は分らない、多分破水を早くして早く分娩を終り歸りたい爲かも知れない、胎胞を早く破れば宮口

の開大は遲くなる、早く歸りたい爲に破るのは、その結果に於て反對であるが、之は産婆の智識が低級である故か樣な事をするのだ、しかもその爲めに尿道膣壁を起しては誠に悲しむべき結果となる、又かゝる兒頭の固定壓迫が久しく持續し、膣壁でも起す危險がある樣なれば、速かに醫師を招き碎頭術により兒頭を縮少して娩出すべきである。自然に任せて跡に多年の煩ひを殘しては、生涯怨まれるのである。尿道膣壁も創口の新しい內に縫合すれば治するものであるが、會陰破裂の如く癒着が容易でない、よほど旨く手術が出來ねば癒着しない癒着しなければ又ヤリ直さねばならぬ、その度に穴は益々大きくなる、特に少し陳久の膣壁になると、仲々縫合が六かしい、しかも膣壁のある患者は二六時中尿を失禁する爲に、悪臭を放ち人中へも行けず、いつも股に繃帶を以て褌をして居らねばならぬ、その煩はしさ、實に他の見る目も氣の毒の至りである。かゝる不幸が只産婆の一時の不注意から起ることを考へると、産婆たるものはよほど愼重にその一擧手一投足に意を注がねばならぬ、とにかく醫師でも産婆でもその原因が不可抗力であつても、結果が悪ければその罪はその醫師産婆に歸したがる、況やその原因産婆の不注意に因することが明かになつては、他で如何程良結果を得てもそれは皆この一悪結果に打消されて仕舞ふ事を考へねばならぬ。

一、小人島のお産

附たり醫師の一言から起つた悲劇

産婆教科書では比較的狹窄骨盤及絶對狹窄骨盤と云ふことを教へられた、俗には之を腰骨の門と云ふ、いつもお産度に難産をすると、あの嫁さんは門と云ふ、依つて産婆は初姙の婦に遭遇した時に、骨盤計測法を行つて見て、之は骨盤が狹いなと思ふたときには、その狹窄の程度により、豫め分娩時の準備に備へ、到底末期迄待てぬとならば醫師と相談して早産をして貰ふ、尙絶對狹窄骨盤ならば早期に流産又は生兒が欲しければ帝王切開術をなし、序でに避姙法を行つて貰ふ、所がこの狹窄骨盤と云ふ奴、西洋の樣には日本では多くない樣だ、日本の女は比較的お尻が大きい、かも知れない。著者十數年千餘名の難産者の中にも、骨子又は碎頭手術で出ない程骨盤の狹窄した婦人には一度も出逢つたことがない、但し骨盤の大畸形や、腰骨の腫瘍など

は別だが、著者許りではない、著者の知れる多數の産婆の話でも、絶對狹窄骨盤など全く見たことがないと云ふ、之はラヒチスや骨軟化症の少い爲めかも知れない、著者の近隣に年の三十餘りの一寸法師が居る、全身の均整的發育矮少で、十二三歳の小娘の肩位迄しか寸がない、之が姙娠した、此れこそ眞實に流早産又は帝切の適應者だと認めて居るが、如何に勸告しても帝王切開などは肯じない、そんなら流早産をと思つても、之にも應じない、姙娠は次第に末期に迫る、困るだろうと思つて居つたが愈々分娩が開始した、所が案外、隨分二三日も産婆が手古摺つたが無事死産した、それから第二回目にも無論帝切や流早産に應じない、愈々分娩開始して碎頭術で分娩した、第三回目にはどうにかして生兒をと考へ、鉗子分娩により娩出し得たが、高度の窒息で心音はあつたが遂に蘇生しなかつた、第四回目に今度こそはせめて一人だけでも生兒を得させたらと思ひ淳々と帝切を勸め、同時に避姙法を勸めたが之も實行に至らず碎頭術に終つた、産母の騒動に亭主も閉口し産人も困ると見え、分娩後は夫婦別れをすると云ふが、いつの間にか又姙娠する、か樣に矮少な人間でも産は出來るものだ、小さい許りで骨盤が狹いとは云はれない、して見ると狹窄骨盤などは我國では殆ど介意するに足らぬ程少數だと思ふ、從つてどの産婆も骨盤計測などは一人もやらない、然し慣重にやるには骨盤計測はやる可きものだ、所がこゝに斯ふ云ふ話がある。ある産婦人科醫の處へある姙婦が行つた、骨盤計測とすると比較的狹窄骨盤だ、依つて姙娠末期迄待てば帝切によらなければならぬ、然し今八ヶ月故早産手術をすれば娩出し得ぬことはないと云ふ、それではと云ふので早産術を受けて分娩した、幾週かの後退院の際、その婦人の親族及家族の前でその醫師は云つた、此度の産は早産したから出來たのであるが爾來姙娠したら矢張り早産をしなければならぬ、姙娠末期迄待てば帝切をなさねば生兒は得られない、貴女は人より腰の骨が狹いのであると宣言した、之の一言は醫師としては眞實の事を言つたつもりである。當り前の事を言つたつもりである。所が豈計らんや此一言が大變な悲劇の元となつた、退院後その嫁の姑さんは親族及夫なる人と相談の結果、あの嫁はまだ年が若い、將來幾度姙娠するか分らない、その度毎に多大の入費と心配と大騒ぎをしては堪まらない嫁には氣の毒ではあるが此際離縁をするがよかろうと云ふ事になつた、夫なる人も親の言ふ事そむきもならず因果を含め左樣な不具に生れたのがお前の不幸、今後どこへ嫁つてもこの苦しみはせねばならぬ、自分の家も

お前には氣の毒だが母や家には換へられぬ、涙を呑んで乃公はお前を離緣する、お前も身の不具を不運と諦め尼にでもなつたらよからう、と隨分慘酷なことを云つたものだ、言われた嫁は堪つたものぢやない、然しさう云つて家に置いてくれねば女の覇味、泣くなく親里に引きとられた、親里には實の母は既に死し後妻の繼母が居る、一生他へ嫁かれぬ片輪の身、繼母の許で永い今後の一生を送るのは堪へられない、あきもあかれもせぬ仲を難産すると云ふ事から生木を引き割かれて離緣となつた、女の身としてもはや此世に望みもなく、生きて居る程苦しみを増す許り、いつそ死なうと思ひ詰めたのは當然である。その後は日々悩々として樂しまず、ひたすら死場所を求めて居つたが、その樣子を見た姉や親族のものが心配をしだして目を放たない、死ぬには死なれず仕方もなく、親里に日を送つて居る内、まだ年頃の娘、諸處方々から再婚の申込は降る程あるが、さて聞き合せとなり離緣の原因が判明すると誰もが手を引いて話はオヂヤン、滿二年の間再婚談は引つきりなしに起り、いつも出來上りそうになつてから最後の吐端場になつて破談となる、娘も既に諦め、親も不憫ながら諦めて居た、所が遠方の方から起つた縁談がその離緣原因を調査することを忘れ否忘れたのではあるまい、世の同情の爲めうまく世間が言つて吳れたものか成立した、親は無論知つては居るが左樣なことを明すのも情として忍びない、行く處迄行くより外ないとの腹をすへて居る、娘も既に諦めては居たが此からの長い一生嫁ぎも出來ず、繼母の側に過ごすのも身を切る樣につらい、かと云つて行けば姙娠する、姙娠すれば又大變命がけの難産をしたあとが又離緣話、と考へると行きたくもないが、又世間を狹く繼母の内に居るのも苦勞の種、どうなるものか、儘よとの捨て鉢も起る、遂に縁談は進行して嫁入した、貰つた方こそ知らぬが佛のよい迷惑、かくして一年は過ぎた、遂に最後の幕が來た、娘姙娠せりとの報知、兩親の心にはこの一片の報知は百雷の如く胸にこたへたであらう、サアそれからと云ふものは娘、兩親、親族と云ふ、之の事を知れる多くの人は姙娠の進むにつれて胸のつかへは大きくなつて行く、かと云つて先方が知らない故早產術を受けることも出來ない、實に命を的にして姙娠末期迄押迫つた、この間の娘の心配親の心痛は如何許りであつたらう、然しもはや娘は死を覺悟して居た、再婚の初めからたとへ今度姙娠したら出來る子供と共に死ぬるが本望と思つたであらう、果然、或る日「嫁產氣附いた來い」との電報が來た、里の母親は行かうと云はぬ、眞實の母でない、彼の女は

この最後の幕の出場俳優たることを好まない、とつおいつ時間を延ばして居る内に更に飛電あり、「嫁安産した、すぐこい」兩親は之の電報を見てビックリした、が然し取るものもとりあへず行かうとしない、何故ならば之は屹度電報の間違ひか、難産して死んだのをさう云ふと早く來ない故安産したと云つて來たに違ひない、と母親は自分勝手に解釋して行き澁りしてどうしても行かうと云はない、父親に行けと云ふ、然し親族のものも、まさか死んだものを安産したとは知らすまい、子が出來たときは母親でなければいかぬ、是非行けよと追ひたてられ母親も屠所の羊のそれの如く止むなく先方へ行つて見れば、此れは又案外、僅か半日の產氣で玉の樣な男の子の安產、無論月足らず處でない、丸々とよく肥た立派な成熟兒、之には口には出せぬが母親もあいたロが塞がらず、娘も事の意外に永年の心配と今の喜びと、先夫と別れ今の夫に再婚した感想など、奇妙な感情が交錯して、嬉しいとも悲しいとも分らない表情をして居つた、之を傳へ聞いた親族一同、怒るまいことか非常に醫師の振舞を憤慨して、損害賠償を訴へるといきまいたが、離緣の理由は愚か初婚の如く裝ふて嫁入した事とて、そのまゝ泣寢入りになつたと云ふ話である。之はあまり產婆の參考にもなるまいが、醫師や產婆の一擧手一投足はよほど愼重にしなければならぬと云ふ例にもと揭げることとした、特に婦人に關することはすぐ離婚問題が持上る故一層愼まねばならぬ。

一、骨盤骨腫

こんな例もあつた、ある經產婦從來四人の子供を產んだがすべて分娩は輕く產婆も間に合ぬ程だつた、所が五人目の分娩に際しては何時もの樣に輕々とは生れない、何日も朝から陣痛があり始めると午後には出來る位であつたのが、此度は昨夜分娩が初まつたに、今日の正午が來るのにまだ出來ぬ、胎位も正常、宮口も開大して居るのに胎兒が進まない、と云ふので自分は迎へられた、行つて見ると、陣痛は少しく弱いだけで他に異常はないが、產婦は今迄か樣に苦しんだ事がない故辛抱が出來ない、是非取つてくれと云ふ、仕方がないので鉗子手術をした、生れた小供は立派な成熟胎兒で活潑に初聲を擧げて活躍するが、左前額の所に母指頭大の陷凹部がある。何の爲めにこんな所が凹んで居るか分らない、鉗子の葉の壓迫の爲めの疵かとも思つたが、鉗子とし

てはかゝり所が違ふ、不思議の儘にその時は歸つた、それから二年後、又その家から分娩困難の故を以て往診を求められた、陣痛は相當あるのに、一定度迄胎兒は下降してそれから進まない、依つて今度も鉗子手術を施したが、不思議や、矢張り左前頭骨に陥凹がある。しかも以前よりは稍大きくて深い、これは不思議だ。之は多分骨盤骨の骨腫があるのではなからうか、そしてその腫瘍が年々増大する爲めに傷が大きくなるのであらう若しそうとすれば、此次の分娩のときは早産でもしなければ出惡い故、次に姙娠したらそのつもりで一度來るがよいと云ひおいて歸つた、其後又二年にて果して又難産の故を以て迎へられた、テッキリ之は骨腫に相違なからう、然し此度は前及前々回の分娩から考へて餘程分娩は六かしからうと思ひつゝ行つた、そしてなぜもつと早く來ぬかと云つたら、本年寒流行感冒で亭主は死んだ、その時姙娠三ヶ月であつたが既に亭主も死んだ事故、相談する人もなし、あまり仰山に云ふのも如何と思ひ、到々姙娠末期迄放置してこんな事になりましたと云ふ、今度は多分鉗子手術では行くまいと考へ碎頭術を施して分娩せしめたが、果して生れた小兒の左前額は深く大きく陥凹して居た、此分娩手術を施行中百姓家のこととて傍らに來てニコ〳〵と立つて見て居る六歳と三歳の二人の小供、丸々とよく肥え丈夫そうにはあるが、二人とも左前額に受けたる分娩時の古傷が明かに現れて居る。此の産婦亭主が既に死し、もはや小供の出來る心配もない故よい樣なものゝ、亭主が健在であつたらまだ出來るが今度こそは眞實に姙娠末期に帝王切解をせなければならぬのであつた。こんな例も亦産婆の參考にならう。

一、外陰部に脱出し來る胎兒の小腸

姙娠中別段の異常なく、愈々分娩が初まり、宮口は開き破水をしたが胎兒が容易に下降せぬ。産婦は陣痛過强で苦しむこと甚だしい。産婆はもう大分下降してもよい時だと内診して見ると驚いた、宮口の邊りに何物とも知れぬ軟きものがグヂヤ〳〵と觸れる。前置胎盤か知ら？、前置胎盤としては出血はなし、觸れるものがどうも胎盤らしくなく、かと云つて足でなし、手でなし、臍帶としては細くて數が多く、判斷がつかない、どかくする内その宮口邊にて觸れたるものが外陰部に出て來たのを見ると、之は何物？、うどんの樣なと云はうか

蛔蟲の塊と云はうか、細いグヂャ〳〵したものが塊をなして娩出した。産婆は經驗がない故その何物なるか、判斷が目て見ても着かない、しかも依然胎兒は進まず、陣痛は强烈で産婦は苦しみ拔く。急ぎ著者は迎へられて行き外陰に娩出した一物を見ると、之は胎兒の小腸の蹠係である。手を入れて探つて見ると所謂羊膜臍で、薄き臍輪は破れその内から小腸が脱出して娩出して居るのだ、依つて足位に廻轉し、漸くにして胎兒を娩出すると、之は驚いた、ズボッと許り同時に胎盤も娩出した、臍帶の過短？、よくまあ子宮轉轉を起さなかつたと思つた、こんな例も數はあるまいが、産婆の驚くのも無理はない、こんな珍らしい例は永年産婦を取扱つて居るといくらでも出會す、從つて産婆も永らくの産婆生活の中にはいろんな奇妙な例にぶつゝかる、そして經驗をつみ悧巧になるのだ、自ら經驗すると尙更頭に染み込むが、人の話をきいても一寸には忘れないで大なる參考となる、かくして多くの場合、多くの經驗に遭遇して、その産婆の腕に實がいるのだ、故に私は云ふ。

一五、産婆は同志相集りて座談會を起せ

と。そう毎々集合するにも及ぶまい、月に一度、二月に一度、心の合ふた産婆同志が相集まり、誰に憚かりもなく、經驗談その多くは失敗談をすることだ、非常に興味があり、又大いに參考になるものだ、尙その席上に自己の信頼し得る婦人科醫の出席を願ひ、醫師と産婆の間柄、親子師弟の間柄も同樣、成る可く失敗談、時に自慢を放れた手柄話もよいが、作らず飾らず話し合ひ、分らぬ所は其臨席の醫師に尋ね、又新しい學說や技術も聞くと云ふ風にしたら、その産婆さん達の腕の上達期して待つ可しである。此の書を讀む産婆諸氏悪い事は言はぬ、今日からこの種の會合を計畫し、充分信用ある婦人科醫を顧問と賴み、臨席して貰ひ、腕を磨く樣吳々も著者は祈つて置く。此の小著を讀んだが爲め、かゝる會合が計畫され、諸君が他の人達より流行して、來れば、著者はこの小著の徒爾ならざりしを思ひ、本懷之に過ぎぬのである。こんな會を作る事も産婆流行の重要なる一條件である。

一六、臍帶の處置

臍帶の處置としては、分娩後臍帶脈動の停止したる後、臍輪から二指横經位の所のワルトン氏の膠樣質を少しスゴイテその部分を一重に堅く結紮し、更に反對側に尚一度結紮し、更に二指横經を隔て母体側にて同樣結紮し、その中間を臍帶鋏にて切斷し、出血なきを認めたらば沐浴後、斷端から病菌が浸入せぬ樣アルコールでよくふき、臍帶全体の水氣をよく拭除し殺菌ガーゼに包み、繃帶をなしおくのである。かすべて清潔に取扱はれねばならぬ事は産婆教科書の教ゆる通りである。舊式産婆は細菌の浸入などの考へはなく、汚れた縫糸で結紮し、切斷も殊更に古い鎌、竹篦等で切る、甚だしきはラソプの心をきる石油臭い鋭い鋏で切つて居る。古い鎌や竹篦の如き、鈍い刄物で切るのは、組織を挫滅させて自から止血の作用を妨けるのは今の臍帶剪刀の殊更に鈍刄となつて居るのと一致する譯であるが、清潔消毒法の行はれて居らぬ點は戰慄に値する程だ。この産婆開業術を讀む程の産婆に、すべて分娩及初生兒取扱ひにアレ程八釜しい消毒法を守らぬ人はない筈故、詳述するにも及ぶまいが、消毒は可なりに出來て居つても、産褥中の注意が充分行はれて居らぬ爲めに、小兒の尿の爲に臍帶が濕潤したり、沐浴後の乾燥が悪い爲めに脱落が遲れたり、腐敗し化膿し、腹膜炎を起し、敗血症破傷風を起し、さなくとも脱落後に臍輪に不良肉芽の爲に生ずる贅肉が出來たり、種々の續發症を起す。就中結紮の不完全なる爲め臍帶出血を起し、不慮の失敗を來すことがある。著者の遭遇したる著しい産婆の失敗も參考の爲めに紹介する。

一七、百日の說法屁一ツ

著者の住む町内に八百屋雜貨を營む家がある。その家の若いお神さん、初産ではないが總領が女の子で、次ぎは男の兒が出來たが死んで仕舞つて、常から男の子、男の子と大の熱望、所が妊娠した、男やら女やら姙娠中は分らう道理もないが、男の子と定めて仕舞つて、着物から蒲團まで赤入らずの雄々しい縞柄の友染で拵へ、お産を今日か明日かと待つ甲斐あつて無事に姙娠末期迄持ちこたへたが、愈々分娩となつていつにないお産が重い、陣痛微弱で胎兒進まず、アリヤ分娩手術をしやうとしたがピツイトリン注射の偉功で、やつとの事に無事分娩した、經産婦だのにお産が揉めた丈に、丸々とよく肥へ太つた相撲取の樣な男の子、確にお産の苦しみ

も日頃の希望が報ひられた譯で、家内中大喜び、その翌朝の事である。慌しく使が來て、今迄目をキロ〳〵して居つた小兒が、俄に色青ざめ、生れ立ちの赤子だから苦しいとも痛いとも云はないが大變の病氣の樣だから、今すぐに大急ぎで來て呉れとの言葉、合點は行かぬが急ぎとんで行つた所、丁度産婆も入浴の爲めに來るのに出會つた、急ぎ二人とも産室にかけつけて行くと、寒い時候故、溫かく卷蒲團で卷て抱きあげて居る嬰兒の顏色ー、蒼いと云ふより寧ろ眞つ白いと云ふ方が當つて居る、一目見た刹那その大貧血に驚いて、急ぎ卷蒲團を解き、衣服を解くと、之はどうだ、腹一面の血の洪水ー、血糊の爲めに衣服もほどけぬ程のベト〳〵、臍帶の結紮端を檢して見ると、よく結紮はしてあるが、結紮糸の根本に出血點を見出した、之は要するに結紮を堅く緊結した時に、臍帶表層の血管が針の尖程破れて居たに氣がつかず、そのまゝ着物をきせてあつたが、其後ジク〳〵と少しづゝ出血して居つたが、更に氣づかずに居た、がむつきを更へた拍子にその出血點の血栓が取れて、厚く包まれた腹中での大出血故、外に血が洩れ出ぬ爲に氣づかなかつた結果であろうと思はれる、がもはや事茲に至りてけ萬事休すで、如何とも致方がない、實に惜しい事をした、之れ然し乍ら産婆の罪とも云はれない、結紮は確に出來て居つたのである。然しその節に小出血點が別にあつたのに産婆も全く氣附かなかつた譯ではない、極めて少量に血液がにじみ出て居つたのであるが、そんな所から大出血しやうとは思はなかつた故左程氣にも止めて居なかつたらしい、此の例に見ても産婆はよほど此點に注意しなければならぬ、初生兒の如きはさほど多量とも云はれない出血にも堪へ得ぬのであることを合點して居らねばならぬ。

一八、産婆の使用する消毒藥及その他の藥品

産婆の使用する消毒藥として主なるものは左の數種である。

一、リゾール　二、リゾホルム　三、カルボール　四、ヨードホルム　五、デルマール　六、硼酸　七、アルコール　八、過酸化水素

位のものである。内最も應用範圍の多いものはリゾールである産婆學の教ゆる所では姙娠分娩産褥中は病源菌の繁殖に最も適當なる溫度、濕度、侵入門戸、榮養を平常よりは兼ね備へて居る故に特に嚴重に器械手指そ

の他の消毒を八ヶ間敷く云ふ、此の理屈の分つて居るか居らぬかが新産婆の分るゝ所で、又産婦や初生兒の健否の分るゝ所である故、今更詳述する必要もない所であるが、その消毒に必要なる消毒藥に就ては、外科などとは違い、多少趣きも異なりあまり復雜に種々の消毒藥を使用することも實地上困難である。三%、五%、の石炭酸は消毒力は強いが、之を使用すると手が荒れる上、分娩の際など、廣い創面に用ゆると、中毒の恐れもあり、千倍の昇汞水の如きも、金屬の消毒には不適であり、又洗滌等に用ひても吸收され中毒の恐れがある一番安全なのと、且便利なのはリゾールである。リゾールは即ちクレゾール石鹸液であつて、カリ石鹸と粗製クレゾールより出來て居り、普通一%の溶液とし使用し、手も荒さず、中毒の恐れもなし、最も便利な事は石鹸を混じて居る故に、その液粘滑で、之にて消毒すると垢も落ちるし、手がキシマない得點がある。又消毒力も可なり強い上に、器械をつけて置いても昇汞の如く腐蝕しない、故に産婆の消毒は是一つあれば結構な譯である。リゾホルムはやはりリゾールと同樣で、之に芳香を入れてある丈である。器械手指局所の消毒はリゾールでよいが、撒布藥としての消毒藥はヨードホルムがよいのであるが、之は特種の惡臭があるのと、人によると沃度に對して特に過敏で、よくカブレル人がある。その臭に對してはキセロホルムの如きものを用ひたら幾分臭みは少ないが、それよりも産婆として最も便利で安全なのは、次沒食子酸蒼鉛即ちデルマトールと稱する黄色の黄粉の如き粉末が最もよい、初生兒の臍帶に撒布し、又腋窩、股關節部のただれに撒布し、母の外陰部等にも撒布して害がない、硼酸の如きも消毒撒布藥として又結構である。その外アルコールの如きも簡單なる消毒藥であり、過酸化水素等も拭擦して消毒の効がある。初生兒の鵞口瘡の如きも、硼酸をゲリセリン中にとき、之に過酸化水素を少しく混じたものを口中に塗つてやればすぐ治る、故に産婆の使用する消毒藥としては手指、局所、器械の撒布用としては一%のリゾール水、撒布用としてはデルマトール、硼酸の如きものを用ひ、その外アルコール、過酸化水素液をもつて居れば充分である。初生兒のただれには亞鉛華澱粉、硼酸滑石末等もよいが、デルマトール一つで充分事足りる譯である。

一九、麥角の濫用

一体、産婆は産婆規則第八條に「産婆は妊婦産婦褥婦又は胎兒生兒に對し、外科手術を行ひ、産科器械を用ゐ、藥品を授與し、又は之が指示を爲すことを得す、但し消毒を行ひ、臍帶を切り、灌腸を施すの類は此の限りにあらず」とある如く、醫師と異り妊産褥婦、及初生兒胎兒に對しその病症の必要に應じ、藥劑を内服せしめたり、指示したりすることは出來ない事になつて居る、之を犯すと醫師でないものが醫師のすることをした廉により、醫師法違反の所罰を受けなければならぬ事となるが、實地上妊産婦を取扱ふ上に於て必要で、しかもあまり害にもならない事は默認して居る、即ち産婦が衰弱して氣力のないときに赤酒を飲ませ、ホフマンの液を興奮劑として與ふるが如き、或は初生兒膿漏眼の豫防として二%の硝酸銀液の點眼を許し、その他前述の種々の劇藥普通藥の消毒劑を外用するを許して居る、之は實地上必要止む可からざることである故、醫師でない産婆だけれど默許してあるのである。所がある産婆によりては、どこから手に入れるか、劇藥である所の麥角をしきりと用ふるものがある。麥角は子宮の收縮を促す藥劑で、從つて止血劑となるものである。從つて醫師は分娩時必要の場合には、子宮の收縮を促す爲め、又は出血を止むる爲め、麥角を侵劑として與へることが多い、之を見た産婆が、如何なる場合に麥角を用ひてよきや、又如何なる場合には之を用ひてはならぬかの判別もつかず、只子宮の收縮を促す効があるからとて、如何なる場合も斟酌せず、陣痛が微弱なと麥角を用ひ、出血があると麥角を飲ませ、その原因も計らず、時期も考へず、麥角を濫用して、その結果は反對に宮口の收縮を起し、無効に終るか、分娩を遲延せしめ、有害に終る事が多い、生兵法は大創の基、麥角なる藥の性狀も知らず、分娩の如何なる時期に用ひて効力あるか、如何なる原因によりて分娩が進行せぬか、又出血するかも知らず、教へられたる原因療法も施さず、無暗矢鳥に麥角を用ひたがる人が間々あるは失敗の基である。産婆は、かゝる分娩遲延や出血の場合は、その原因のどこにあるかを早く知り、早く醫師の手當を適當に行つてもらはねばならぬ、勝手な眞似をして大間違ひを起さぬ事が肝要である。

二〇、鹽釜の御守り。産婆の魔道に陷るな

成程正規に進む可き分娩が遲延し、産婦は苦しみ家族は憂愁の雲に閉され、どうなることかと心配のあまり、

マダよう産まさぬと、果ては産婆を陰で悪口云ふのが耳に入れば、今暫らく待つて居れば宮口も次第に開き、分娩も障害なく進行するにと思つて居つても、家族が産婆をもどかしがりこの分娩取扱ひの主人役なる産婆が見て居る目の前で、これは鹽釜さんの御守りだぞ、心配すな、鹽釜さんのお蔭で出來るぞと、力づけたり、水天宮さんの御札を頂いたら輕く出來るからと頂かせたり、子安地藏の御洗米を頂かせたり、甚だしきに至つては御祈禱者の珠數で産人をなぜさすりして貰つたり、この産婆は當にならぬ、この産婆さん丈けをたよりにして居ては、どんな事になるやも知れぬと云ふ不信任の行ひを口には出さねど敢てする、成程心配のあまり、何の考へもなくやるのでもあろうが、母子生死の大厄を引き受けて、側に侍して居る産婆の前で、憶面もなくか樣な振舞をするとは、産婆をふみつけた話だ、お前は獸目だ、神樣の御力に縋らねばと云はれたのと同樣、産婆たるもの憤慨せざるを得ぬ次第である。かゝる有樣となると、産婆も泰然として時期を待つても大丈夫との自信はあつても、ヂットして居れない樣に思ひ、さてこそ醫師がやつて居つたのを、見樣見まねで、麥角を用ひたり、甚だしきは無暴に早期破水をしたり、適應も知らずに又手術々式も知らずに、娩出術をする樣になつて、後にとりかへしのつかぬ失敗を招くのであるが、怪我のマグレ當りにヒヨットうまく行くと、心配して來てをる隣人や家族の大喝采と賞讃を與へられ、嬉しさに味をしめ、有頂天となり、時も場合も考へず、今度からこんな場合いつも娩出術をやつたり、麥角の濫用をやつて、産婆道の魔道に落ちるのである。心すべき事である。

二、ピツクトリンの偉效

か樣の場合、産婆としてはそんな無暴な事をせず、充分學理を頭の中で働かせ、診察をぬかりなく行ひ、その原因を確め、ある一定の時期を待たば必ず生れるもの、母子に危險なきものとの見極めがつけば、家族に、靜かに騷ぐに當らぬ心配無用なる由、訓へもし又家族の騷ぐ程危險がある樣なら醫師を迎へることを請求したらよいのである。處が産婆が醫師を迎へる場合は多く手術を要する場合で、貧困の家では醫師の手術料に屈托するのと、産家には醫師に手術をやつてもらつたら胎兒は必ず死ぬるものと思ひ込んで居る、仮りに鉗子手術

などで生きて生れた例を知つて居つても、手術により生れた小兒は虚弱だと思つて居る、故に醫師を迎へることを好まない、この點を産婆も考へる故、横位や前置胎盤等、醫師を迎へねばならぬものは止むを得ずとして、陣痛微弱の如き、少し暇どりても結局は生れる見込のあるものは醫師を迎へさすのを躊躇する、たとへ胎兒や母体の少々の危險はあつても、遲れ勝ちのものである。か様の場合には時機を見てビツイトリンの注射をやると大變の効力のあるもので、案外早く安々と分娩し得ることが多い、ビツイトリンの注射は産婆にはすることは許されて居らぬ故、醫師に頼まねばならぬが、娩出手術をするのでない故、左様に多くの費用と危惧とを、産家に與へなくともよく、産婆も醫師を招きよい譯である。實際ビツイトリンの偉効には著者はツク〳〵感じ入つて居るのである。

尤もビツイトリンもその注射の時期により効力に相違がある。未だ開口期の初期に注射しても、すぐに分娩が終ることも出來ないが、多く産婦が苦しみ分娩手術でも受け様と云ふのは大抵は開口期の終りから娩出期に入つてである。殊に娩出期の中頃以下で捨て〻置いても娩出は間もなくある可き筈のものが、陣痛微弱等の爲に如何しても進行しないと云ふとき、此の注射の偉効は實に驚くべきで、かゝる場合迎へられて注射一筒をなし、歸る用意をして居る間に早や娩出を終る場合が屢々である。實に注射後五分乃至十分にて娩出することが多く、神様の様に有難がられる例には屢々遭遇した、しかも此の注射は子宮收縮を適當に促し、後産期出血にも豫防の効力がある。故に産婆は金に屈托のない家、又は分娩手術でも受けねばならぬ様な場合には、少しく早めにこの注射を受けたら、金の多くかゝる分娩手術や大騒ぎをしなくてもよい事になるであらう。

二二、産婆必須器械材料表。自轉車産婆

産婆教科書の教ゆる所では、産婆はいつ分娩の招きがあつても、ソレ繃帶、ソレ便器、など〻分娩招聘の使ひが來てから器械材料を取揃へる樣では間にも合はず、遺漏も多い、産婆の招かるゝことは他の病氣の時の如く少しくゆつくりして居てもよいときもあるが、時には間髪を入れず、馳けつけても間に合はない場合が多い、たとへ間に合はずとも母子共に健全に娩出を終つて居ればよいが、爲に會陰裂傷を起したり、後産期の出血を

起したり、胎兒の窒息も人工呼吸もせずに死なしたり、羊膜をかぶつて居るのに破りもせず、助かるものを助け得なかつたりする場合が多い、さればいつの場合も、使があれば、ソレッと許りにかけつけるのが産婆の義務で、グズ〳〵して居る樣てはいつも失敗が多く、從つて産婆流行の要素にかげる、その往診も老人は仕方がないが、若い人なれば自轉車の稽古を常からして置いて自轉車でかけつけるのが最もよい、田舍では女の自轉車乘はハイカラだの生意氣だのと云ふが、か樣の場合の女自轉車乘は實用的で決して卑しむ可きでない、我國では女子の服裝が服裝故、女の自車轉乘は如何にも不恰好で体裁が悪いが、西洋婦人を見給へ非常に恰好がよい、之は要するに服裝の改良をすればよいので、適當に考察して不体裁でない服裝で、常に自轉車でかけつけると、車代も先方に心配をかけず、早くてよく間に合ひ、しかも自轉車で走ると世人の目にもよくつき、自然廣告の一つにもなり、大變に都合がよい、産婆の大家振つて御抱の手車で行かねば体裁の悪い樣な御得意をもつて居る人は特別だが、さもない人はソレお産だ、車を雇つて來い、晝夜中などて寢入つて居る車屋を暫らくかゝつてたゝき起し、ヤットの事で出掛けると云ふ樣な悠長なことては都合が悪い、醫師でも産婆でも大都會開業で堂々と女闘をはり、所謂豪い産婆式にかまへ込んでやつて居る人には安つぼく見えていけないけれど、それ以下の人では來て呉れ、ヨシッと云ふ樣に尻輕に東奔西走することが流行の秘訣である。何れは我等は精神勞働者と同時に筋肉勞働者である。殊に田舍開業のもの程この感が深い、しかも瞬時も早くかけつけてやると云ふ事は、一方安つぼく見えると云ふ損の代りに、萬事が手遲れせぬ、氣輕である。よく間に合ふと云ふ好評と好結果を來すのである故、自分は産婆の自轉車乘を奬勵したい。

かくの如く神速を尊ぶ譯である故、その持參の道具や材料は常から遺漏なきやう、丁度獵銃家が綿密に鑛砲その他の手入れをする樣にしておかねばならぬが、毎日になるとどうもそれが手落ち勝になる、サテ産床に臨み臍帶結紮糸がなかつたり、リゾールが欠乏して居たり、石鹼がなかつたり、赤酒が足らなかつたり、遺漏があり勝ちである。されば産婆は次の樣な表を作つて置いて、一目見て欠乏品を補塡し得る樣、暇があつたら一寸之を覗き、出かけに一寸目を通すと云ふ風にすればこんな手落ちはなくてすみ、リゾールを忘れて、無消毒の手や器械を止むを得ず使ふてやる樣な不都合がなくてよいと思ふ。

産婆器械材料表

器械	材料
イルリガートル	リゾール
便器	脱脂綿　ガーゼ
刷毛	石鹸
灌腸器　産婦用　初生兒用	リスリン　ワゼリン
氣管カテーテル	臍帶結紮糸、臍帶
導尿カテーテル	臍帶ガーゼ　デルマトール
臍帶結紮用コッヘル二丁	アルコール　過水
臍帶鋏	硼酸
体溫器	
浴用体溫器	
メートルグラス	

一三、分娩の用意

分娩の用意と云つても、産室の準備や産床の置き具合などに就ては、産婆學に讓り、茲にはその他の方面に就て記述して見様、近來藥店などから販賣して居る分娩具と稱するものがある。分娩具と云ふ名稱は何だか分娩する器械の様に聞ゆるけれど、その實、分娩時使用材料の意味で、その内容はブリキ鑵に入つて居るガーゼ二錐、脱脂綿、結紮糸、臍繃帶、合羽、灰沸團、胎盤を入れる曲物、丁字帶等を一箱に入れ、此全体を消毒して供給すると云ふので、甲乙二種あるが、別に内容品目に異る所あるのでなく、その量によりて甲乙を作つてある様である。之は價格がちと高い様な氣もするが、都會生活者で灰沸團一つ作るにも困難な處では便利な考案だと思ふ。

田舍では斯様なものを使用する産家は殆どない、灰沸團も手製、下に敷く合羽もゴム布でなく油桐紙で、辛抱し、惡露吸收の目的に、外陰部に當てるのも脱脂綿を買はせ使つて居る、無論消毒迄は手が屆かない。

まだ未消毒の脱脂綿を使つて居る方はよいとして、多くは舊式の殊更に汚れたボロを使ふ習慣がある。何故そんなボロを殊更に用ふるのかと云ふと、彼等は婦人の子宮から出る血液は非常に汚ないものである。月經を穢れと稱し、不淨と云ひ、之あるときは神様の前へも出られぬと云ふ、産んだ兒が男子ならば二十一日、女子ならば三十日がすまねば神參りも恐れありと云ふ。産婦やその衣服にふれた人は鹽で手を清めると云ふ、か様に汚ないものを受けるのである故、汚ない布で結構と云ふ考へである。無論消毒など云ふ考へのあろう筈はないが、之の習慣を打破するには産婆は非常に骨が折れる、初めから何も分らない百姓女に消毒の必要をときたは西洋式だ、六かしいとて相手にせぬ様になる故に、やむを得ずそのボロ布を清潔に洗濯し、煮沸が出來れば結構だが、日光消毒した位が關の山で滿足しなければならぬ。

殺菌ガーゼ、殺菌脱脂綿を用ひよと云ふ事は到底不可能の話で、こんな事を嚴重に言つてはあの産婆のやりか亭主の古い煮しめた様な襦袢や猿又を使はぬのがまし位のものである。追々に一般の文化が進めばこんな事も追々になくなるであらう。

要するに鄉に入つて鄉に從へと云ふ事もある。百姓女に滅菌ガーゼ使用を強ゆるよりは、從來のボロでもよい産婆の頭に消毒の意義を充分理解して漸次に誘導してやるのが大切である。嬰兒の衣服に就ても左様である。あまりに穢らはしいのも、何とか工夫がありたいものである。殊に甚だしいのは子供が出來ても着せる着物もなく扱手綿丈けに包んだり、三番叟の様に母親の襦袢に包んだりするのも時々見かける、之等も娠姙中産婆が分娩の時期を豫じめ注意し、用意を整へて置かすべきである。

二四、耻かしい思ひをさせるな

男でも陰部や肛門を醫師に見て貰ふのはあまりよい心地はしない、まして婦人殊に妙齢の婦人では局部を露出して人に診せると云ふ事はヨク〳〵の事でなければ出來ない事である。初めて婦人科の診察台に上つた婦人が話すのを聞くと、殆ど台上に上つたのも、下りたのも、醫師の云ふ事も、無中で歸つたと云ふ人が多い、さほどの羞かしさを忍んでまで診察を受けるのは病氣恐ろしさの一心からである。されば婦人科産科の診察に從事

耻かしい思ひをさせるな

する醫師産婆は、この點をよほど斟酌してやらなければならぬ、女は氣の小さいもの、少しの事に氣をつけてやることは非常に有難く思ふものである。産婆が産婦を取扱ふのは女が女に接するのである故、局部を露出してもかまわぬ道理であるが、男子が男醫師に局部を露出して見せるのが体裁の悪いものなら、産婦だとて産婆にあまりに局部を露出させられるのも快よいとは思ふまい、産婆の産婦取扱ひを見ると、か様の點に無關心の産婆が多い、會陰保護をするとき、クレデを行ふとき、宮底摩擦を行ふ場合、膣洗滌をする時など、局部を露出する必要は無論あるが、露出しても仕様である。羞恥を感ぜしめない様にとの頭があるのと、そんな考への念頭にないのと、露出の仕方が違ふ、殊に産床附近に隣家の女房共が多く居つたり、隣室に多勢の男の聲がするのに、何の用捨もなく下半身を裸出するなどは工夫せねばならぬ、殊に寒い時候など体溫の放散することもよい事ではない、要するにこんな小さな事迄氣をつけなければ人に優れた産婆になれないと云ふのである。

二五、胃病に目鼻がついた

牛馬の良否は伯樂よく之を知る、人間の事を牛馬に例へるのは失禮だが、婦人の姙否を鑑別するものは醫師産婆がその道に明かな譯、とりわけ醫師でも産科醫、尚それにもまして行住坐臥産婦のみに携はつて居る産婆は婦人の妊娠については一層明かである筈である。と云ふのは一体産婆の任務と云ふのが、婦人が姙娠した時は之は確に妊娠であると診斷し、その姙娠經過中は充分養生法を說き聞かし、流産等妊娠中絶を起さぬ様、保護指導し、いよ〳〵分娩が始まつては異常の經過をとらぬ様に注意して介助し、若し不幸にして異常であつた際には早く之を鑑別して醫師に報知して適當の處置をとり、可成母兒共に平滑なる經過をとる様に努力し、産後は産婦の復舊を早くする様に指導してやり、併せて初生兒に間違ひなき様介助してやると云ふのが産婆の重大なる任務である。されば微頭微尾婦人の姙娠と云ふことを對照として三昧に入つて居る譯である故、その道に明かであるのは當然で、又明かである様に研究もし經驗もつまねばならぬ筈のものである。看護婦の如きは醫師に隷屬するもので、醫師の命之れ守り誤りなく遂行すればよいのであるが、産婆は左様でなく、異常でない限りは母子の命は産婆の手に握つて居るので、若しもその産婆に實地上欠けたる處があり、學理の修得に

不徹底な所があつては、正規に濟むべき產を異常にしたり、安全に母兒が經過すべきものを二人の命を奪つて仕舞ふと云ふ樣な悲慘なことゝなるのである。之を思ふと產婆の責任や誠に重且大で、日常些細な事迄、愼重の注意と研究とを怠つてはならぬ譯である。その代り姙娠十ヶ月の間、家族も產人も心配して來たお產が產婆の力で安々と出來て、母兒共に健康であつたならばどれ程その產人や家族はその產婆に感謝するか分らないされば名附けのお客の正客樣は產婆で、出來た小供の百日だ、誕生だと云ふときは先づ產婆の所へお祝の餅を配つて喜びを分つと云ふ事になつて居る、然し又その代りに不幸にしてお產がもめて小兒は死に、產人迄もヒヨツト死ぬ樣な事でもあると、敢て產婆さんの罪はなくとも、事の分らぬ人間はその產婆を惡魔の樣に云つて何日〳〵迄も怨むことゝなる、殊に素人にも分る樣な失敗をして、爲めに產人でも死なふものなら、その產婆は活かして置かぬとまで暴言を吐く人も、たまには世間にはあるのである。餘程細心の注意を拂はぬと大變な事になる、殊に醫師には度々なるが、產婆にも度々あろうと思ふのは姙娠前半期に於て之が妊娠であらうか又他の病氣であらうかと云ふ質問を受けることである。婦人が、月經が一二ヶ月欠如して居ると、第一に妊娠でなからうかと思つて醫師なり產婆なりに相談する、この際只據り處もなく、當ズッポウにそれは姙娠だとも云へなければ、又それは姙娠でないとも斷言は出來ない、姙娠と云ふ奴は他の病と違ひ、左樣でないと云つて置いても、若し間違つて居ると月が滿つればオギアーと生れるし、又姙娠であると云つて置いても、若し間違つて居ると十月が十五ヶ月待つた所で生れて來樣等もない、即ち診斷の誤りは他の病の樣にちつとも誤魔化しがきかない、月が滿ちればキッパリ分つて、その產婆さんの信用は全々なくなるのである。然しそれかと云つて、どうも何とも分りませんと何日迄も言つて居つては、之又あの產婆さんは何も知らない平凡だとけなされる、同じく分らぬにしても之は斯ふ云ふ譯で分らぬと理屈を說明して置かなければならぬ、若し又分つて居つても多分そうだろうと思ふてもあんまり確なことは言はれない、それも妊娠後半期で胎兒より發する徵候即ち確徵の一つでも、確に分りさへすれば之は確に妊娠だ、之が妊娠でなかつたら二度とお目にかゝらないと大きなことも云へるが、情ない事には妊娠前半期には確徵は表はれない、殊に姙娠三ヶ月位の時には醫師でも一寸診斷に苦しむのである。然しそこをよく考へて自分の經驗と細心の注意と精密なる診斷を行へば、たとへ姙

姙三ヶ月頃でも、又たとへ胎兒より發する確徴はなくとも、十が十と云ふ譯には行くまいが、十のもので八九迄は診察が誤らずにつけ得るのである。然し如何なる博士方でも姙娠三ヶ月頃では之が姙娠でなかつたら首でもあげますなどと云ふ堅い事はいへない、多少言葉は濁して置く必要がある。それでは姙娠前半期に診斷の據り所となる徴候はと云ふと、それは云ふ迄もなく、不確徴と疑徴即ち半確徴である。不確徴は即ち男子にでも變する徴候で、主として消化器及神經系の異常及血行器の異常で、その内でも重なるものは、惡心、嘔吐及異嗜症である。

そしてこの胃症狀たる惡心嘔吐は他の病氣即ち胃病とか腹膜炎とか、又單に子宮病にでも起り得るものであるが、姙娠の嘔吐惡心は所謂惡阻と稱するもので、姙娠第二ヶ月頃より起こり第五ヶ月頃に止むものであつて尤も惡性の惡阻は不可止性惡阻とも云ひ、姙娠後半期にも起り小兒分娩迄持續する上に、時とすると分娩後迄持續して親を苦しめ、遂には親の命迄奪ふ事があるが普通の惡阻は胃病等の時と異り早朝空腹時に又は朝食後に起り、食事とはあまり關係がない、普通胃病で起る嘔吐は食後一定の時間を經て起るもので、胃癌や胃擴張などは一定度迄胃中に食物が停滯すると發來する、姙娠のはそう云ふ關係はあまりない、又胃病などに原因する嘔吐の如くあまり身体が衰弱せず、吐き乍ら比較的平氣で居る事が多いものである。それから惡阻は子宮の膨大に原因する反射性の嘔吐で、之に神經がよほど手傳つて居る故に物の臭ひなどを嗅ぐとすぐに嘔吐を催すものである。よく世間の人も知つて居る如く、溫かい御飯の臭を嗅ぐと惡心を催すのに冷飯は嗅いでも食べても何ともない事が多い。

それから異嗜症即ち變つたものが欲しい、よく人の知つて居る如く、酸いものを好むと云ふが如きその一例である。常なれば齒が浮く樣な夏みかんや橙を好んで食する、その他煙草をのまぬ人が煙草好きになり、變つたものが欲しくなる、生米を食ふ、炭を食し、壁や線香まで食ふ人がある。然しかゝる異嗜症も腹の中に十二指腸蟲の樣な寄生蟲の居る患者にもこんな事がある。又姙娠すると精神が極めて過敏になり怒り易く喜び易く、少しの事で泣き、笑い、感情の變動が激しい、一般に婦人は男子よりも神經質なのは婦人の常で、芝居などでも男子は平氣で居つても女はじきに泣く、泣かねば体裁が惡い樣に思つて泣きともないのに貰ひ泣きをす

る、よくあんなに容易に涙が出るものだと思ふ程じきに涙の安賣をするが、その代り今泣いて居るかと思ふとすぐゲラ〳〵と笑つて居る、今泣いた涙が未だ渇き切らぬ内に、さも面白ふて堪らぬと云ふ樣に笑ひこけるのも婦人の常である。か樣の婦人が姙娠するとその精神の變動は益々激しくなつて來るものである。然し之とても姙娠許りでなくその他の生殖器病でも婦人にはその感情の過敏は起り易くなる。

その他姙娠三ヶ月頃には膨大した子宮がまだ腹腔に出ずして小骨盤内に一杯になる故に、前は膀胱を壓し後方は直腸を壓迫する故、尿意頻促ををこし、便秘勝の婦人が尚更便秘する、然し之も膀胱加答兒でも尿意頻促をおこし、姙娠でなくとも便秘するのは婦人の常である。それから身體一般に色素の沈着をおこす、顏特に眼の周圍、腹の皮等が黑くなる、然し之も姙娠に限らず長らく病らつて居る人、又は外部には現れずとも體内に重大な病氣、たとへば肺病等のある人は眼の周圍などに色素が沈着して黑くなるものである。その外何となく身體倦怠をおこし、頭痛がしたり、上昇したり、眩暈がしたりすることも多いが、之も姙娠ならざる婦人にも多い。

それから又血行に障害をおこし、四肢身體に輕度の浮腫をおこすことがある。然し之は腎臟炎でもおこすが、たとへ姙娠して居つてもあまり高度の浮腫が全身にある樣であつたら腎臟炎を疑ひその手當をしなければならぬ、又實際姙娠すると姙娠腎臟炎を起し易い、腎臟炎があるのを不注意に捨て置くと分娩の時にあの恐ろしい子癇を發する恐れがある。之は特に注意を要する、以上は不確徵であつて姙娠に限つて起るものではないが、以下述べる半確徵と照合して見て之等の徵候も姙娠を診定する有力の一つの補助徵候になるのである。

姙娠の半確徵即ち疑徵と云ふのは、女子でなければ起らぬ徵候で、月經閉止、乳房の變化、子宮增大に伴ふ外陰部膣部子宮等の柔軟となり着色する變化であるが、之等も亦姙娠ならざる病症にも發來する、即ち月經は大低初潮してから一年位は亂れ勝になり、又初潮以來一年や一年半は無月經の人が多い、それから月經の止まるのは肺病に多い、肺病許りに限らない、同じ結核性の肋膜炎腹膜炎などと云ふ慢性の病氣のあるときにも無月經になることが多い。

この重大なる身體の病氣の爲めに月經閉止して居るのを、姙娠だと産人も思ひ産婆も姙娠だと診斷して失敗し

た例は往々ある。色の青い痩た人で何となく肺病氣の人が月經が止まつた時には姙娠を考ふるよりは肺病がよほど進行して居りはせぬかを先づ心配する必要がある。

それから無月經になる原因は高度の貧血、ジフテリア、肺炎、赤痢、チブス等の經過後にも月經が止まり得るものである。

乳房の變化でも、乳房に色がつき乳に心が出來、膨らんで來て、乳暈の色が濃くなり、大なる皮脂腺即ちモントゴメリー氏腺が出來、搾つて見ると黄色い初乳を分泌すると云ふのも有力なる姙娠徴候の一つとはなるが又他の病でも來ぬ事もない。

内診して見ると、子宮は常よりは多少柔らかく大きくなり組織は疎疎となり紫藍色の所謂リビード着色を呈することも之又有力なる姙娠徴候の一つで、かの有名なるヘガール氏の姙娠徴候などもよほど妊娠の根據となるものであるが、妊娠ならざる他の病氣即ち下肢の血行障害を起す病氣、卵巣囊腫、子宮筋腫等にも發來する、ある竈婆が卵巣囊腫を姙娠と考へ、何ヶ月まつても分泌せず遂に十三ヶ月目に醫師の診斷により誤診を發見せられて赤面した場合もあり、結核性腹膜炎の爲め月經の止まつて居る上に腹に腹膜炎の爲めに出來た硬結を觸れて確に胎兒と誤つた例もある。結核性腹膜炎などで月經は止まつて居り、腹をなぜるとコツ〳〵した硬結をふれる故に胎兒であらうと診斷するのも一應は無理ならぬ事ではあるが、よく注意して見るとその腹の硬結は上腹部にありて、胎兒としては月の若いのに腹のさほど大きくないのに上の方にかたまりがある故、これは可怪いと氣がつかねばならぬ譯である。

然し外陰部、膣壁、子宮膣部の紫藍色の着色は他の病氣でも來るが、姙娠でその着色の來るのは特別の來方があると云ふ事を研究して發表して居る學者もある。即ち姙娠三ヶ月頃から子宮膣部の外子宮口の下部が紫色になり、月の進むにつれ漸次その紫色が上進し、遂には全く子宮膣部全體が紫色となり、それから膣壁に及び次で外陰部、尿道口に及ぶ、その紫色の廣がり方がチヤンと月數に比例して極まつて居ると稱して居るが、之も多くの姙娠につき調べて見ると確に診斷の一助となる徴候である。

要するに姙娠前半期特に姙娠三ヶ月頃に姙娠を確診することは六かしい事である。獨逸のアブデルハルデン氏

は血清により、日本の木内博士は尿により姙娠であるかないかを診斷せんとして居る、又獨逸のある學者は結核のビルケ氏反應を見る樣に、腕にある試驗液を植えて見て之は姙娠である。ないを定められると云つて居るが、その診斷の仕方が六かしく又さほど確でない故に矢張り以上の樣な半確徴不確徴等の多くを綜合して、略眞實に近き診斷をするに止どまるのであるが、私の經驗上以上述べた樣な徴候の多くを綜合して診斷を下すと大多數は誤りない樣である。只然し十中八九之は間違ひないと思つても、まだ胎兒より起る徴候即ち確徴の一つをでも確に握ることの出來る迄は、多分姙娠だらうと云ふ多分と云ふ言葉をつけて置くことを忘れてはならぬ、以上記述した事をつづめて見ると。

姙娠の疑ひある患者を見たときは、次の徴候があるやなしやを照し合せて見て、その徴候が多く現れて居れば居る程姙娠は確になつて來るのである。

妊娠前半期にて姙娠を診定すべき諸徴候

一、從來の子供が幾年置きに出來たるや否やを聞き、此度も前例よりすればもう出來そうな時分であると云ふ見當がつく。

二、初姙婦なれば結婚後幾年になるや否やを聞き、結婚後最も多く姙娠する年限即ち二年内外なれば多分もう姙娠する時期だとの見當がつく。

三、月經が止まつて居るならば、從來月經が初めて來潮して以來は順潮なりしや否や、若し不整なりとすれば何ヶ月位缺如せしことありや、（流產徴候なく）を尋ね、今迄一ヶ月、時に二ヶ月位飛んだ事はあるが、今度の樣に三ヶ月も四ヶ月も月經が飛んだ事はないと云へば大分姙娠が確になる。

四、無月經となるべき他の原因ありや、青白い痩ぎしの結核のありそうな人でないか、時々熱發や盜汗はなきや、咳嗽はなきや、を尋ねそんな樣子もなく至極丈夫想な人なれば姙娠らしくなる。

五、胸が悪い、嘔氣がつくと云ふ訴へのあるときそれが起り始めは月經が止まつてから二ヶ月目位より起つたが、早朝空腹時に餘計胸悪いが、度々吐くと云ふのにさほど身體が衰弱して居らないと云ふ樣なときは大分姙娠らしい。

六、溫かい御飯の臭をかぐとすぐ胸がわるくなる、酢いものが欲しい、その他、物の好き嫌ひが常とは大分違つて居る。

七、常から大便は秘結勝だが、此頃は特に通じが遠い、小用も此頃は大變にしげくて夜分などでも二三度も行くと云ふのは膨大したる姙娠子宮が小骨盤中で壓迫するものらしい。

八、常からも少々は帶下がある。或は常には全く帶下などはないのに此頃は大分帶下が下りると云ふのは、姙娠の爲めに諸分泌旺盛の結果とも考へられる。

九、乳暈の着色著明にして本人も近頃乳が黑くなつたと云ひ、モントゴメリー氏腺も明かに壓搾すると透明の乳が出る、その他眼の周圍、腹の正中線にも多少色づいて居るときなどは姙娠に大分近い。

十、又外診上耻骨縫際の上を深く押へて見ると、何となしに抵抗がある。又打診して見ると、ポンと云はずにコツ〳〵云ふ樣な音がするときは子宮が小骨盤から上つて來てをるのであるが、之は產婆さんにチト六かしいか知らぬが常からよく注意して診て居れば分らぬ事もない。

十一、內診して見て子宮の膨大、柔軟、ベガールの徵候が分ればよほど確になつて來る、その上子宮膣部のリビド着色が明かに見得たならば愈々診斷が確になる、が之も產婆さんにはチト六かしい、とにかく內診の指ざわりが姙娠せぬ婦人の膣內に指を入れたときよりは溫かく柔かく感ずるときは姙娠らしい。

十二、その外、子宮雜音、腹部の膨滿、初姙婦の姙娠線等が著明に現れて來る時期になれば次第に診斷も容易になる、その內には姙娠の確徵たる四大徵候も現れて來れば、確診もつくし斷言も出來るが、六かしいのは姙娠の三四ヶ月で、その時は以上一から十一迄の不確徵半確徵をなるべく多く證明が出來れば出來る程診斷は愈々確となる、諸君は充分以上の諸點を腹に入れて置いて、そのつもりで日常多くの姙婦に接するなれば診斷は益々的確に、胃病に目口がついたなど云ふ失態がなく、諸君の腕は益々冴て評判は愈々高くなることであらうと信ずる、然し之の姙娠の診斷は醫師でも內科專門の人などは、よほど月が進んで居るのに、胃病だの、腹膜炎だの、と診斷してをる、滑稽の事が多いが之は要するにさほど六かしいものでなくて注意をせず診斷を粗漏にするからであつて、多くの婦人につき日常以上の諸點を注意して診察

するなら產婆さんの方が遙かに醫師より姙娠鑑別は上手になる事請合と思ふ。

二六、あの產婆を殺してやりたい

七年の頃は二十七八、首筋の細い色の青い何となく窶れた女が御診察を願ひたいと自分の診察所を訪づれた。樣子を聞くと月經が三ヶ月以前より止まつて居る、そして胸に何だか堅い塊りがある食事は何となく進まず物の臭いが鼻につく、若しや姙娠でないかと思ひますがと云ふ訴へである。診察すると胸部に多少怪しい所があり、腹部にはなる程硬まりはあるが下の方ではなくて臍より上の方で平たい硬結、しかも多少熱發して居る、一見結核性腹膜炎と肺の結核の初期と鑑定は出來るが果して姙娠であるや否やは外から見ただけではわからない、肺結核の人でも姙娠し得ることは無論である。一體姙娠前半期即ち姙娠五ヶ月以前はたとへ一見姙娠であると云ふことがわかつて居つても尚確な徵候即ち腹の中に居る胎兒から發する徵候はまだ表われない時分であるから要心深き醫師は姙娠前半期には姙娠であると斷言することは憚かり多分十中八九は姙娠であらうと云ふのである。それから月が進み腹の小兒の心臟の音が聞こへたり小兒の動くのが觸れたり之が小供の頭之が足だなどゝ云ふ確な證據が擧がれば之れが姙娠でなかつたら私の首を上げましやうと云ふ樣に斷言することが出來るのである。殊に姙娠三ヶ月頃の樣にまだ子宮が大きくならずに居る時分には外から見た丈では何とも判斷が充分はつき惡い。下から見て子宮が常よりは大きいとか軟かいとか色づいて居るとかを見、その上に月經が止まつて居る、小便がしげくなつて居る、大便が秘結する帶下が常よりは多い、變つたものが欲しい、嘔氣があるなどゝ云ふ樣な容體を參酌して初めて姙娠であらうと疑診するに止まるのである。扨此患者も以上の理由により內診すると子宮は小く少しも姙娠らしい所がない、依つて之れは姙娠でない、月經の止まつて居るのは身體の弱い爲である。腹の硬結は腹膜炎があるからです要心して養生しないと姙娠所か大變な病氣になると充分養生法を言つて聞かせた所、患者はつまらなさそうな顏附姙娠だと云つてくれない許りか外に病氣があるなどゝ大變不滿相な樣子で歸つたきり、チツともその後來なかつた、自分も澤山の患者を扱つて居る內にはつゐ忘れてしまつて居ると、その後三ヶ月許りして再びやつて來が自分は以前來のを忘れて居つた爲め初診患

者として取り扱つた、その時の患者の訴へは次の如くである。

「妾は月經が六ヶ月止まつて居ます、お腹がだん〳〵大きくなつて小兒の頭かしら上の方に硬い硬結があつて時々腹の中で動きます、もう幾月になるでしやうか見て頂きたい。」

と云ふのである。自分は診察にとりかゝつて初めて氣附いた、此患者三ヶ月以前に一度來た事がある人だなと思つて胸部を診ると矢張り肺結核の變化を認める、腹部はなる程よほど膨滿してをるが臍上の患者が胎兒の頭と認めてをるのは愈々腹膜炎の硬結であることが明瞭になつた、從つて月經の止まつてをるのも結核性の爲の無月經なること分明であるが念の爲内診臺に上げて診たが子宮は依然として小く妊娠らしい徴候一つとしてない。そこで内診臺を下りて如何ですか今度こそは妊娠であると云つて臭れるであらうと多大の希望を持つて自分の答を待つて居る患者に向つて斯う云つた。

「此れは姙娠ではありません、貴女は以前に一度見た事がありますネ、姙娠ではありませんよ、お腹の大きくなつて居るのも塊まりのあるのも又月經のないのも皆他の病氣の爲ですよ、よほど用心して養生しないと大變なことになりますよ。」

と話しながらフト俯向いて居る患者の顏を覗き込むと、之はしたり玉の樣な涙をポタリポタリと落して居る、今度こそはと多大の希望を以て來のに又してもその反對、しかも恐るべき病氣があるなどゝ云ふ故に、絶望の爲か口惜し涙か、患者は泣いて居るのである。茲に於てか自分ももはや氣の毒の感にたへない。

「とにかく私の見た所はそう思ひますが、尚一度他の婦人科醫に診せて下さい或は私の見違ひかも分らない然し私は誤診はして居らぬ積りではあるが他の醫師に見せて若し他醫が姙娠だと云ふなら尚一度私に見せて下さい、他醫も又私と同樣姙娠でないと云ふなら、もはや姙娠の事はあきらめて充分身體を大切にして養生しなければいけませぬ、ナニ養生して病を根治さへすればまだ若い貴女だ、子供の一人や二人は屹度出來ますよ。」

と云つてやつた、患者はどう思つたかは知らぬがすご〳〵と辭し去つた。その午後往診の途上他醫を訪問すべく盛裝して行くらしい彼の女に出合つた。

所がその翌日彼の女の亭主は自分を訪づれ、彼の女の事につき御話があると云ふ、逢つて見ると彼は語る。

「先生昨日御診察を願ひました家内は姙娠ではありませんか。」

「姙娠ではないと私は信ずるが、他の醫師に見て貰ひましたか。そしてその醫師は何と云ひました。」

「ハイ實は先生の御詞もあり私も家内も小供が今迄一人もありませんのでどうにかして小供が一人欲しいと

ソリヤ眞實に神さまにお願かける位に思つて居りました、所が今から六ヶ月以前から月のものを見ぬと申しますので占めたと思つて三月を經過した節、御宅へ伺つたのですが先生は姙娠でないと仰しやつたので家内は落膽して居りますと、舊産婆さんではありますが私の隣へ見舞に來た婆さんがよく見ると云ふので診て貰ひますと之は大丈夫小兒に相違ありません。月のものが三月も止まりお腹にこんなかたまりのあるのに姙娠でないなどゝ云ふ法がありますか。失禮ですが先生はよく見ないのですとその婆さんは豪そうに申しましたので私共夫婦は大變喜びましたが、どうだらうと實は半信半疑で三月程たちましたが依然月經はありませんし、その上お腹は次第に大きくなるし、おまけにお腹の中で動く樣なと申しますので占め

〜今度こそはまさか姙娠でないとは先生も云はれぬであらう、先づ先生に見て頂かうとは思ひましたが今の學問を受けた新の産婆さんにマア一度診て貰つたその上で先生の御厄介に上らうと思ひまして、先日御存じの新産婆さんに見て貰つた所、之は小兒に違ひないこゝの堅いのはこれは小供の尻ぢや、之が頭ぢやと確に言ふものですから、もう大丈夫と思ひ幸ひ丁度五月になります故帶の祝ひもせなければならぬと云ふので先日親戚の人も招き一寸宴會を致しまして帶の祝ひを致し歡びの餅も御近所に配り小供の着物も産婆に尋ねますと多分男の子であらうと申されます故初めて總領息子が出來ることであります故初衣も男物卷蒲團も赤げのないのを拵へましたが尚年とつての初産ではあるし産婆計りに任して置いて若しものことがあつてはならぬと昨日先生の御診察をお願いたしました處、先生はやはり姙娠でない病氣だと仰しやる。それを家内から聞まして私は腹が立つて堪まらず、誠に濟みませんが先生、私は家内に申しましたあんな平凡先生に見て貰はずにもつとよい先生に見て貰へと云ふので、御宅から歸りましたその足てすぐ○○醫院へ參つて診て頂きました、所が……。」

「所がどう云ひました」

「○○醫院の院長さんはこれは或は姙娠であるかも知れないが六ヶ月なぞと云ふ妊娠では決してない、或は一ヶ月や二ヶ月位の姙娠であるかも知れない、確にきめるのには尚一二度見ねば分らないが、姙娠はとにかく大分病氣があると申しましたそうです、家内は之は絶望だとは思いましたが尚念の爲と存じ御存じの○○病院へ又まいりまして診て貰ひました所之は姙娠ではない腹膜炎だと丁度先生と同じ御見立てでございましたので家内は歸りましてから泣く計り致し。今日は朝から寢て仕舞つて枕をあげません、誠に先生に對して濟みませんが憎いのはあの産婆です、生意氣に姙娠に相違ありませんなどゝぬかしくさつておまけにこゝが頭だこゝが尻だなどゝよくも當てズッポウにあんなことが言へたものだと私は腹が立つて腹が立つてこれからあの産婆の所へ談判に行かうかと思つて居ります、考へて見ると馬鹿らしくてそれでもないものに帶の祝ひをしたり初衣を拵へて見たり馬鹿々々しい、こんな病氣であるのを今迄手當を加へずに捨てゝ置いたのもあの老ぼれ産婆と生意氣産婆とがあんな事をぬかした計りですホントウにあの産婆奴打殺して遣ろうかと思ひます……。」氣の短い御亭主顏を眞赤にして拳を握つて居る

「マァ然しそんなに腹を立てるものではない、あんまりあなたが小兒欲しさに七十婆さんや若い産婆の言葉を眞正面に信じすぎるからいけない、産婆もどうしても相當經驗を積んだよい産婆につかなければならない、産婆も産婆であるよく充分に診察して分らぬ處や合點の行き悪い不思議な處は醫師に相談すべきである、何と言つても産婆よりは醫師の方が醫學は餘計に修めて居るのである。産婆もよく考へぬとこの姙娠計りは十ヶ月たてばわかることである、姙娠ならぬものを姙娠だと云つたとて十ヶ月經つて出來て來なければ姙娠ではないので、反對に姙娠でないと云つてもオギアと生れたら見損ないであつたことは素人にてもすぐわかる。あなたの所計りではない、こんな例は所々にある卵巣囊腫と云ふ腫物を産婆が小供だと云つて十ヶ月經つても出來ない、遂に醫師に見てもらつて腫瘍であつたなど云ふ馬鹿げた例も時にはある、マアそんなに腹をたてずに許してやり給へ、僕が逢つたら充分注意する樣よく言つておきますよ。」

とヤットなだめて歸した例がある。此患者はこの事があつてから約半年の後に終に肺結核及結核性腹膜炎の症

狀の下に死んでしまつた。諸姉は此産婆の覆轍を踏まぬ樣注意せねばならぬ。

二七、分娩手帖

醫師は自分が診察したる患者の病症錄を必ず作製し十ヶ年間保存することを法律を以て定められて居る、産婆にはそんな法律はない樣だが、自分のなし來りたる仕事を回顧するとき、又參考にするとき等に自分が取扱つた姙産婦の記錄があると大變に都合のよい事がある。一つには自己の仕事に邁進する勵みにもなる、即ち之の手帳があれば、幾人取扱つたから本年はこの手帳幾册つけたが、昨年は幾册であつた、昨年よりは本年は多い或は少い、益々やらう或はもつと勉强しやうと云ふ勵みになる、又研究と云ふ方面から云つても、從來取扱つた分娩中平産が幾人、異常が幾人、死産が幾人、健兒が幾人、男が何人、女が何人、双胎が何人、頭位が幾人、骨盤位が幾人と云ふ樣に統計もとれ、分娩豫定が當つたか、當らぬか、更に自分の取扱ひ範圍が擴張するか縮少されるかと云ふ事もわかる、この手帳一册で種々なる回想追憶も出來る、研究も出來る、統計も取れる、職業の盛否もわかる、收入の計算も出來る、誠に重寶なものだと思つて考案したのが次の如き手帳、之を分娩手帳又は助産日誌と名づけ知り合の産婆諸氏に寄贈した事があるが、さて自分が考へる樣にそんなに研究しやうまりに面倒だから記入せぬのかと思ふと、別に簡單な帳面にもつけて居ない、この開業術を讀んで下さる産婆諸氏の内に果して諸姉が之迄取扱つた姙産婦の姓名だけでもつけて居らるゝ人がありますか、恐らく十人の中二三人も六かしからう、諸姉は開業して幾年にならるゝかは知らぬが、今迄幾人の分娩を取り扱われしや、正規産が幾人、異常が幾人、男が幾人、女が幾人、頭位骨盤位が幾人、分娩豫定日が當つたのが幾人、違つたのが幾人、取拔ひ範圍が逐年どんな具合に廣くなつたか、縮少したか、一ヶ年幾平の收入があるか、收入が逐年增すか、減るか、そう云ふ事が御わかりになつて居りますか、恐らく何もわからず無我無中に經過して居られるのでありませう、そんな事では自分の業務に熱心だとは云へない、よく流行する樣にしやうとは思つて居るに相違ない、否只漠然とあの人はよく流行る自分もあんなに流行りたいと思ふ心はない事もあるまいが、只そ

う思ふだけの事で流行る樣な基礎を作らない、只うか〳〵と暮して居るだけの事であらうと思ふ、故に私は云ふ、自分の職業を盛ならしむる爲め、又過りなからしむる爲めに、この産婆開業術を讀む程の諸姉は先づ私の考案した次の産婆手帳（を自ら作るか便宜上私の處で五十人百人分附け込める手帳を作つてある故御分ちしてもよいが）に之から先綿密に記入して御覽なさい、この手帳に永續して記入が出來る樣な人ならば確にその人は自分の業務に熱心で、常に心を業務から離さず進歩しやうと云ふ心のある人で、將來大に發展する望みのある人だと云ふ事が出來ると思ふ、左に著者考案の分娩手帳の雛型と記入方を示さう、然し之はおよそ産婆の研究しをく可きすべての事をよほど複雜に綿密に記入する欄を設けてあるが、かゝる程迄には到底やれないと思ふ人は、も少し簡單に作つてもよろしい。

欠

十人で一日平均一人三分と云ふ樣に卷を重ぬる毎に平均數は上つて貰ひたい、次に第一頁の右側欄外第一號は取り扱ひ產人を順を追つて番號をつける。その下の姓名住所年齡は說明する迄もない、初產經產はどちらか一方を消せばよい。最終月經何年何月と記入する。序に最終月經の尋ね方は何日から月經がありませんかと尋ねると產婦は甚だ不確實な答へ方をするもの故、必ず一番仕舞の月經は何月何日からありましたかと尋ねなければならぬ）最終月經がわかつたらすぐその下の分娩豫定日を記入する。既往症では、初產時何歲を記入しその後何度分娩したかをその下へ其他何回とかく。前回は何時したかと即ち最終分娩の年月を記入。それから前々の妊娠分娩產褥の經過を參考の爲めに簡單に記入する。之迄出來た小兒は男が何人女が何人、その內何人丈夫で幾人死んだかを記入。かく細かく注意して洩れなく聞いて書いて行けば最終分娩から何年になる故もう出來そうな時だ。現在妊娠に違ひないとの參考になるし、難產癖や肥立のよくない癖のある事もよくわかる、流產癖ある人などは四五ヶ月頃には特に胎生に注意させるし、又梅毒でもありはせぬかと醫師に診て貰はせもする。

欠

次に骨盤計測をして各線を記入して置く、棘（間）線、櫛（間）線、（大）轉（子間）線、外結（合線）周圍、斜經、と記入し、骨盤計測をしなかつた時は一寸見た所普通か廣いか狹いかを見て何れかを殘し他を消す。現症としては産婆の診る迄に病氣であつたか、出血した事があるとか、何とか之迄の異常の有無を記入し、序に初めて診た日を入れて置く。それから後は姙娠中時々診に行つた時の日附を月を下に日を上にかき入れ胎位、胎向、心音、胎動の有無宮底の高さ、惡阻、浮腫、出血等の異常の有無便尿の通利の具合、熱脈の狀態等を記入する、か程迄に注意すれば手抜かりの出來樣がない。

第二頁は一頁の續きでおよそ姙娠中七八回往診するのが普通であらう。最後に此の姙娠經過中に起つた異常その他の疾病等變つたことがあれば後日の參考の爲め記入して置く尙此欄の最後に往診料何回何程と記入して置けばこの時帝日誌は一面産科帳收入簿にもなる。

第三頁は分娩開始から終りまでの記錄で、開始時間、終了時間、その時の胎位、胎向、心音、熱、脈の狀、破水は早期か、遲期か、人工か、出血の有無、小部分脱出の有無、陣痛の狀態等を記入し、破水は何時何十分かを記入。娩出時には出血ありしや否や、臥位は座産か、變産か仰臥か側臥か、臍帶纏絡はあつたか無かりしや、會陰破裂を起さざりしや、娩出陣痛は强か弱か、娩出し終りしは何時何十分か、之の記入あれば娩出期の長さがわかる。

後産期には後産期出血の樣のものはなかりしや、胎盤に異常即ち臍帶の附着部位が正常なりしや殘つた樣の事はなかつたか、等その他必要の事を記入し後産娩出の時間もかく、又難産して醫師が來た事手術した事その他後日の參考になることを餘白に記入して置く。

第四頁は産褥の頁で、之も普通産後七八日は産婆は行くものである故、その間の褥婦の狀態初生兒の狀態假死の度は一度か二度か、男か女か、臍帶の脫落は何日目か黃疸の發來消失の日等記入し。概括事項として、この人の姙娠分娩産褥の經過は正規か異常なりしか、この人の分娩によりて得た所、手抜かつた所、尙先輩や諸先生に尋ねたり研究したい事をかきつけをく。尙往診料助産料等も記入して置く。

以上の如く細大洩らさず記入する習慣がつくと物を粗雜にせぬ得があり、手抜かりがあらうにも出來樣がな

く、大に進歩の跡が歴然とわかつて來、永い年月の後に繰返してこの日記を見た時、ア、あの時は隨分苦しかつたとか、困つたとか、アノ時に比し自分も腕が上つたとか取り扱ひ數が倍になつたとか學問上の事その他の事等種々なる方面から非常な興味と利益が得らるゝ事實際想像以上であらうと思はれる、何はとまれ諸姉は一度試みに著者の言に從つて二年位も記入して見給へ、腕の上達從つて取り扱ひ數の知らぬ間に多くなつて居ること請合である。

二八、妊娠月數の算定

分娩豫定日の算定は諸姉も先刻御承知の如く、最終月經の第一日より起算し二百八十日目即ち最終月經第一日に七を加へたるものを分娩の日。最終月經のあつた月に九を加へるか三を引いた數を豫定月とする方法即ちアー氏の法が一般に行はれて居るが妊娠月數の判定は一寸簡單に之を算定するのは困難である。外診上の所見即ち宮底の高さにより幾月かを判定し得れども、かの葡萄狀鬼胎や双胎、羊水過多では判定を過る恐れがある上にたとへ左樣な病症でなくとも、宮底の高さを判定するは臍を標準として、之は臍下幾指、臍上幾指だから幾月と云ふのであるが、臍のつき所が多少上下に偏在して居ると判定を誤ると云ふので、ある學者は臍を當にせずに縫際上幾寸上にあれば幾月と判定する方が誤りがないと云つた人もある。要するに之も實地上あまり便利でない、更に胎動を始めて自覺するのが妊娠五ヶ月だからとて之を以て標準にする人もあるが之も五ヶ月以後でなくてはわからず確でない、一等便利なのは京都大學岡村博士の新妊曆と稱する器械である、之は何の雜作もなく現在妊娠何ヶ月目の幾日に當るか迄判然と判る樣に作つてある上に、値も安く携帶も便で醫療器械屋などにても販賣して居る、非常に實地上便利である。然し之も最終月經が判然とわかつて居らねば役にたゝない、その外外陰、臍部、臍堅の紫色着色の狀によつて判斷する法を考へた學者もあるが、之は産婆の實地應用にはならない、分娩期豫定の測定即ち何時出來るかと云ふ事を豫言するのは、丁度醫師が、この病氣は何時頃治ると豫言するのに似て左樣に六かしくはないが當らぬと一寸信用が缺ける、之に反し豫言した日にピッタリと出來ると、あの産婆はよく見ると信用が增す、特に妊娠末期、初産婦で兒頭が固定して居つたら分娩が近

いと云へるし、素人でもよく云ふ如く大分落ち下つたからもう產が近いと云ふ如く、宮底の位置でも分娩の近いのが分りはするが姙娠八ヶ月頃に初めて診察した姙婦は、之が八ヶ月やら十ヶ月やら一寸わからぬ事が多い著者もある老練な信用ある產婆と出會はし、ある姙婦につき之は八ヶ月である否十ヶ月であると云ふ議論をやり到々勝た事があつた、こんなときには素人の云ふ近頃大分落ち下つたと云ふ事も參考になるし、診察時子宮の收縮するや否や、臍窩の突出するや否や、腹部の形狀即ち子宮が前傾して前方に高く膨隆する、又は平坦に膨隆するかにより十ヶ月八ヶ月の區別もつくし、內診上經姙初妊の宮口の開口度、臍の着色度、柔軟度の高いのは十ヶ月と云ふ事も參考になる、最も分娩近きにありと云ふ兆候は尿利の俄に頻促となることである。

姙娠前半期四ヶ月頃迄は子宮は骨盤中に蟄伏する故膀胱、直腸を壓し便泌尿利頻促を起し、その後子宮腹腔に出るに及んで常態に復し、更に末期に至り兒頭が小骨盤內に嵌入壓迫して再び頻尿を起す、之は何でもない事だが最も分娩接近の重要なる兆候である。無論前驅陣痛などあれば尙確である。一番困るのは前回分娩後無月經のまゝ更に姙娠した時である。之の時は一寸醫師でも外診だけでは間違ひ易い、子宮の大きさ、抵抗、惡阻の狀（大抵の惡阻は姙娠二ヶ月から起つて五ヶ月頃にやむ）等で前半期が分り、後半期は外診その他すべてを綜合して判定は下さるゝが半確徵の內でも最終月經がわからないと、丁度家の主人が居らぬ樣で頼りない感じがする故に產婆はかゝる場合はすべての方面に心を働かして今姙娠せりや、幾月頃かと云ふ事を判定して誤りない樣にすることが開業上必要なことである。要は愼重に判斷して輕卒に取り扱つてはならないと云ふのである。

二九、名附の御客

貧乏人の子澤山と云ふ事がある。貧乏人には子供が特に多いと云ふ譯ではなく、蝶よ花よと可愛がられる家庭で愛兒を熱望して居るにも拘わらず一人も出來ないとなると、世間の人が一般に羨む樣な家庭に生れて來る兒供は幸福であらうにと云ふ感じで見ると、餘計に子がないと云ふ事が眼に立つ、之に反して夫婦二人限りでさへ働かねば食へない樣な家に、二三人もの兒供があればさぞあの家は世帶が辛からうと云ふ同情心と、子供に

あまりかまわずに捨てゝをく故、子供の服装も悪く暴れ次第で餘計に人の眼を引く、こんな所から出た言葉であらうと思ふ、富者でも子澤山の家もあれば、貧家にも子なきを悲しむ人もある。されど人間の情合、如何に世態が辛からうとも子供が生れて悪い感じがするものでなく、如何に多數の子があつてもその内一人でも死んで快よいものではない、特に三度の飯を二度にしてでも一人子供が欲しいと云ふ樣な所へオギヤーと生れたら、その喜びは又格別、從つて命名の祝宴が賑ふ譯。

當家の兩親を初めとし若夫婦、嫁里の兩親、兄弟、一家眷族に親族知己の一團を交へ、和氣藹々たる一夕の盛宴。祝される當の本人赤ん坊は兩家の爺さん達の眼鑑に叶つた名前を撰定され、此世に生を受けて將來永い一生を過す上に於て幸多かれと、初めて名前を附けらるゝので今日を晴と小い體を包まれる樣に盛裝し、身體の重量よりは衣服の量の方が多いと云つた樣子。一體ならば今夕の如き芽出度き祝宴の原因を作つたのは産婆さんである。産婆さんの功績は正に金鵄勳章物である、故第一の正客樣ではあるが、今晩は赤ちやんの御守役と云つた形で、皆さんの御盃を頂かせる役目、やがて席定まると恭〳〵しく捧げ出す命名書を載せたる三寶を、正客より末席に廻されて赤ちやんの名前を拜見する、よい名だ、勇ましい名だ、可愛らしい名だと色々の賞讃の詞が出ると名附親の爺さんは孫可愛さと善い名だといはれて眼を細くして命名の故事來歴を説明する、正席より盃は漸次末席に廻されてやがて赤ちやん代理の産婆さんに廻される、産婆さんは恭〳〵しく頂いて指の尖に盃をふれて赤ちやんの唇にふれる、皆さんの御流れを頂戴した形、之でもつて御一同と赤ちやんが之の世に於て初めて紹介され御附合が出來た譯、さて此れから桁をハズしての大宴會、サア〳〵産婆さんお席に附いて下さいと強らるゝけれども婦人の身、あまり高い所へも行けず遠慮して末座に座るのを無理に正席の次に座らせられる、暫らくの間は盃の洪水、その間にも産婆賞揚の聲は絶えない、穴あらば這入りたい樣な人もある。之で一座の人々には充分に紹介される譯、その分娩がチト困難であればあつただけ今夜の賞賛は多いと云ふ譯、かくて酒漸く酣となるにつれ、ボツ〳〵お客人の口が初まる、やがては誰かが産婆さんに何か一つと呼ぶものが出て來る、イヤ私は何も知りませんと謙遜しても申々承知して呉れない、こんなときは全く何物も口がないと殆ど困らせられる、産婆さんに口がないからとて誰も悪く云ふ人もなく爲めに産婆の本職に

何等の影響もある筈もないが、こう云ふ時に何かその産婆さんに驚く可き秀でた音樂の腕でもあつてお客人のヤンヤの喝采を得ることが出來たら本職の方の御手柄にも倍した評判となつて非常に都合がよい、こう云ふと産婆も仲々流行らそうと思ふと骨の折れる物だ、皆から呉れるお盃も一つや二つや飲む丈の力はなくてならず、大勢の人に悪感を抱かせぬ樣なスッパリした交際振も必要だし、相當智識階級のお客さんに對する話題の素養も必要となるし、皆がそれ〳〵の餘興をやれば産婆も一つ二つ上品な餘興を見せてやつたら誠に好都合である。されば産婆は平素何か自分の娯樂をやるにしても、か樣の場合に應用の出來る樣な上品な趣味を修めしかもチト、アット云はせる程の腕を拵へて置いて貰ひたいものだ、之は産婆に限らず醫者でも自分の名を廣め人に知らるゝには正面からは技倆の優秀と人格の高邁、側面からは一等優れし道樂例へば圍碁、謠曲、音樂等が必要になつて來る、しかも正面よりは側面の評判の方が早く廣がると云ふのも妙である。

三〇、男女の鑑別

出來る子供の男か女か男女の豫測。是が正確に適中する腕があつたら、その産婆さんの門前は市をなすと云つたもの、どうです諸君は一つ之の方面の研究して百發百中間違ひなく適中出來る樣な方法を考へたら如何、斯う云ふと古く開業して居る諸君は云ふだらう、百發百中とはいくまいが大体は適中すると云ふであらう、が大体ではいけない、半分當つて半分當らない位の程度なら誰でも出來る、そんな事では豫測が出來ると云ふ譯にはいけない、西洋の學者でも此點は非常に研究したものだ、姙娠中母体の營養が善ければ女子、又は母体が衰弱して居ると男子であると云ひ、又之と正反對な事も云ふ、或は尚進んで母体の營養を善くし又悪くすることにより男女思ふが儘の子供を作り得ると云ふ說を立てる學者もある。こんな事でも適確に成効すればその學者の門前も亦市をなすであらう、ある富豪の相續人が男か女かと云ふ事が姙娠中分らない爲めに種々な陰謀がたくらまれたりすることもある。たとへそんなお家騷動的な事はなくとも腹の子供が豫め男か女か判つて居たら大變便利である。我國の木内博士は尿によりて姙娠か非姙娠かを判別し、同時に性の鑑別も出來ると云ふが一般に應用が出來ないものと見えて誰もがして見樣とせぬ、之の豫測は誰もが知りたいと思つて居る事故西洋

の學者が研究する許りでなく我國でも隨分昔から色々の事が言はれておる、第一は胎位の關係で第一胎向卽ち左孕みは男、第二胎向右孕みは女と云ふが如き或は夫婦の年を加へて三で割り切れたら男だとか女だとか、或は臨月の朔日に最初に男の人がその家に入れば男、女が入れば女、と云ふ樣な迷信もある。要するに胎兒の男女を思ふがまゝに作ることは到底神樣の領域を犯すもので一寸出來ない相談の樣に思はるゝけれども、既に出來上つて居る腹中の胎兒の男女を見分ける位のことは科學の進歩して行く今日早晩判る樣になるには相違ない一寸考へて見ても男と女と脉搏の强さ速さが異る故胎兒の心音も異ふ譯、その他種々なる點を考察綜合して鋭き眼光を以て多年經驗を積んで行つたらどこと云ふ根據は發見されなくとも或は判る樣になるかも知れない、今著者は不幸にしてそんな良法の持合せはない、又先覺學者諸先生の方法を紹介することも出來ない、しかも男女の鑑別なる標題を掲げた所以は之の事は和洋共に多くの學者がその良法を發見しやうと苦心して居る旨を述べ、やがて近い將來には出來る樣になるであらう、現今は動物の眼球の入れ替が出來たり、甚だしきは首のすげ替へさへ出來る世の中である。腹の中の胎兒の男女が腹壁と子宮壁一層を透して見分ける位の事は何でもなさそうな筈である。嘗て著者が聞いた事である。アル大學の産婦人科教室の老小使はどう云ふ良法を体得して居るのか、どんな千里眼的の眼光をもつて居るのか知らぬけれどもその教室に來る産婦は此の老僕が一眼覗んで男だ女だと豫言したら一度だつて間違つた事がない、教室の博士も殆ど感心しどうして分ると尋ねても茲と云ふ根據はない、只何となく感得すると云ふのだそうだ、素より事の眞疑は知らないけれど多年の經驗によりてはか樣の事もあり得るもの故諸君も常に此の點に意を注いで居て貰ひたいと思ふのである。

三一、排尿と排便

産婆學の異常分娩取扱ひの條下に陣痛微弱の原因として尿の停滯及便泌が擧げられて居る、あの狹い小骨盤腔にギッシリ詰つて辛ふじて兒頭の最大周圍を骨盤の最大經線に一致せしめつゝ縱軸の廻轉卽ち第二廻轉を營みつゝ出て來るのであるが、其狹い餘地のない骨盤腔の中を直腸も通り、前には膀胱があるのである故、少しでもその內容がたまつて居れば兒頭は出て來るによほど困る譯、從つて陣痛微弱の原因となる、之は分り切つ

た見易い道理であるにもかゝはらず、産婆さんは此點にあまり注意をしない、お産に臨んだら先づ第一に何時便通があつたか、尿利があつたかを聞き、尿がたまつて居れば排尿させ自ら出來ねば嚴重消毒の下に導尿をやるし、便がなければ灌腸して排便させて置くべきである。ある冬の日、百姓家の吹き通しの家での分娩に、どうしても陣痛が強く起らず分娩が進まない、往つて見ると坐産をやつて居る、腹部は冷却して居るし從つて尿もたまり便もない、依つて腹部を溫め尿利を整へ灌腸を施すと間もなく陣痛が正規に強まつて來て安々と分娩した、かう云ふ場合に屢々出會する、特に便通や尿利が滯つて居ると陣痛微弱は幸ひに起さずとも分娩第二期の終り、排臨、發露の際、思はずも放尿したり大便をもらし産褥を汚すことがあり、從つて褥熱を起す動機を與へることがある。何でもない事であるが注意するとせぬとで分娩の結果に塗炭の差が出來る故心得ておかねばならぬ、以上は臨産時の事であるが姙娠中殊に前半期に於て、小骨盤内に膨大子宮が滯んで居るとさも亦之の排尿排便に注意することは必要である。あまり尿がたまつたり便秘すると姙娠子宮の位置を亂し、後屈したり又嵌頓して流産したり、不測の禍を起すことがある。更に産褥中十數日中に膨大したる子宮が復

舊するときにも更に之の事は必要である。産褥では餓に子宮内容が娩出した事とて、さらでだに尿閉を起し易い、尿閉が起れば捨ても置かぬがさほどでもなく只尿通が遠いと云ふのを我慢して居ると、子宮の復舊を妨げ、位置の異常を起し易い、便秘も亦同樣である。只尿便許りでなく他の攝生の惡いことも原因するけれども之等の事は後來の子宮位置異常を起し永く苦しむ原因になり易い故産婆は之の點に特に注意して姙娠分娩産褥とも兩便の通利には最も注意を拂ふことを忘れてはならぬ。

三二、努責と陣痛

努責と云ふのは俗にいきみと稱へ、腹筋の收縮、腹壓、卽ちきばる事、陣痛とは有痛性子宮の收縮であることは説明する迄もなく御承知の筈、之の双つは胎兒娩出力の主なるものであるが、この二つのものゝ使ひ分けを分娩に當つては、うまくやらなければ徒らに産婦を疲勞させる許りでその効力を發揮しない、分娩の器械的作用がよく腹に入つてさへ居れば今更説明しなくとも産婆學で教へられて居るのである故分り切つた話であるが

新しい産婆さんなど試驗前にはよく知つて居ることでも、扨試驗に合格して開業、實地に臨むと、本で習つたことはとんと忘れてユキアタリバツタリ、その取扱ひに少しも學說的の根據がない、第一期開口期に家族諸共エイヤーの掛聲勇ましく産婦に努責させて居るのを見る、産婦自身も陣痛が發作して來るときばりたくなつて來る處へ家族や産婆がきばれ〳〵と云ふものだから顏を眞赤にしてきばつて居る、が開口期に左樣にきばつて何になる、學校の通用門をピツタリ閉めてあるに大勢の生徒が外に出やうと、エッサ〳〵と後から〳〵一生懸命に押して〳〵押しまくつても外へ出られぬ道理、門を一杯に開いて出口を作つて置いてからなら大勢の力で押し出したらダラ〳〵〳〵と外へ出て仕舞ふ、子宮の門が開かない又少しづゝ開きつゝある時に上からいくら力强く押せばとて內容を壓出し得る譯のものでなく、その間の努力は無駄骨折り許りでなく非常に疲れ果て、今後いよ〳〵門が開いてさあ之から押せよ〳〵と云ふときに力衰へてきばれない、こんな事は分りきつた話であるが舊式産婆はしきりにやつて居る、舊式産婆には分娩機轉などは分つて居らぬ故無理もないが、新しい教育を受けた産婆さんが舊來のやり方に習慣づけられて居る、家族や産婦につり込まれて一所にウー〳〵と掛聲かけて開口期にきばらせて居る有樣つたら馬鹿げて見て居れない、さて愈々宮口は全開大し破水をすれば、もはや産道は開けて居るのである。子宮收縮は强くなる、之に腹壓と醫援を與へてやると胎兒はしづ〳〵として第二廻轉を營みつゝ一つて來る、さて愈々骨盤下口に來て、兒頭の毛髮も見える樣になる時機に、之に勢ひを得て舊産婆さんなどは更に掛聲を大にして一擧にきばり出さそうとする、會陰の破れるは當り前と考へて居る先生達には當然の事であろうが、會陰保護法を知つて居る産婆、會陰破裂を起すことを産婆の恥辱と心得て居る諸姉は茲で努責を抑制させねばならぬ、さらでだに、もはや茲迄來ると産婦の最も苦しい時機、たしなみの惡い産婦は大聲で泣いたりわめいたり、我を忘れて亭主を惡樣に罵倒したりする時、隨意的に起る努責も不隨意となり陣痛は戰慄的に强くなる、手放したら大河の堤を決潰する樣に、一擧に兒頭は突進して紙の如く薄く伸張されたる會陰をアワヤと云ふ間にサッと破つて仕舞ふ、この時産婆はよく落附いてマッタ〳〵〳〵、口を開けて〳〵、靜かに〳〵と聲をかけ乍ら押かけ來る兒頭を、しづ〳〵と廻轉して前頭、前額、顏面、頤部とだん〳〵に滑り出る樣に、會陰が破れぬ樣に調節加減して手傳つてやるのが産婆の手腕である。無暗矢鱈にき

ばらす許りが産婆の役かは、そんな事なら産婆さんなど居らなくとも勝手に生れて來るものである。よい産婆拙い産婆と區別のつくのも茲等のチョットの技倆の如何にある。諸姉ソレ分りましたか。

三三、陣痛微弱

陣痛微弱は割合に難産の原因たることが多い、一体難産の原因として、母体にあるものと、兒体にあるものと二つある。兒体にあるものとしては兒体の病變即ち畸形とか臍水腫とか、葡萄狀鬼胎とかがあり、兒体の病氣でなく、胎位胎向の異常、横位、斜位、顔面位等があり、母体の異常としては胎盤の異常、前置胎盤、胎盤早期剥離、母体の病氣としては子癇、その他母體を衰弱せしむる疾病、産道の異常としては早期破水、狹窄骨盤等もある。が陣痛微弱は兒體の異常からも、母體の異常からも來り、狹窄骨盤の如きは母體宇體双方の比較關係の異常から來る、尚前項述べた兩便の停滯も原因たり得るし、早期破水の如きにより開口の遲れたるときにも二次的に來り、腹部の却冷、母體が無暗に早期に努責して疲勞の結果にも來る、胎向胎位に異常なく、只陣痛の微弱丈なら只少し辛抱すればとにかくに娩出はするが、お産が閑どりて甚だ困る、産婆はかゝる陣痛微弱に出會したら、その何が爲めに發來したかを充分探究し到底産婆として除去し得ぬ原因で母兒体に危險を及ぼす恐れあるものは早期に醫治を乞はねばならぬが、さほど迄危險なしと見れば産婆の出來得る範圍で着々處置を施すべきである。先づ産婦があまり興奮して精神的に痙攣性に微弱を來せるものには慰安の詞をかけて室内を小暗く靜かに溫かくして暫らく眠らす樣にし、兩便の停滯があれば排尿灌腸し、腹部が冷へて居ればコンニヤク懐爐で溫罨法をする、尚遲れる樣ならば醫師に頼んでピツイトリンの注射を受ける、それでもいけなくて到底自然分娩が出來ないと見れば分娩手術を行つて貰はねばならぬ、只無暗に陣痛が微弱なからとて原因の除去し得るものも檢べもせず、考へもせず直に醫師を迎へ手術を乞ふのも考へものである上、醫師が來て手術をしなくとも一寸した手當をした丈ですぐ出來ると産家に對する産婆の面目がなくなつて仕舞ふ、かと云つて又之と反對に到底醫治を受けねば分娩出來ぬものを之又原因をも考察せず只々自己の手柄にしやうと醫師を迎ふることを嫌ひ何事もせず便々と時を待ち尿道膣裏を起したり、心臟衰弱を起したりして大事に及び、手柄を

しやうとした事がとんでもない大失敗を招き將來茲の表を通り得ぬ樣な事になる、毎度云ふことだが、産婆と云ふ業務はボンヤリして居ては到底行はれない、勇氣と沈着と時に應ずる機敏とで、イザ分娩と云ふときは頭の中は稻妻の樣に働いて、産婦の一擧手一投足もビシ〳〵と産婆の胸に感應する丈の頭の準備が必要である。

三四、産婆手術料及往診料

産婆の助産料や往診料は全國どこでも同樣とは云はれない、都會と田舍によつて異り、貧富の程度によつて異り、産婆自身の考へにより異り、先方に考へによつても亦異る、醫師にはその地方〳〵に府縣醫師會、市郡醫師會があつて大体は略一定して居る、更に全國的には之等の醫師會を總括する大日本醫師會と云ふのがあつて時に藥價及醫業報酬問題を議題とする樣に迄なつて來た、然し之も近年の事であつて醫師の手術料往診料等も産婆と同じく一定した額はなく先方の心任せであつて、所謂包紙式で幾等包まれても苦情も云へない習慣になつて居た、醫者の藥禮と深山の櫻とりに行かれず咲き次第と云はれて居た、現在では次第に報酬規定を定め可成現金主義にして居るが、田舍などではまだ〳〵年二季の貸附主義、とりに行かれず先方次第のが多い、人情の敦朴であつた昔はそれでもよかつたが、同業者の競爭が激敷くなり、掛け倒す人間が多くなつて來ると、醫師も生活の苦しさに昔の樣に大揚に濟まして居る事もならず、月末には掛取りに行く樣な商賈式になつて來た、爲に醫業も一種の營業だから、など世間から云はれる樣になつた。

かく報酬は醫師會で規定してあつても田舍などではまだ〳〵昔の風が殘つて居て區々になつて居る、藥價はともかく手術料や往診料は特に甚だしい、醫師でさへ然り、産婆の報酬などは今も昔の包紙式であらうと思ふ中には産婆會で規定して居る處もあらうが大多數は先方の御心持ら次第となつて居る、その御心持ちが都會と田舍では大違ひ、都會で一回の助産料十圓を最低として廿圓、五十圓、百圓、五百圓と上には限りがない、田舍で五圓を最低として五十圓位迄、往診料即ち妊娠中の往診及分娩後嬰兒の沐浴の爲めの往診料等は更に一定して居ない、一回の診察往診料を一圓として車夫代を別にとる人もあるし、時には一回五圓以上も取る豪い産婆さんもある。かと思ふと自轉車でかけつけ沐浴料も診察料も往診料も一切タヾと云ふのもある。田舍では殊

に此式が多い、すべて田舍では醫師でも少き物質的報酬を受けて多くの勞働をしなければならぬ、醫業産婆業の如きは筋肉勞働とは云へない精神的方面の勞働であるが田舍醫師や田舍産婆は正に筋肉勞働者と云つてもよい程かけ廻らねばならぬ、從つてその報酬にしても田舍式都會式の條下で述べた通り都會では自己の体面を維持するに足る丈、あまり安賣はせず往診料診察料は相當に取るがよく田舍では出來る丈安く或は先方の御心任せにして、そして出來る丈身を粉にして働き、度々見舞つて遣るに限る、そうすれば流行すること請合である

三五、分娩直後の狀態に注意せよ

産婦の死と云ふ事。分娩後の三十分は母体のもの也。興奮劑

分娩に際して産婦の死亡するのは、そう數々あるべき事でない、分娩は女の大厄だと婦人は怖れるけれど、分娩が左樣に危險なものであつたら女の人は結婚も出來ないし、又結婚したら最後、心配で〳〵遂には分娩前に心配死をしなければならぬ、然し古往今來、世界中の人類から畜類に至る迄幾千万幾万億の生物は皆分娩してその種族の繁殖をなし來つたのである。案ずるより産むが易い、皆コロ〳〵と何の苦もなく出來るから一度の出産にこりずに一人で十數回も分娩する人もあるのである。然しそれは正規の分娩の時の話で、數は非常に少いけれども異常がもし起ると危險が起つて來る、然しその異常と云ふ奴が幸ひに左樣に澤山あるものでない、しかも妊娠中から相當注意をすることによつて異常の數は又遙かに少くなる、熟練なる産婆になると一ヶ年二百乃至其れ以上の分娩をとり拔つて居て異常が一つか二つ、その異常が又母體の生命に關する程度に至らずして適當な處置の下に無事に經過する、斯樣に考へ來れば熟練なる産婆には産婦が死亡する樣な異常には殆ど出會することがないと云つてよい、否常から預つて居る産婦にはタトへ異常が起る素因のある妊婦でも悉く之を事前に處置し得て、産婦の生命に危險を釀す樣なことは絶對にないと云つてよい、只ウカ〳〵と取拔ひをして居ると思はぬ失敗をすることがある。特に隨分困難な産で、産婦も産婆もヤット兒頭が娩出してヤレ嬉しや

と安神した時によく起る、即ち子宮收縮の狀態も注意せずに居ると後產期の大出血を起し、アワヤと云ふ間に折角苦心して分娩させた功勞も束の間に水の泡となる、一體分娩後の三十分は母體のものなりと云ふ格言がある。子供も大切ではあるが小供はたとへ死んでも又出來るのである。母體は一度殺してはとりかへしはつかぬ小供は死んでよいと云ふのでは無論ないが小供の命と母の生命とを秤にかけて見て子供の生命は犧牲にしなければならぬ場合がある。たとひ異常がなくとも分娩後暫らくは初生兒を溫包して片寄せ置き、母體の子宮の收縮狀態一般狀態をよく注意し、徐ろに後產の娩出を待ち完全に後產娩出を終り、其後異常なきを見屆けた上で初生兒の處置にかゝる。初生兒處置の間にも分娩後三十分位の間は不絕母体の一般狀態に心を放してはならぬ。著者の經驗する所によれば、たとへ兒體分娩する迄はうめく樣に悶へ苦しんで居た產婦も、兒體娩出して俄然苦痛がとれ、爽快を覺へ高聲で活潑にア、樂になりましたと云ひ、小供の衣服の世話などをシッカリとやく樣な調子であれば先づ大丈夫と安神して宜しい、が娩出したるにかゝわらず尙ウーウーと苦しそうな息づかいをしたり、物も碌に云はず、何となく元氣なく或は眼先に火花がチル樣なとか眼先が暗くなるとか、上せるとか元氣のない聲で訴へるもの、聲をかけても大儀そうに碌に返事もせず又默つて居るものなどは大いに危險、もはやその時に異常が起つて居るのである。子宮の收縮惡く出血をしつゝあるか、子宮破裂を起して居るか、心臟衰弱を起して居るか、何しろ異常があるのである故決して油斷は出來ない、速かに醫師の來診を乞ひ、醫師の來る間にも興奮劑を與へ、出血貧血の豫防に枕をはずし、低くする、產婆の應用出來る興奮劑は、熱き茶、コーヒ、酒、赤酒、ブランデー、コニヤック、ホフマン氏液（一回一、〇―二、〇）位であるそれ以上有力なる强心劑ジキタリス劑カンフホル等の注射、食鹽水の注射等は產婆には許されて居らない、許してもよい筈であるが弊害を伴ふ故に許さないのである。されば事茲に至つて狼狽しても仕方がない、たとへ醫者がかけつけても効力のない場合が多い故か樣な狀態が起る前兆を銳敏に豫知して手當の時機を過らぬ樣常から心掛けて居らねばならぬ。

三六、墮胎の相談

年の頃は廿四五、一寸澁皮のむけた、純粹の田舍娘でもなく、かと云つて都會の嫁さんでもない、普通の婦人患者かと思つて「どんなに悪いのです？」と尋ねかけても何等病狀をも云はず醫師と向ひ合つたまゝ暫らくは無言、耳でも遠いかと思つて更に聲を大きくしてその訴へを聞かうとすると、思ひ切つた風で懐から一通の書狀を出して見て下さいと云ふ、ハハア怪訝いなと思つて讀み下す文面「先生樣誠に申悪うございますが私事ヒョッとの思ひ誤りからただならぬ身體になりました、このまゝ居つては生きては居れません、淵川へでも身を沈めてもと思ひますが世間の事を思ふとそれもできません、どうぞ先生の御情けで月やゝの下りる御藥を頂きます云々」と云ふ奴、エ、又うるさい奴がと思ふけれどもワザと空とぼけ「月やくの下る藥などゝ云つてもそれはありませんよ、賣藥の廣告に月やく不順の人が服めばすぐ下りるなんか、かいてあるのはアリヤ嘘ですよ、子宮が悪くて月經が止まる樣なことは滅多にない、多くは全身の病氣の爲です、一體女の月經の止まるのは既婚か、然らざればアル種の全身病の爲めです、見た所貴女は月經がとまる樣な全身病のある人とも思へませぬ、捨てゝ置いたら自然に月經がありましやう」と突き放して歸そうとするが先方の意志が當方に通ぜぬものと思ふのか却々歸ろうとは云はぬ、又生きて居れぬの死ぬるのと眞物の涙を流して哀願する、仕末に了へない、「君々心得違ひをしてはいけませんよ、心にもなく妊娠したと云ふ事は世間にいくらもある。私生兒を產んだと云ふては世間に對して恥かしからうか、之を墮したと云ふてはそれこそ夫以上の恥辱で一生浮ばれない深みへ落ちる、自分許りでない兩親や兄弟、家の名を恥しむるものだ、思ひ返してそんな心を起すものでない、思ひ切つて近親者に打明けて處置をとりなさい、知れぬと思ふのが抑々アブナイ、貴女には同情するが自分も貴女の爲めに家も妻子もを棄る譯に行かない、自分許りでない何處の醫者に行つても產婆に頼んでも自分が刑事上の罪人迄になつて貴女を助けて上げやうと思ふ人は一人もない、それよりか何とか分別して姙娠末期迄どこかへ世間を避けて正規に分娩して、小供を養子にやるか、あづけるか、何とかして歸り、徐に世間體をつくろへばよいではないか、そんな心を起すのは死ぬにもまして恐ろしい事だ、悪い了簡だ」と云つて聞かせても却々耳に入らないが、此方が親みを聞かぬ意志が分ると仕方なしにすご〳〵歸りかけるが尙他の產婆さんにも迷惑だらうと止めを差して歸す「產婆さんに頼んだ處で產婆さんだつて身が大切、誰も聞くものはあり

ませんよ、それに産婆には小供を墮したりする方法は今の産婆には教へてはありませんよ、殊に産婆にはそんな事で身を誤つてはならぬ故我々が教へた産婆には、もし墮胎の相談を受ける樣な婦人が來たら、その人の腹は其後だん〳〵膨れゝばよし、もし知らぬ間に腹が小さくなつて居る樣であつたら、どこかで墮したんだから警察へ密告せよと云つてあ位るである故、ウッカリ産婆にそんな相談をかけてはならぬ」とおどし附けて置く實際又産婆によつては此の言ひ渡し方で撃退して居る人もある。

こんな相談の仕方をする奴もあるが、更に人を醫師の臺所に廻し「此方は婦人科の御醫者さんとして有名ですが、隨分六かしい患者が此方の御藥で治つた話を聞いて居ります」とまづ褒めて置いて「私の近所の四十歳許りの女の人ですが、いつも血の道で上せる人で、近來度々上せたり、胃腸が悪かつたり、月のものを三四ケ月も見なかつたり、あちらこちらへ病が拔け廻るので此方の御藥を頂いて上せ、古血がすつかり下りたら血の道も治るだろうと思ひますが、一寸一服頂いて歸つてくれと頼まれましたので、どうか頂かせてやつて下さい何れ近々伺ふとは申して居りますと云ふ、此丈聞けば眞當の子宮病の樣であるが患者を見ずして藥は與へられないと云ふといろんな事を餘計に喋りその男の態度、物腰が怪しいので色々カラかつたり尋ねたりしてをる内に遂に本音を出す、即ち己れの情婦が姙娠したのでソコは素人ウマク婦人科醫に月經催進の一服を盛つて貰つて墮胎してしまをうと云ふ寸法、更に秘密の私生兒ではなくて正當なる夫婦の仲の小供であるが生活上の問題から自分の身體が弱いからとか今度お産したら命を取られる樣な氣がすると云つて妊娠中絶をしてくれと平氣で云ふ奴がある。中には良家の子女で親の知らぬ間に私生兒を孕み世間の手前、嚴格なる父親の手前、家門の破滅と産婆に何とかしてくれないかと頼み込まれ弱らせられる樣な誠に氣の毒なのもある。無論之等の相談は産婆よりは婦人科醫の方が多からうが産婆と云へば墮胎も出來るものと思つて居る手合が多い故隨分と産婆にも相談せられることが多からうと思ふ、素より現今の産婆に誰も姙娠中絶の方法は教へてはなからうが、あまりの氣の毒さにツイ〳〵加減な事をして墮胎の疑ひをかけられたり、かけらるゝ樣な指圖や言動などしてはならない、本卷末尾記載せる刑法にも之に關する條文がある。僅かの不注意の爲めに流行どころか産婆の業務も名譽も破滅を來す樣なことになる故こんな相談はその不心得をよく諭しキッパリと思ひ止まらしむる樣にし

なければならぬ、一時特意先をしくぢつてもよろしい、夫が先方を死地より救ふ事になるのである。

三七、座産と寢産

天保時代の舊式産婆が次第に凋落して漸次新教育を受けた助産婦諸姉が多くなつて來たにもかゝわらず、今も尚座産でなければしない産婦が多い、座産と寢産との利害得失は夫れ〳〵あるにはあるが座産の特長としては主として産婦が努責を要するときに力が充分に入れらるゝに反し寢産では踏ん張る力が入れられない故座産に馴れた産婦は寢産は賴りがなくて仕悪いと云ふ、寢産でも近頃踏ん張るに都合のよい禮樣のものが出來たり分娩用寢臺ですれば之の欠點は除くことが出來るが一般には用ひられない、其れに坐産をする人の考へは只踏ん張るに便利だと云ふこと許りでなく、産婦は絶對に頭を低くしてはいけない、横になつてはいけない、分娩が濟んでも七夜の間は横になれないものと思ひ込んで居る、故に是非に横に寢なければならぬ樣な身體の狀態になつた時は横臥藥と稱するものを服用して始めて安神して横臥する位である。然しそんな理屈のある譯はなく何時横になつてもよく、始めから仰臥又は側臥で分娩して差支ないのである。かその理由は知らずに習慣上一途に思ひ込んで居るのである。坐産をすると多期などは腹部を露出して冷却し、陣痛微弱の原因となり、胎兒の進行の狀態を檢査する爲めに内診しても仕悪て都合もあしく、最も不便なのは會陰保護が出來悪い、更に危險なのは分娩後又は前置胎盤の如く分娩中子宮出血のあるときは危險此の上もない、腦貧血を助成する樣なものである。故に分娩は寢産に限るのであるが産家産婦によりては絶對には之を拒んで坐産でなければ承知せぬ所もある故寢産をしなければ分娩させぬとて歸る譯にも行かぬ故、坐産をさゝねばならぬ時もある。さればは學理的の根據を充分頭に入れて坐産の經驗も一應はして置く必要がある。著者は茲に間接に坐産の獨した悲慘なる實例を次に述べて參考に資することにしやう。

三八、吾作の家内は御近所の親切が殺したのだ

ケタタマしい戸を叩く音に、ふと夢を破られて耳を聳てるとお向ひの先生の門の戸を割れる樣に叩き續けて

吾作の家内は御近所の親切が殺したのだ

居る。夜は今や二時寢入り端と奥深いのとで中々起きぬらしい。が、やがて答へがあつたものと見えて百姓醫が明かに聞きとられる。

「何町の吾作の家内が只今産をして、子供は出來たのですが、後が來ないので大變樣子が悪い樣ですから、すぐ來て下さい」。

と大聲に叫んで居る。オヤ吾作の家内がそんなに悪いのかしら。吾作は貧窮ではあるが心掛けの好い男だ、あの子澤山の中で家内に若しものことでもあつては大變だ、近い所だ、私も一寸見舞に行つてやろう。と起き上つて寢衣の上に羽織を引つかけなどして居ると、やがて先生の門の戸がガラ〳〵と開く音がする。先生は自轉車で行くらしい。自分も庭へ下りて自轉車の用意にかゝる。所へ第二の使が來たものと見えて

「ア先生いらつしやつて下さいますか、どうぞ御早く願います。病人が大變苦しがりますから私が又お迎ひに伺ひました」。

といつて居る、急いだものと見へてハーハーいふ息遣ひまでが聞こえる。やがて自轉車についてバタ〳〵と駈け出した自分が車を引き出した時には早半丁も先を三つの提灯は走つてをる。

吾作の家に近づいた、第三の使が立つてをる。

「どんな樣子だ？」

「先生どうも樣子が怪しい樣ですぜ」

第四第五の提灯さげた使は半丁置きに立つてをる、餘程危篤らしい。

吾作の家は町端ずれの共同長屋で表に這入れば直裏に出られるといふ一間限りの茅屋である、從つて近隣の嬶アどんやおやぢ連中が急を聞いてかけつけ來り上といはず庭といはず表にも裏にも無慮二十人許りの所謂御近所の衆が騒いでをる。

「吾作さんや。確かり抱いておいでよ。産人が仰け反つては其れ切りだよ」

「寢させてはいけないよ。後から確かり抱いておれよ」

などと群衆は口々に注意を與へてをる、吾作は群衆の注意のまゝ一生懸命に寢かすまいと産人の後から抱きし

めてをる、産人はと見ると蒼白な顔うなだれたまゝ座らせられて居る。

「ヤ先生が見えた！」

と後ろの方から誰かが叫ぶと群集はパット道を開いた、先生は無言のまゝ群集の中をスッと通り病人の前にピタと座つて静かにブラリと下げてをる病人の手をとり脈を見ながら顔を覗き込む。群集は様子如何にと堅唾を呑んで控へて居る。先生は暫らくして産人から手を離し

「イケない」

と一口叫んだ

「へイ？」

と亭主は怪訝な眼を向ける、群集はハタと口を噤んで静まり返り皆の視線は期せずして先生の顔に集中された

「遠くに死んでるよ。駄目だ！」

重くるしい、しかも叱る様に先生は叫んだ

「ヒエ！」

亭主は度を失ふ。群集は又どよめき出した

「どうしたのだろう今迄唸つて居つたのだに。」

「可愛相なことをしたよ。」

「死んだとよ……。」

先生はキットなつて半群集に半亭主に向ひ叱る様な口調で叫んだ。

「なぜ産婆につかない？産をあまり輕しめる故こんなことになるのだ、其日稼ぎの者が十才を頭に五人の子を殘され六人目に出來たこの子は生きて居る、こんな悲しい事があろうか。皆さん此産人はなぜ死んだと思ふ。今下を見ると可なり血も下りて居る様だ。今皆は産人を寢かすな抱いて居れと注意して居つた。その寢かすな抱いておれとの注意が遂に此産人を殺したのだ。昔から産人が仰け反ると悪いといふが、それは大なる間違ひだ、少くともこんな場合には大間違ひだ」

吾作の家内は御近所の親切が殺したのだ

と斯ふいつて先生は群集の顏を覗みつけた、皆は默つて呆氣に取られてをる、先生は更に語を次いで

「一休産をして小兒が出るとその時、身体の血は多く子囊の方へ集まつてをる。それが後産が出ない爲に子宮が縮まらぬ爲どんどん子宮から血が下りる。すると血は水と同樣高い所から低い所へ流れる性質がある。こうやつて抱いてをると頭が高い、頭の血は下つて子宮から出て頭卽ち腦に血がなくなる。腦に血がなくなると腦貧血といつて顏色が青くなる遂にはズリ入つて死んで仕舞ふ、その際頭の方を低くしてやると身體の血は頭に流れズリ込むことが少くなる、その間に醫者が來れば適當の處置をして助けることも又出來ただろうものを、抱いて臥させなかつたと云ふことが遂にこの人を殺した、産婆が居ればこんな間違いはないのである。ア、死んだものは遂に取り返しがつかぬのである。諸君よ決して此れからは産人を抱き起して置かねばならぬなどいふ間違つた考へを持つてはならぬ。此の情けない有樣を見よ！」

と先生は宣告した、亭主は氣も轉倒して居るか、涙も出ないと見ゆる、五人の小供はお母さんと冷たい母の膝にとりすがつてワツト一齊に泣き出した、今出來た小兒迄が火がつく樣に泣き叫ぶ。群集は只呆れて口々に低聲につぶやくのみであつた。

三九、恐ろしい出血と手當及その實例

分娩に際しては種々の危險が起り得る。例令ば心臟衰弱或は痲痺、子癇痙攣、子宮の破裂等の如きも危險は無論危險であるが一等恐ろしいのは子宮出血である。しかも之が産婆さんの常に遭遇する失敗の基となるもので實際又突然に發來する子宮の大出血程恐ろしいものはない、醫者よ注射よと騒いでも、どうすることも出來得ばこそ、見て居る内にズル〳〵〳〵と彼の世へ行つて仕舞ふ、今迄無事分娩を喜んで居た家族はもとより、或は初めから難産で心配で緊張して居た家族の人々も、突差の間に産婦の命が奪ひ去られ、むなしく魂去つた骸が産床に横たはつて居るのを見ると、今の今迄話もしたり苦しんで居た産婦が庭におりて上つて來るまに早幽明境を異にし呼べど答へず情けない此有樣に喜んで居た歡喜の情も心配して居た心の塊も俄に緊張が去つて氣拔けの體、之に侍する産婆の立場、慰むるに詞なく、辨解も出來ず、詫する事も出來ず、立つても居れ

ず、座つても居れず、かと云つて急に引きとる譯にも行かず、何ともかとも名狀すべからざる狀態で立すくんで仕舞ふと云つた形、一時呆氣にとられ氣拔け狀態になつた家族も急に悲しみに捕はれ、一しきり愚痴りつゝも悲歎に暮れる、それがすむと知己親戚に俄の報知、近所合壁は寄り集まり上を下への大騒動、出來ぬ内こそ產婆さんだが、か樣に產婦が死亡しては最早產婆に用はない、中には隨分產婆に聞こえよがしの皮肉を高聲に話したり獨言するものもある。かと云つて言葉尻を捉へて爭ふ譯にも行かず、どう云つたか、こう云つたか一切分らず何がなしにお茶を濁して逃ぐるが如くその家を飛び出して、始めて籠の鳥が放たれた樣にホットする敢て自分が失敗つた爲ではなくとも、人間の情としてか樣の場合に遭遇した人はこんな心持を味はつた事があるであらう、この最も恐るべき子宮出血中、分娩前及分娩中に來るものはブラーゼンモーレ、前置胎盤等はあるが、之等は前以て幾分の備へをなすべき餘裕はあるが、最も突發的に來つてしかも不幸の結果を起すべきは後產期の出血即ち弛緩性出血と云ふ奴である。されば胎兒娩出後は第一に子宮の收縮狀態如何に注意し、子宮の境界明瞭に石の樣に硬ければよろしいが、子宮の境界も分らず弱い樣であれば、輕く宮底を摩擦し收縮を促し、頭部は低くし下腹には氷囊を置き熱き膠洗滌を行ひ、一方醫師に急使を派し、出血が止まらねば消毒ガーゼ澤山にて强く膣にタンポンを施す、尙醫師も來らず、出血は止まらず、母體危險と見れば長さ六尺餘の摂指位の太きゴム管を產婦の臍の所の腹部に卷、力一杯にしめつけて腹部大動脈の血行を壓迫する所謂モンブルヒ氏の驅血帶をする、然し之はやりつけぬと一寸やり悪い、近來大動脈の壓抵器と云ふものも出來て居る、之の方が用ひ易からうと思ふ、原理は矢張り子宮に行く動脈を壓迫して血行を一時的吐絕させる目的である。この大動脈壓迫も徹底的に行はれず半可にやると、子宮に靜脈の鬱滯を起し却て子宮出血をます結果となる尙之もうまく行かず出血は尙行はれ、醫師は來らず危險刻々に迫ると云ふときは已むを得ず手を嚴重に消毒して後產を手を以て子宮壁より剝離し、宮底を子宮腔の內と腹壁上とより摩擦するのであるが大抵の場合胎盤を剝離除去すれば子宮は收縮し止血するものである。然し之は常には產婆に許されたる手術にあらずして非常の場合の應急手當である。されば產婆は大切なるお產又は母體衰弱して產後に大出血でも來そうな心配のある產婦には娩出期にピツイトリン一筒をしてもらつてをけば、安神である。ピツイトリンは前述せる如く陣痛催進

の効もある上、後出血の豫防にもなる、尚醫師が來れば食鹽注射もするであらうし、止血劑の注射もしやうしその他万般の適應手術をして呉れる譯である。今姙娠分娩時の出血に就て二三實例をあげてお話して見樣、多少の參考ともなるであらう。

一、前置胎盤

前置胎盤と云ふ異常は少い樣で可なりに遭遇するもので、隨分嫌な奴である。云ふ迄もなくその胎盤の附着の狀態により出血に輕重はあるが、屹度出血はやる、特に全前置胎盤の如き姙娠後半期に宮口が開大するにつれ胎盤が剝離し、時々可なり多量の出血をする、内診上の所見によりても前置胎盤の診斷をなし得ぬ事もないが之の妊娠後半期に時々起る出血により多くは、初めて前置胎盤でないかとの疑ひが起り、産婆も不安を抱き、妊婦も驚くのである。一度前置胎盤と決定しても、分娩せぬ内は之か治療や出血の豫防は出來るものでない、分娩させて胎盤を娩出すればそれで出血も止まり前置胎盤なる異常も消失するのであるが、姙娠中は對症的に姑息な止血法を講ずるだけで、根治の方法はない、而已ならずその對症療法も多くの効力は望めない、特に分娩に際しては危險之の上もない、ドット迸出する出血は恐ろしい勢ひで小指の樣な血線が飛ぶ、アット云ふまに産婦は失神脱血死をすることがある。そして陣痛が起れば起る程、宮口は開大し、從つて胎盤の剝離は大となり出血面が廣くなる、醫師は宮口二指を通ずる程開けば人工破水して宮内の壓を減じ出血を緩和し、同時に胎兒を足位に廻轉し胎兒の大腿部で宮口を壓迫し胎盤を宮壁に壓着して止血の役目をなさしめ、徐々に廻轉して胎兒を娩出せしめ胎盤を娩出するのである。その足位に廻轉するまにも恐ろしい出血は醫師の手術衣を紅に染むる程物すごい。

されば姙娠後半期に出血を見、前置胎盤の疑ひあれば、分娩期近くなれば醫師の内に入院させ充分の準備が出來て居る處で分娩を遂行するのが安全第一である。若し又入院出來ぬ樣なれば産婦によく言ひ含め、産氣つきたる時は時を移さず産婆及醫師の來診を乞ひ、萬遺漏なきを期すべきである。次の實例の如きその不幸の轉歸をとつた責任は産婦にあるか家族にあるか賄又産婆にあるか考へて見て下さい。

産家は村でも相當の資産家、産婦は第六回目の分娩、産婆とても永年開業して居て熟練せる者、前置胎盤に遭遇した經驗も度々あり、現にその日の三四日前同じ村のこの家の隣家で偏緣性であつたが前置胎盤があつて直に醫師を迎へ廻轉手術し健全なる胎兒をさへ産ましめた近い經驗がある。この産婦は妊娠中二三度此の産婆に診察して貰つた、最近一二度中等度の出血をしたがすぐ止まつた故産婆には告げずに經過した、愈々分娩が開始すると共に子宮出血があり出したので招きに應じて來診した、この産婆は直に前置胎盤ならんとの疑ひを起し午後四時頃に來診して夜分七八時頃に之は容易ならぬお産なることを告げ、婦人科醫の來診を乞ふことを産家に勸めたがさほど驚かない、その内にも陣痛が漸次に强くなるにつれ出血は稍多量になつて來た、産婆は心も心ならず婦人科醫招聘を再三促したので産家では初めて耳を傾ける樣になつたが尙もその家に常に出入する内科醫を呼ぶことにした、やがて内科醫が來て出血と聞き、内診もせず服藥を勸め歸つた、醫師の歸宅後服藥したとて出血の止まるべくもない、尙激しく出血する、堪まりかねて産婆は又婦人科醫の招聘を懇請したが無知なる家族は再び前の内科醫を迎へて來た、來た内科醫先生も先生、それでは注射をして置く故それで止まればよし止まらなかつたら婦人科醫を迎へよと呑氣なことを云つて注射して歸つた、麥角かエルゴチンの注射をしたのであらう、産家はコンナヘボ醫者でも常々かゝりつけの得意の醫師の云ふ事である故信用し切つて居る更に時は過ぎた、午前四時多量の出血をしたゝめ産婦は貧血し苦しみ出した、附き添ふ産婆も到々業を煮かし婦人科醫を迎へて呉れぬならお暇を頂き歸りますと歸り仕度をして見せた所、漸く親戚家族相談の結果婦人科醫を招くことにしたが之が午前八時、産婦は既に出血は止まつて居るが心臟衰弱は稍著明である。招かれて來た醫師は使が二里の里程を往復する時を經て漸く午前十時に到達したが此時は早産婦は出血はせぬが脈搏極めて微弱、直に手術にかゝる勇氣がない、先づ食鹽注射を試み脈搏の恢復を待ちその間に宮口を閉せる胎盤に穴を穿ち胎兒の廻轉に便する樣にして直にも兒足を引き出そうかと思つたが、まて暫し、母體の狀態が怪しい、出血がない故一時手を引き産家に豫後の不良を申し渡したが産家は今一人婦人科醫の立會を要求した、こんなことをして居ては甚だ時期を逸する不親切なやり方ではあるが出血はなし、母體の心臟は怪しい上産家はこの婦人科醫に充分信用を置かぬ素振が見えるので今手術して不結果は眼に見えて居る、不結果の全責任を娩出者